

して請益す。頭云く、何ぞ早く問はざる。僧云く、未だ敢へて容易にせず。頭云く、雪峯我れと同條に生ずと雖も我れと同條に死せず。末後の句を知らんと要せば只這れ是れ。

【頌に云く】切磋し琢磨し、變態し殺訛す。葛陂化龍の杖。陶家居蟄の梭、同條に生ずるは分數あり。同條に死するは分多無し。末後の一句只這れ是れ。風舟月を載せて秋水に浮ぶ。

第五十一則 法眼缸陸

【衆に示して云く】世法裏に多少の人を悟却し、佛法裏に多少の人を迷却す、忽然として打成一片ならば、還つて迷悟を著得せんや也た無しや。

【擧す】法眼、覺上座に問ふ、缸來か陸來か。覺云く、缸來。眼云く、缸甚麼の處にか在る。覺云く、缸は河裏にあり。覺退いて後、眼却つて傍僧に問うて云く、爾道へ適來の這の僧眼を具するや眼を具せざるや。

【頌に云く】水、水を洗はず。金、金に博へず。毛色に味うして馬を得。絲絃靡うして琴を樂しむ。繩を結び卦を畫いて這の事あり。喪盡す眞淳盤古の

心。

第五十二則 曹山法身

【衆に示して云く】諸の有智のもの譬喩を以つて解することを得、若し比することを得ず、類して齊うし難き處に到らば如何ぞ他に説向せん。

【擧す】曹山、徳尙座に問ふ、佛の眞法身は猶ほ虚空の若し。物に應じて形を現ずることは水中の月の如し。作麼生か箇の應ずる底の道理を説かん。徳云く、驢の井を觀るが如し。山云く、道ふことは即ち大際だ道ふ、只八成を道ひ得たり。徳云く、和尙又如何。山云く、井の驢を觀るが如し。

【頌に云く】驢井を觀、井驢を觀る。智容れて外る、無く。淨涵して餘あり、肘後誰か印を分たん。家中書を蓄へず。機絲掛けず梭頭の事。文彩縱横意自ら殊なり。

第五十三則 黄檗墮糟

【衆に示して曰く】機に臨んで佛を見ず、大悟師を存ぜず。乾坤を定むる劍、人情没し、虎兇を擒ふる機、聖解を忘す。且く道へ是れ甚麼人の作略ぞ。

【擧す】 黄檗、衆に示して云く、汝等諸人盡く是れ瞳酒糟の漢。與麼に行脚せば何れの處にか今日有らんや。還つて大唐國裏に禪師無きことを知るや。時に僧あり出でて云く、只、諸方の徒を匡し衆を領するが如きは又作麼生。檗云く、禪無しとは道はじ、只是れ師無し。

【頌に云く】 四岐分れ絲染んで太だ勞勞。葉綴り花聯つて祖曹を敗す。妙に司南造化の柄を握つて。水雲の器具甄陶に在り。繁碎を屏割し。毳毛を剪除す。星衡藻鑑、玉尺金刀。黄檗老秋毫を察す。春風を坐斷して高きことを放さず。

第五十四則 雲巖大悲

【衆に示して云く】 八面標幟、十方通暢、一切處放光動地、一切時妙用神通、且らく道へ如何が發現せん。

【擧す】 雲巖道吾に問ふ、大悲菩薩許多の手眼を用ひて作麼かせん。吾云く、人の夜間に背手して枕子を摸するが如し。巖云く、我會せり。吾云く、汝作麼生か會す。巖云く、徧身是れ手眼。吾云く、道ふことは即ち太聯道ふ即ち八

成を得たり。巖云く、師兄作麼生。吾云く、通身是れ手眼。

【頌に云く】 一竅虛通、八面標幟。象無く私無く春律に入り。留せず礙せず月空に行く。清淨の寶目功德臂。徧身は通身の是に何似ぞ。現前の手眼全機を顯はす。大用縱横何ぞ忌諱せん。

第五十五則 雪峯飯頭

【衆に示して云く】 氷は水よりも寒く、青は藍より出づ。見、師に過ぎて方に傳授するに堪へたり。子を養うて父に及ばされば家門一世に衰ふ。且らく道へ父の機を奪ふ者は見れ甚麼人ぞ。

【擧す】 雪峯徳山に在りて飯頭となる。一日飯遅し、徳山鉢を托げて法堂に至る。峯云く、這の老漢鐘未だ鳴らず鼓未だ響かざるに鉢を托げて其麼の處に向て去るや。山便ち方丈に歸る、峯、巖頭に擧示す。頭云く、大小の徳山最後の句を會せず。山聞いて、侍者をして巖頭を喚ばしめて問ふ、汝老僧を肯はざるか。巖遂に其の意を啓す。山乃ち休し去る。明日に至つて陞堂、果して尋常と同からず。巖掌を撫して笑つて云く、且喜すらくは老漢最後の句を會せり。

他後、天下人伊を奈何ともせず。

【頌に云く】 末後の句會すや也た無しや。徳山父子太だ含胡す。座中亦江南の客あり。人前に向つて鷓鴣を唱ふることに莫れ。

第五十六則 密師白兔

【衆に示して云く】 寧ろ永劫に沈淪すべくとも諸聖の解脱を求めず提婆達多は無間獄中に三禪の樂を受け、鬱頭藍弗は有頂天上に飛狸の身に墮す。且らく道へ利害甚麼の處に在るや。

【擧す】 密師伯、洞山と行く次いで、白兔子の面前に走過するを見て、密云く、俊なる哉。山云く、作麼生。密云く、白衣の相に拜せらるゝが如し。山云く、老々大々として這箇の語話をなす。密云く、爾又作麼生。山云く、積代の簪纓暫時に落薄す。

【頌に云く】 力を霜雪に抗べ。歩を雲霄に平うす。下惠は國を出で。相如は橋を過ぐ。蕭曹が謀略能く漢を成す。巢許が身心堯を避けんと欲す。寵辱には若かも驚く深く自ら信ぜよ。真情跡を參へて漁樵に混ず。

第五十七則 嚴陽一物

【衆に示して云く】 影を弄して形を勞す、識らず、形は影の本たることを、聲を揚げて響を止む、知らず、聲は是れ響の根なることを。若し、牛に騎つて牛を覓むるに非ずんば、便ち是れ楔を以て楔を去るならん。如何が此の過を免れ得ん。

【擧す】 嚴陽尊者、趙州に問ふ、一物不將來の時如何。州云く、放下著。嚴云く、一物不將來、箇の甚麼をか放下せん。州云く、恁麼ならば擔取し去れ。

【頌に云く】 細行を防がず先手に輸く。自ら覺ゆ心麤にして媿らくは撞頭すること。局破れて腰間斧柯爛る。凡骨を洗清して仙と共に遊ぶ。

第五十八則 剛經輕賤

【衆に示して云く】 經に依つて義を解するは三世佛の冤、經の一字を離るれば返つて魔説に同じ。因に收めず果に入れざる底の人、還つて業報を受くるや也た無しや。

【擧す】 金剛經に云く、若し人の爲に輕賤せられんに、是の人先世の罪業あり

て應に惡道に墮すべきに。今世の人に輕賤せらるゝが故に。先世の罪業則ち爲に消滅す。

【頰に云く】綴綴たり功と過と、膠膠たり因と果と。鏡外狂奔す演若多。杖頭擊著す破竈墮。竈墮破す。來つて相賀す。却つて道ふ從前我に辜負すと。

第五十九則 青林死蛇

【衆に示して云く】去れば即ち留住し、住すれば即ち遣去す。不去不住渠に國土なし。何れの處にか渠に逢はん。在在處處、且らく道へ是れ甚麼物か恁麼に奇特なることを得るや。

【擧す】僧青林に問ふ。學人徑に往く時如何。林云く、死蛇大路に當る。子に勸む當頭すること莫れ。僧云く、當頭する時如何。林云く、子か命根を喪す。僧云く、當頭せざる時如何。林云く、亦廻避するに處なし。僧云く、正恁麼の時如何。林云く、却つて失せり。僧云く、未審、甚麼の處に向つて去るや、林云く、草深うして覓むるに處無し。僧云く、和尚も也た須らく隄防して始めて得べし。林、掌を拊して云く、一等に是れ箇の毒氣。

【頰に云く】三老暗に柂を轉じ、孤舟夜頭を廻す。蘆花兩岸の雪。湮水一江の秋。風力帆を扶けて行いて楫さず。笛聲月を喚んで滄洲に下る。

第六十則 鐵磨牯牛

【衆に示して云く】鼻孔昂藏、各丈夫の相を具す。脚跟牢實、肯て老婆禪を學ばんや。無巴鼻の機關を透得せば、始めて正作家の手段を見ん。且らく道へ誰か是れ其の人。

【擧す】劉鐵磨、瀉山に到る。山云く、老牯牛汝來や。磨云く、來日、臺山に大會齋あり。和尚還つて去らんや。山、身を放つて臥す。磨、便ち出で去る。【頰に云く】百戰功成つて太平に老ゆ。優柔誰か肯て苦に衡を争はん。玉鞭金馬、閑に日を終ふ。明月清風一生を富む。

第六十一則 乾峯一畫

【衆に示して云く】曲説は會し易し一手に分付す。直説は會し難し十字に打開す。君に勸む分明に語ることを用ひざれ。語り得て分明なれば出づること轉た難し。信ぜずんば試に擧す看よ。

【擧す】 僧乾峯に問ふ。十方薄伽梵一路涅槃門、未審路頭甚麼の處に在るや。峯。拄杖を以つて一畫して云く、這裏に在り。僧擧して雲門に問ふ。門云く、扇子踰跳して三十三天に上り、帝釋の鼻孔に築著す。東海の鯉魚打つこと一棒すれば、雨盆の傾くに似たり。會すや會すや。

【頌に云く】 手に入つて還つて死馬を將つて醫す。反魂香君が危きを起さんと欲す。一期通身の汗を擦出せば、方に信ぜん儂が家眉を惜まざることを。

第六十二則 米胡悟不

【衆に示して云く】 達磨の第一義諦梁武頭迷ふ。淨名の不二法門文殊口過る。還つて入作の分有りや也た無しや。

【擧す】 米胡、僧をして仰山に問はしむ。今時の人還つて悟を假るや否や、山云く、悟は即ち無きに非ず、第二頭に落つることを争奈何ん。僧廻つて米胡に擧似す。胡深く之を肯ふ。

【頌に云く】 第二頭、悟を分つて迷を破る。快に手を撒して筌罟を捨つ。功未だ盡きず駢拇となる。智や知り難し噬臍を覺ゆ。兔老いて氷盤秋露泣く。鳥

寒うして玉樹曉風凄たり。持し來つて大仰眞假を辨ず。痕玷全く無うして白珪を貴ぶ。

第六十三則 趙州問死

【衆に示して云く】 三聖と雪峯とは春蘭秋菊なり。趙州と投子とは十壁燕金なり。無星秤上兩頭平なり。沒底缸中一處に渡る。二人相見の時如何。

【擧す】 趙州、投子に問ふ、大死底の人却つて活する時如何。子曰く、夜行を許さず明に投じて須らく到るべし。

【頌に云く】 芥城劫石妙に初を極む。活眼環中廓虛を照す。夜行を許さず曉に投じて到る。家音未だ肯て鴻魚に付せず。

第六十四則 子昭承嗣

【衆に示して云く】 韶陽親しく睦州に見えて香を雪老に拈ず。投子面り圓鑿に承けて法を大陽に嗣ぐ。珊瑚枝上に玉花開き、薺萄林中に金果熟す。且らく道へ如何が造化し來らん。

【擧す】 子昭首座、法眼に問ふ。和尚開堂何人に承嗣するや。眼云く、地藏。

昭云く、甚だ長慶先師に辜負す。眼云く、某甲長慶の一轉語を會せず。昭云く、何ぞ問はざる。眼云く、萬象之中獨露身、意作麼生。昭乃ち拂子を豎起す。眼云く、此は是れ長慶の處に學得する底なり。首座分上作麼生。昭無語。眼云く、只萬象之中獨露身といふが如きは是れ萬象を撥ふか萬象を撥はざるか。昭云く、撥はず。眼云く、兩箇。參隨の左右皆撥ふと云ふ。眼云く、萬象之中獨露身、

【頰に云く】念を離れて佛を見。塵を破つて經を出す。現成の家法。誰か門庭を立つ。月は舟を逐うて江練の淨さに行き。春は草に隨つて燒痕の青さに上る。撥と不撥と。聽くこと叮嚀にせよ。三徑荒に就いて歸ること便ち得たり。舊時の松菊尙芳馨。

第六十五則 首山新婦

【衆に示して云く】吒吒沙沙、剝剝落落。刁刁厥厥、漫々汗汗。咬嚼す可きこと没く、近傍を爲し難し。且らく道へ是れ甚麼の話ぞ。

【擧す】僧、首山に問ふ。如何なるか是れ佛。山云く、新婦、臚に騎れば阿家牽く。

【頰に云く】新婦臚に騎れば阿家牽く。體段の風流自然を得たり。笑ふに堪へたり。鬘に敷ふ隣舍の女。人に向つて醜を添へて妍を成さず。

第六十六則 九峯頭尾

【衆に示して云く】神通妙用底も脚を放ち下さず、忘緣絶慮底も脚を擡げ起さず。謂つべし有時は走殺し有時は坐殺すと。如何が恰好し去ることを得ん。

【擧す】僧、九峯に問ふ。如何なるか是れ頭。峯云く、眼を開いて曉を覺えず。僧云く、如何なるか是れ尾。峯云く、萬年の牀に坐せず。僧云く、頭有つて尾無き時如何。峯云く、遂に是れ貴からず。僧云く、尾有つて頭無き時如何。峯云く、飽くと雖ども力なし。僧云く、直に頭尾相稱ふことを得る時如何。峯云く、兒孫力を得て室内知らず。

【頰に云く】規は圓に、矩は方なり。用ふれば行ひ、舍つれば藏る。鈍躡、蘆に棲むの鳥。進退、藩に觸るゝの羊。人家の飯を喫して。自家の牀に臥す。雲騰つて雨を致し、露結んで霜を爲す。玉線相投じて、針鼻を透る。錦絲絶えず

梭腸より吐く。石女機停んで今、夜色午に向ふ。木人路轉じて今、月影典を移す。

第六十七則 嚴經智慧

【衆に示して云く】一塵萬象を含み、一念三千を具す。何に況んや天を頂き地に立つ丈夫兒、頭を道へば尾を知る靈利の漢、自ら己靈に辜負し家寶を埋没すること莫しや。

【擧す】華嚴經に云く、我今普く一切衆生を見るに如來の智慧德相を具有す。但妄想執著を以つて證得せず。

【頌に云く】天の如くに蔽ひ、地の如くに載す。團となし、塊と作す。法界に周うして邊なく。隣虚を折いて、内無し。玄微を及盡す。誰か向背を分たん。佛祖來つて、口業の債を償ふ。南泉の王老師に問取せよ。人人、只一莖菜を喫す。

第六十八則 夾山揮劍

【衆に示して云く】寰中は天子の勅、關外は將軍の令。有時は門頭に力を得、

有時は室内に尊と稱す。且らく道へ是れ其麼人ぞ。

【擧す】僧夾山に問ふ、塵を撥つて佛を見る時如何ん。山云く、直に須らく劍を揮ふべし。若し劍を揮はずんば漁父巢に棲まん。僧擧して石霜に問ふ、塵を撥つて佛を見る時如何ん。霜云く、渠に國土無し、何れの處にか渠に逢はん。僧廻つて夾山に擧似す。山上堂して云く、門庭の施設は老僧に如かず、入理の深談は猶石霜の百歩に較れり。

【頌に云く】牛を拂ふ劍氣兵を洗ふ威。亂を定むる歸功更に是れ誰ぞ。一旦の氛埃四海に清し。衣を垂れて皇化自ら無爲。

第六十九則 南泉白牯

【衆に示して云く】佛と成り祖と作るをば汗名を帶ふと嫌ひ、角を戴き毛を披るをば推して上位に居く。所以に眞光は耀かず、大智は愚の若し。更に箇の聲に便宜とし、不采を伴はる底あり。知んぬ是れ阿誰ぞ。

【擧す】南泉、衆に示して云く、三世の諸佛有ることを知らず。狸奴白牯却つて有ることを知る。

【頌に云く】 跛跛擊擊、齷齷齷齷、百取るべからず、一も堪ふる所なし。黙黙自ら知る田地の穩かなること。騰騰誰か肚皮愁なりと謂はん。普周法界渾て餌と成す。鼻孔纍垂として飽參に信す。

第七十則 進山問聖

【衆に示して云く】 香象の河を渡るを聞く底も己に流に随つて去る。生は不生の性なることを知る底も生の爲に留めらる。更に定前定後筭と作り箴と作ることを論ぜば、劔去つて久し爾方に舟を刻むなり。機輪を蹋轉して作麼生か別に一路を行ぜん。試に請ふ舉す看よ。

【舉す】 進山主、脩山主に問うて云く、明かに生は不生の性なることを知らば甚麼と爲てか生の爲に留めらるゝや。脩云く、筍畢竟竹となり去る、如今箴と作して使ふこと還つて得てんや。進云く、汝向後自ら悟り去ること有らん。脩云く、某甲只此の如し上座の意旨如何ん。進云く、這箇は是れ監院房、那箇は是れ典座房。脩、便ち禮拜す。

【頌に云く】 豁落として依を亡じ。高閑にして羈されず。家邦平帖到る人稀なり。些些の力量階級に分つ。蕩蕩たる身心是非を絶す。是非絶す。介り大方に立つて軌轍なし。

第七十一則 翠巖眉毛

【衆に示して云く】 血を含んで人に噴く自ら其の口を汗す。杯を貪つて一世人の債を償ふ。紙を賣ること三年鬼錢を欠く。萬松諸人の爲に請益す、還つて擔干計の處ありや也た無しや。

【舉す】 翠巖夏末に衆に示して云く。一夏以來兄弟の爲に説話す。看よ翠巖に眉毛ありや。保福云く、賊と作る人心虚なり。長慶云く、生ぜり。雲門云く、

【頌に云く】 賊と作る心。人に過ぎたる膽。歴歴縦横、機感に對す。保福雲門や垂鼻、唇を欺さ。翠巖長慶や脩眉眼に映ず。杜禪和何の限かあらん。剛て道ふ意句一齊に剗ると。自己を埋没して氣を飲み聲を吞む。先宗を帶累して牆に面ひ板を擔ふ。

第七十二則 中邑獼猴

【衆に示して云く】 江を隔て、智を闢はしめ、甲を遜けて兵を埋む。靦面すれば眞鎗實劍を相持す、衲僧の全機大用を貴ぶ所以なり。慢より緊に入る、試に吐露す看よ。

【擧す】 仰山中邑に問ふ、如何なるか是れ佛性の義。邑云く、我爾が爲に箇の譬喩を説かん。室に六窓あり中に一獼猴を安く。外に人ありて喚んで狴狴といへば獼猴即ち應ず。是の如く六窓俱に喚べば俱に應ずるが如し。仰云く、只獼猴睡る時の如きは又作麼生。邑乃ち禪牀を下つて把住して云く。狴狴我爾と相見せり。

【頌に云く】 雪屋に凍眠して歳摧頹。窈窕たる蘿門夜開かず。寒稿せる園林變態を看る。春風吹き起す律筒の灰。

第七十三則 曹山孝滿

【衆に示して云く】 草に依り木に附き去つて精靈となり、屈を負ひ冤を啣んで來つて鬼祟となる。之を呼ぶ則は、錢を燒き馬を奏む、之を遣る則は水を呪し符を書す。如何が家門平安なることを得去らん。

【擧す】 僧曹山に問ふ、靈衣掛けざる時如何。山云く、曹山今日孝滿。僧云く、孝滿の後如何ん。山云く、曹山顛酒を愛す。

【頌に云く】 清白の門庭四に隣を絶す。長年關し掃つて塵を容れず。光明轉ずる處傾いて、月を残す。爰象分る、時却つて寅に建す。新に孝を滿す。便ち春に逢ふ、醉歩狂歌墮巾に任す。散髮夷猶誰か管係せん。太平無事酒顛の人。

第七十四則 法眼質名

【衆に示して云く】 富萬德を有つて蕩として纖塵無し。一切の相を離れて一切の法に即す。百尺竿頭に歩を進めて、十方世界に身を全うす。且らく道へ甚麼の處より得來るや。

【擧す】 僧法眼に問ふ。承る 教に言へることあり無住の本より一切の法を立すと。如何なるかは無住の本。眼云く、形は未質より興り。名は未名より起る。

【頌に云く】 沒蹤跡。斷消息。白雲根無し清風何の色ぞ。乾蓋を散じて心あるに非ず。坤輿を持して力あり。千古の淵源を洞にし。萬象の模則を造る。刹塵の道會するや處處普賢。樓閣門開くるや頭頭彌勒。

第七十五則 瑞巖常理

【衆に示して云く】 喚て如如となす早く是れ變ぜり。智不到の處切に忌む道著することを。這裏還つて參究の分ありや也た無しや。

【擧す】 瑞巖、巖頭に問ふ。如何なるか是れ本常の理。頭云く、動ぜり。巖云く、動の時如何ん。頭云く、本常の理を見ず。巖佇思す。頭云く、肯ふ時は即ち未だ根塵を脱せず。肯はざる時は永く生死に沈む。【頌に云く】 圓珠穴あらず。大璞は琢せず、道人の貴ぶ所稜角無し。肯路を拈却すれば、根塵空す。脱體無依活卓卓。

第七十六則 首山三句

【衆に示して云く】 一句に三句を明し、三句に一句を明す。三一相涉らず、分明なり向上の路。且らく道へ是れ那の一句か先に在る。

【擧す】 首山衆に示して云く、第一句に薦得すれば佛祖の爲に師となる。第二句に薦得すれば人天の與に師となる。第三句に薦得すれば自救不了。僧云く、和尚は是れ第幾句に薦得するや。山云く、月落ちて三更、市を穿つて過ぐ。

【頌に云く】 佛祖の髑髏一串に穿つ。宮漏沈沈として密に箭を傳ふ。人天の機要千鈞を發す。雲陣輝輝として急に電を飛ばす。箇の中の人轉變を看よ。賤に遇うては則ち貴、貴は則ち賤。珠を罔象に得て至道綿綿たり。刃を亡牛に游ばしめて赤心片片たり。

第七十七則 仰山隨分

【衆に示して云く】 人の空に畫くが如き、筆を下さば即ち錯る、那ぞ模を起して様を作すに堪へんや。萬松已に是れ檢索を露はす、條あれば條を攀ち、條無ければ例を攀づ。

【擧す】 僧、仰山に問ふ、和尚還つて字を知るや否や。山云く、分に隨ふ。僧乃ち右旋一匝して曰く、是れ甚麼の字ぞ。山、地上に於いて箇の十の字を書す。僧左旋一匝して曰く、是れ甚麼の字ぞ。山、十の字を改めて卍字と作す。僧、一圓相を畫いて兩手を以つて托けて修羅の日月を掌にする。勢の如くにして云く。是れ甚麼の字ぞ。山乃ち圓相を畫いて卍字を圍却す。僧乃ち樓至の勢を作す。山云く、如是如是、汝善く護持せよ。

【頌に云く】 道環の虚盈つる靡し。空印の字未だ形れず。妙に天輪地軸を運し。密に武緯文經を羅らぬ。放開捏聚。獨立周行。機玄樞を發して兮青天に電を激す。眼に紫光を含んて兮白日に星を見る。

第七十八則 雲門餠餅

【衆に示して云く】 統天に價を索ひれば搏地に相酬ゆ。百計經求一場の憊懼、還つて進退を知り休咎を識る底ありや。

【擧す】 僧雲門に問ふ。如何なるか是れ超佛越祖の談。門云く、餠餅。

【頌に云く】 餠餅を超佛越祖の談といふ。句中に味無し若爲が參ぜん。衲僧一日如し飽くことを知らば。方に見ん雲門の面慙ぢざることを。

第七十九則 長沙進步

【衆に示して云く】 金沙灘頭の馬郎婦、別に是れ精神。瑠璃瓶裏に磁饊を擣く。誰れか敢へて轉動せん。人を驚かす浪に入らずんば意に稱ふ魚に逢ひ難し。寬行大步の一句作麼生。

【擧す】 長沙僧をして會和尚に問はしむ、未だ南泉に見えざる時如何。會良久

す。僧云く、見えて後如何ん。會云く、別に有るべからず。僧廻つて沙に擧似す。沙云く、百尺竿頭に坐する底の人。然も得入すと雖も未だ真と爲さず。百尺竿頭須らく歩を進むべし。十方世界是れ全身。僧云く、百尺竿頭如何が歩を進めん。沙云く、朗州の山、澧州の水。僧云く、不會。沙云く、四海五湖王化の裏。【頌に云く】 玉人夢破る一聲の鷄。轉盼すれば生涯色色齊し。有信の風雷出蟄を催し。無言の桃李自から蹊を成す。時節に及んで耕梨を力む。誰か怕れん春疇脛を没する泥。

第八十則 龍牙過板

【衆に示して云く】 大音は聲希れに、大器は晩成す。盛忙百鬧の裏に向つて呆を伴り、七古千年の後を待つて慢愼す、且らく道へ是れ如何なる底の人ぞ。

【擧す】 龍牙、翠微に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。微云く、我が與に禪版を過し來れ。牙禪版を取つて翠微に與ふ。微接得して便ち打つ。牙云く、打つことは即ち打つに任す、要且つ西來意無し。又臨濟に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。濟云く、我が與に蒲團を將ち來れ。牙蒲團を取つて臨濟に與ふ。

濟、接得して便ち打つ。牙云く、打つことは即ち打つに任す要且つ祖師意なし。牙後に住院す、僧問ふ、和尚當年翠微と臨濟とに祖意を問ふ。二尊宿明すや也。未しや。牙云く、明すことは即ち明す。要且つ祖師意無し。

【頌に云く】蒲團禪版龍牙に對す。何事ぞ機に當つて作家とならざる。未だ成褫して目下に明なることを意はず。流落して天涯に在らんとすることを恐る。虚空那を劍を挂けん。星漢却つて槎を浮ぶ。不萌の草に香象を藏すことを解し。無底の籃に能く活蛇を著く。今日江湖何の障礙かあらん。通方の津渡に舡車あり。

第八十一則 玄沙到縣

【衆に示して云く】動ずれば即ち影現じ、覺すれば即ち塵生ず。舉起すれば分明放下すれば。穩密。本色道人の相見、如何んか説話せん。

【擧す】玄沙、蒲田縣に到る、百戯して之を迎ふ。次日小塘長老に問ふ、昨日許多の喧鬧甚麼の處に向つて去るや。小塘、袈裟角を提起す。沙云く、顔挑没交渉。

【頌に云く】夜壑に舟を藏し。澄源に棹を著く。龍魚は未だ知らず水を命となすことを。折筈は妨げず聊か一攪することを。玄沙師、小塘老。函蓋箭鋒。探竿影草。潜縮や老龜蓮に巢ひ。遊戯や華鱗藻を弄す。

第八十二則 雲門聲色

【衆に示して云く】聲色を斷ぜざれば是れ隨處墮、聲をもつて求め色をもつて見れば如來を見ず。路に就いて家に還る底あること莫しや。

【擧す】雲門衆に示して云く、聞聲悟道。見色明心。觀世音菩薩錢を將ち來つて餠餅を買ふ、手を放下すれば却つて是れ饅頭。

【頌に云く】門を出て馬を躍らして攪槍を掃ふ。萬國の煙塵自から肅清。十二處亡す閑影響。三千界に淨光明を放つ。

第八十三則 道吾看病

【衆に示して云く】通身を病と做す摩詰瘞を難し。是れ草醫するに堪へたり。文殊善く用ふ争でか向上の人に參取し。箇の安樂の處を得るに如かん。

【擧す】瀧山、道吾に問ふ、甚麼の處より來る。吾云く、看病し來る。山云く、

幾人あつて病む。吾云く、病者と不病者とあり。山云く、不病者は是れ智頭陀なること莫しや。吾云く、病と不病と總に他の事に干らず速に道へ速かに道へ。山云く、道ひ得るも也没交渉。

【頌に云く】 妙薬何ぞ曾て口を過さん。神醫も能く手を捉ふること莫し。存するが若くにして渠本無に非ず。至虚にして渠本有に非ず。滅せずして生じ。亡びずして壽し。全く威音の前に超え。獨切空の後に歩す。成平や天蓋ひ地撃ぐ。運轉や鳥飛び兎走る。

第八十四則 俱胝一指

【衆に示して云く】 一聞千悟一解千從。上士は一決して一切了ず、中下は多聞なれども多く信ぜず。尅的簡當の處 試みに拈出す看よ、

【擧す】 俱胝和尚凡そ所問あれば只一指を堅つ。

【頌に云く】 俱胝老子指頭の禪。三十年來用不殘。信に道人方外の術あり。了に俗物の眼前に看る無し。所得甚だ簡に。施設彌寬し。大千利海毛端に飲む。鱗龍限無し誰が手に落つるや。珍重す任公釣竿を把ることを。師復た一指を堅

起して云ふ、看よ。

第八十五則 國師塔様

【衆に示して云く】 虚空を打破する底の鉛錘、華嶽を擘開する底の手段あつて始めて元縫罽なき處瑕痕を見ざる處に到る。且らく誰か是れ恁麼の人ぞ。

【擧す】 肅宗帝、忠國師に問ふ、百年の後所須何物ぞ。國師云く、老僧が爲に箇の無縫塔を作れ。帝曰く、請ふ師塔様。國師良久して云く、會すや。帝曰く、不會。國師云く、吾に付法の弟子耽源といふものあり。却つて此の事を諳ず。

後、帝、耽源に詔して此の意如何と問ふ。源云く、相の南、譚の北。中に黄金ありて一國に充つ。無影樹下同缸。瑠璃殿上に智識無し。

【頌に云く】 孤迥迥。圓陀陀。眼力盡る處高して峨峨たり。月落ち潭空うして夜色重し。雲收り山瘦て秋容多し。八卦位正しく。五行氣和す。身先づ裏に在り見來るや。南陽父子却つて有ることを知るに似たり。西竺の佛祖如奈何ともする無し。

第八十六則 臨濟大悟

【衆に示して云く】 銅頭鐵額天眼龍睛、雕背魚鰓熊心豹膽なるも。金剛劍下是れ計ること納れず、一籌すること獲ず。甚麼と爲てか此くの如くなる。

【擧す】 臨濟黃檗に問ふ。如何なるか是れ佛法的の大意。檗便ち打つ。是くの如きこと三度び乃ち檗を辭して大愚に見ゆ。愚問ふ、甚麼の處より來る。濟云く、黃檗より來る。愚云く、黃檗何の言句かありし。濟云く、某甲三たび佛法的の大意を問ひ三度び棒を喫す、知らず過ありや過無しや。愚云く、黃檗恁麼に老婆備か爲に徹困なることを得たり。更に來つて有過無過を問ふ。濟、言下に於いて大悟。

【頌に云く】 九包の雛。千里の駒。眞風籥を度し。靈機樞を發す。劈面に來る時飛電急なり。迷雲破るゝ處太陽孤なり。虎鬚を拵づ。見るや無しや。箇は是れ雄々たる大丈夫。

第八十七則 疎山有無

【衆に示して云く】 門闔さんと欲すれば一撈して便ち開く。缸沈まんと欲すれば一箇して便ち轉ず。車箱谷に入つて歸路なし。箭筈天に通じて一門あり。且らく道へ甚麼の處に向つて去るや。

【擧す】 疎山瀉山に到つて便ち問ふ。承はる師言へることあり。有句無句は藤の樹に倚るが如しと。忽然として樹倒るれば藤枯る。句何の處に歸するや。

瀉山呵呵大笑す。疎山云く、某甲四千里に布單を賣り來る。和尚何ぞ相弄することを得たる。瀉、侍者を喚んで錢を取つて這の上座に還せと。遂に囑して云く、向後獨眼龍あつて子が爲に點破し去ることあらん。後に明昭に到つて前話を擧す。昭云く、瀉山をば頭正尾正と謂つべし。只是れ知音に遇はず。疎、復問ふ、樹倒るれば藤枯る。句は何の處に歸するや。昭云く、更に瀉山をして笑ひ轉た新たならしめん。疎言下に於いて省あり。乃ち云く、瀉山元來笑裏に刀あり。

【頌に云く】 藤枯れ樹倒れて瀉山に問ふ。大笑呵呵豈等閑ならんや。笑裏刀あり窺得破す。言思道なうして機關を絶す。

第八十八則 楞嚴不見

【衆に示して云く】 見あり不見あり日午燈を點す。見無く不見無し夜半墨を潑

若し見聞は幻影の如くなるを信ぜば。方に聲色空華の如くなることを知らん。且らく道へ教中還つて衲僧の說話ありや。

【擧す】楞嚴經に云く、吾か不見の時何ぞ吾か不見の處を見ざる。若し不見を見るといふは自然に彼の不見の相に非ず。若し吾か不見の地を見ずんば自然に物に非ず。云何ぞ汝に非ざらん。

【頌に云く】滄海を瀝乾し。大虚に充滿す。衲僧鼻孔長く。古佛舌頭短し。珠絲九曲を度し。玉機纒かに一轉す。直下相逢うて誰か渠を識らん。始めて信ず、斯の人伴ふべからざることを。

第八十九則 洞山無草

【衆に示して云く】動ずる時は身を千丈に埋ひ、動ぜざる時は當處に苗を生ず。直に須らく兩頭撒開し中間放下するも、更に草鞋を買うて行脚して始めて得べし。

【擧す】洞山衆に示して云く、秋初夏末兄弟或は東し或は西す。直に須らく萬里無寸草の處に向つて去るべし。又云く、只萬里無寸草の處作麼生か去らん。

石霜云く、門を出れば便ち是れ草。太陽云く、直に道はん門を出でざるも亦是れ草漫漫地。

【頌に云く】草漫漫。門裏門外君自から看よ。荆棘林中脚を下すことは易く。夜明簾外身を轉ずること難し。看よ看よ。幾何般ぞ。且らく老木に隨つて寒瘡を同らす。將に春風を逐うて燒瘡に入らんとす。

第九十則 仰山謹白

【衆に示して云く】屈原獨醒ひ正に是れ爛醉、仰山夢を説く恰も覺時に似たり。且らく道へ萬松恁麼に聽く。且らく道へ是れ覺か是れ夢か。

【擧す】仰山夢に彌勒の所に往いて第二座に居す。尊者白して云く、今日第二座の説法に當る。山乃ち起つて白椎して云く、摩訶衍の法は。四句を難れ百非を絶す。謹んで白す。

【頌に云く】夢中衲を擁して耆舊に參ず。列聖森森として其の右に坐す。仁に當つて譲らず。健椎鳴る。説法無畏獅子吼す。心安きこと海の如く、膽量斗の如し。鉸目泪流る。蚌腸珠剖る。謔語誰か知ん我機を泄すことを。龐眉應に笑ふ

べし家醜を揚ぐることを。四句を離れ百非を絶す。馬師父子病に醫を休めよ。

第九十一則 南泉牡丹

【衆に示して云く】 仰山は夢中を以つて實となし。南泉は覺處を指して虚となす。若し覺夢元無なることを知らば始めて虚實、待を絶することを信ぜん。且らく道へ此の人甚麼の眼を具するや。

【擧す】 南泉因に陸亘太夫云く、肇法師也た甚だ奇特なり。道ふことを解す。天地同根萬物一體と。泉、庭前の牡丹を指して云く、大夫時の人此の一株の花を見ること夢の如くに相似たり。

【頌に云く】 離微造化の根に照徹し。紛紛たる出没其の門を見る。神を却外に遊ばしめて問ふ何か有らん。眼を身前に著けて知、妙に存す。虎嘯けば蕭蕭として巖吹作り。龍吟すれば、冉冉として洞雲昏し。南泉、時人の夢を點破して、堂堂たる補處の尊を識らんと要す。

第九十二則 雲門一寶

【衆に示して云く】 遊戲神通の大三昧を得、衆生語言の陀羅尼を解し、睦州秦

時の轆轤鑽を拽轉し。雪峯南山の鼈鼻蛇を弄出す。還つて此の人を識得すや。

【擧す】 雲門大師云く、乾坤の内。宇宙の間。中に一寶あり。形山に秘在す。

燈籠を拈じて佛殿裏に向ふ。三門を將つて燈籠上に來す。

【頌に云く】 餘懷を收卷して、事華を厭ふ。歸り來つて何の處か、是れ生涯

爛柯樵子、路なきかを疑ひ。桂樹の壺公、妙に家あり。夜水、金波桂影を浮べ。

秋風、雪陣蘆花を擁す。寒魚底に著いて餌を吞まず。興盡きて清歌却つて槎を

轉ず。

第九十三則 魯祖不會

【衆に示して云く】 荆珍鵲を抵ち、老鼠金を啣ひ。其の寶を識らず、其の用を得ず。還つて頤に衣珠を省する底有りや。

【擧す】 魯祖、南泉に問ふ、摩尼珠人識らず如來藏裏に親く收得すと。如何なるか是れ藏。泉云く、王老師と汝と往來する者は。祖云く往來せざる者は。泉

云く、亦是れ藏。祖云く、如何なる是れ珠。泉召して云く、師祖。祖、應諾

す。泉云く、去れ、汝我が語を會せず。

【頌に云く】是非を分ち得喪を明し。之れを心に應じ諸れを掌に指す。往來不往來。只這れ俱に是れ藏。輪王之を有功に賞し。黃帝之を罔象に得たり。樞機を轉じ伎倆を能くす明眼の衲僧鹵莽なること無れ。

第九十四則 洞山不安

【衆に示して云く】下、上を論ぜず、卑、尊を動ぜず。能く己を攝して他に從ふと雖も未だ輕を以つて重を勞すべからず。四大不調の時如何が侍養せん。

【擧す】洞山不安。僧問ふ、和尚病む還つて病まざるものありや。山云く、有り。僧云く、病まざるものは還つて和尚を看るや否や。山云く、老僧他を見るに分あり。僧云く、和尚他を見る時如何。山曰く、則ち病あることを見ず。

【頌に云く】臭皮袋を卸却し。赤肉團を拈轉す。當頭鼻孔正しく。直下觸體乾く。老醫從來の癖を見ず。少子相看して向近すること難し。野水瘦する時秋潦退き。白雲斷ゆる處舊山寒し。須らく勦絶すべし。顛預すること莫れ。無功を轉盡して伊位に就く。孤標汝と盤を同うせず。

第九十五則 臨濟一晝

【衆に示して云く】佛來るも打し魔來るも打し、理あるも三十、理なきも三十。爲復是れ錯つて怨讎を認むるか。爲復是れ良善を分たざるか、試に道へ看ん。

【擧す】臨濟、院主に問ふ、甚の處よりか來る。主云く、州中に黃米を糶り來る。濟云く、糶得し盡すや。主云く、糶得し盡す。濟拄杖を以て一晝して云く、還つて這箇を糶得せんや。主便ち喝す。濟便ち打つ。次に典座至る。前話を擧す。座云く、院主、和尚の意を會せず。濟云く、爾又作麼生。座便ち禮拜す。濟亦打つ。

【頌に云く】臨濟の全機格調高し。棒頭に眼あり秋毫を辨ず。孤兔を掃除して家風峻なり。魚龍を變化して電火燒く。活人劍、殺人刀、天に倚つて雪を照し吹毛を利し。一等に令行して滋味別なり。十分の痛處是れ誰か遭はん。

第九十六則 九峯不肯

【衆に示して云く】雲居は戒珠舍利を憑まず、九峯は坐脫立亡を愛せず。牛頭は百鳥花を啣むことを要せず。黃檗は杯を浮べて水を渡ることを美まず。且らく道へ何の長處かあるや。

【擧す】 九峯石霜に在つて侍者となる。霜還化の後、衆堂中の首座を請して住持を接續せしめんとす。峯肯はず乃ち云く、某甲が問過せんを待て若し先師の意を會せば先師の如くに侍奉せん。遂に問ふ、先師道く、休し去り。歇し去り。一念萬年にし去り。寒灰枯木にし去り。一條白練にし去ると。且らく道へ甚麼邊の事を明すや。座云く、一色邊の事を明す。峯云く、恁麼ならば未だ先師の意を會せざるあり。座云く、爾我を肯がはざるや、香を装ひ來れ。座乃ち香を焚いて云く、我若し先師の意を會せずんば香煙起る處脱し去ることを得じ。言ひ訖つて便ち坐脱す。峯乃ち其の背を撫して云く、坐脱立亡は則ち無きにあらず。先師の意は未だ夢にだも見ざるあり。

【頌に云く】 石霜の一宗。親く九峯に傳ふ。香煙に脱し去り。正脈通じ難し。月巢の鶴は千年の夢を作し。雪屋の人は一色の功に迷ふ。十方を坐斷するも猶點額す。密に一步を移さば飛龍を見ん。

第九十七則 光帝幞頭

【衆に示して云く】 達磨梁武に朝す、本心を傳へんが爲なり。鹽官大中を識る

眼を具するを妨げず。天下太平國王長壽と云つて天威を犯さす。日月景を停め四時和適すと云つて風光を光かにすることあり。人王と法王との相見には合に何事をか談ずべき。

【擧す】 同光帝、興化に謂つて曰く、寡人中原の一寶を收め得たり。只是れ人の價を酬ゆるなし。化云く、陛下の寶を借せ看ん。帝、兩手を以つて幞頭脚を引く。化云く、君王の寶誰か敢へて價を酬いん。

【頌に云く】 君主の底意知音に語る。天下誠を傾く葵藿の心。撥出す中原無價の寶。趙璧と燕金とに同じからず。中原の寶興化に呈す。一段の光明價を定め難し。帝業萬世の師となるに堪へたり。金輪の景は四天下を耀す。

第九十八則 洞山常切

【衆に示して云く】 九峯舌を截つて石霜を追和し。曹山頭を斫つて洞嶺に辜かず。古人三寸、恁麼に密なることを得たり。且らく爲人の手段甚麼の處に在るや。

【擧す】 僧洞山に問ふ、三身の中那身か諸數に墮せざる。山云く、吾れ常に此

に于いて切なり。

【頌に云く】世に入らず。未だ縁に循はず。劫壺空處に家傳あり。白蘋風は細なり秋江の暮。古岸舡は歸る一帶の煙。

第九十九則 雲門鉢桶

【衆に示して云く】碁に別智あり、酒に別腸あり。狡兔三穴、猾胥萬倖。箇の諸頭底有り。且らく道へ是れ誰ぞ。

【擧す】僧、雲門に問ふ、如何なるか是れ塵塵三昧。門云く、鉢裏の飯、桶裏の水。

【頌に云く】鉢裏飯桶裏水。口を開き膽を見はして知己を求む。思はんと擬すれば便ち二三機に落つ。對面忽ち千萬里となる。韶陽師些子に較れり。斷金の義兮、誰か與に相同じからん。匪石の心兮、獨り能く此の如し。

第一百則 瑯琊山河

【衆に示して云く】一言以つて邦を興すべく、一言以つて邦を喪すべし。此の藥亦能く人を殺し亦能く人を活す。仁者は之を見て之を仁と謂ひ、智者は之を

見て之を智と謂ふ。且らく道へ利害甚麼の處に在るや。

【擧す】僧、瑯琊の覺和尚に問ふ、清淨本然云何ぞ忽ち山河大地を生ず。覺云く、清淨本然云何ぞ忽ち山河大地を生ず。

【頌に云く】有を見て有とせず。翻手覆手。瑯琊山裏の人。瞿曇の後に落ちず。

從容錄終

備考

- 一、洞本悟本禪師語錄には、「新豐吟」其他禪師の書簡等を附録とせるあり、言々味ふべきものとす、又、洞山録の補遺の如きものあり、其出所に付き猶究むべきものなれども、尊重すべき文字少からず、實參底の人は更に親しく拜讀すべき也。
- 二、日本にて刊行されたる曹山元證禪師語錄は、本書に收めたる本文の外、「解釋洞山五位顯訣」あり、「自下本光重編」と記しあれば、追補せるものなることは明なり、次に逐位頌並注別揀、五位旨訣、三種墮、四種異類、三燃燈の記を纂録す、其の宗乘の尊ぶべきことは勿論なれども、今は語録を主とするが故に省略せり。
- 三、曹山錄本文中「僧何々の話を擧して云ふ云々」とあるあり、又直に他の話を擧したる後に、「僧前話を擧して」云々と記せるあり、文字同からざれども意異りなきが故に一々訂さざることとせり。
- 四、曹洞二師錄は、古來研究者少く、註釋書も多からず、故に本文の讀方に就き疑を挿む所あれども、今は

古人の指南に従ふ、但、多少の見解を加へたる所なきにあらず。

五、從容錄は、解題にも云へる如く「天童宏智禪師頌古」を從容庵萬松老人が示衆其他を加へて「從容庵錄」略して「從容錄」となりたるものなれば、本書收むる所は從容錄の一片に過ぎず而も之を從容錄と云ふは、通都の稱呼に従ひたるのみ。

六、從容錄は古來相當に研鑽されたれども、舊來の刊本には猶議すべき所多し、第八十五則の相之南、譚之北は「湘南潭北」ならんと思はるゝも、古人は相譚を正しと云へり、第七十九則の耕梨は耕犁なりとの説もあり、其他異説多し、今は通都の讀方に従ひおけり。

七、「楔を以て楔を去る」を「ケツトモツテケツト去る」と讀む傳あり、故に「を」の傍に「と」の訓を付せり、(第五十七則)其他にも斯る讀くせを保存せる所あり、塔頭を「たつちう」と云ふが如し(二九五頁)、然れども、素より師家の讀方より來りたるものなれば、深く固執せよと云ふに非ず。

第七 支那諷詠部

支那諷詠部解題

斯部には支那禪者の間に歌はれたる韻文を集録す。「信心銘」は支那相承第三祖鑑智僧璨禪師の著、四言、一百四十六句より成れる長篇の韻語、禪門最古の寶典にして普ねく行はる。「參同契」は唐の石頭希遷禪師の著、禪林殊に本宗深く之れを珍重し、今猶ほ朝夕に讀誦す、「證道歌」は、天台より禪門に歸したる永嘉玄覺の著、二百四十七句の古詩體、妙調絶韻、禪文の精華たり、「寶鏡三昧」は四言九十四句の古體の偈、洞山大師が其嗣曹山に附法の際の提示にして、其の骨子は彼の過水悟道の偈なり、「玄中銘」は學人を警醒するため詠出せられたる四言五十六句の韻語「五位說」は洞山の首唱、所説極めて簡なれども、所謂禪宗哲學の大要を概括して餘蘊なし。「五位顯訣」は其要旨を示し、「逐位頌」は教理としての偏正五位を、「功勳頌」は行果としての功勳五位を歌ふ。以上五種は何れも洞山悟本大師の著作たり。最後の宏智禪師「坐禪箴」は妙に禪觀の消息を道破したる大文字なり。

三祖大師信心銘

至道無難、唯嫌揀擇、但憎愛莫ければ、洞然として明白なり、毫釐も差有れば、天地懸に隔る、現前を得んと欲せば、順逆を存すること莫れ、違順相争ふ是れを心病と爲す、玄旨を識らざれば徒に念靜に勞す、圓なること大虚に同じ、欠くること無く餘ることなし、良に取捨に由る、所以に不如なり、有縁を逐ふこと莫れ、空忍に住すること勿れ、一種平懷なれば、泯然として自ら盡く、動を止めて止に歸すれば、止更にいよいよ動ず、唯だ兩邊に滯らば、寧ろ一種を知らんや、一種通ぜざれば兩處に功を失す、有を遣れば有に没し、空に従へば空に背く、多言多慮轉た相應せず、絶言絶慮、處として通ぜずと云ふと無し根に歸すれば旨を得、照に隨へば宗を失す、須臾も返照すれば前空に勝卻す、前空の轉變、皆な妄見に由る、眞を求むるを用ひざれ、唯だ須らく見を息むべ

し、二見に住せず、慎んで迫尋すること勿れ、纒に是非有れば、紛然として心を失す、二は一に由つて有り、一も亦守ること莫れ、一心生ぜざれば、萬法に咎無し、咎なければ法無し、生ぜざれば心ならず、能は境に随つて滅し、境は能に随つて沈す、境は能に由つて境たり、能は境に由つて能たり、兩段を知らんと欲せば、元是れ一空、一空兩に同じ、齊しく萬象を含む、精粗を見ず、寧んぞ偏黨あらんや、大道體寛にして、難なく易無し、小見は狐疑す、轉た急なれば轉た遅し、之れを執すれば度を失して必ず邪路に入る、之れを放てば自然なり、體に去住無し、性に任ずれば道に合ふ、逍遙として惱を絶す、繫念は眞に乖く、昏沈は不好なり、不好なれば神を勞す、何ぞ疎親することを用ひん、一乘に趣かんと欲せば、六塵を惡むこと勿れ、六塵惡まざれば、還つて正覺に同じ、智者は無爲なり、愚人は自縛す、法に異法なし、妄りに自ら愛著す、心を將つて心を用ふ、豈大錯に非らんや、迷へば寂亂を生じ、悟れば好惡なし、一

切の二邊、妄りに自ら斟酌す、夢幻空華、何ぞ把握に勞せん、得失是非、一時に放却せよ、眼若し睡らざれば、諸夢自ら除く、心若し異ならざれば、萬法一如なり、一如體玄なり、兀爾として縁を忘す、萬法齊しく觀すれば歸復自然なり、其の所以を泯ぜば、方比すべからず、動を止むるに動なく、止を動ずるに止なし、兩既に成らず一何ぞ爾ること有らん、究竟窮極、軌則を存せず、契心平等なれば、所作俱に息む、狐疑淨盡して、正信調直なり、一切留まらず、記憶すべき無し、虛明自照、心力を勞せざれ、非思量の處、識情測り難し、眞如法界、他なく自なし、急に相應せんと要せば、唯不二と言ふ、不二なれば皆な同じ、包容せずと云ふこと無し、十方の智者皆この宗に入る、宗は促延に非らず、一念萬年、在と不在となく、十方目前、極小は大に同じく、境界を忘絶す、極大は小に同じく、邊表を見ず、有即ち是れ無、無即ち是れ有、若し是の如くならざれば、必らず守ることを須ひざれ、一即一切、一切即一、但だ能く是の

如くならば、何ぞ不畢を慮らん、信心不二、不二信心、言語道斷去來今に非らず。

三祖信心銘終

石頭無際大師參同契

竺土大仙の心、東西密に相附す、人根に利鈍あり、道に南北の祖無し、靈源妙に皓潔たり、支派暗に流注す、事を執するも元是れ迷、理に契ふも亦悟にあらす、門々一切の境、回互と不同互と、回して更に相渉る、爾らされは位に依つて住す、色元質像を殊にし、聲本樂苦を異にす、暗は上中の言に合ひ、明は清濁の句を分つ、四大の性自ら復す、子の其の母を得るが如し、火は熱し、風は動搖、水は濕ひ、地は堅固、眼は色、耳は音聲、鼻は香、舌は鹹酢然も一一

の法に於て根に依つて葉分布す、本末須らく宗に歸すべし、尊卑其の語を用ふ明中に當つて暗あり、暗相を以て遇ふこと勿れ、暗中に當つて明あり、明相を以て觀ること勿れ、明暗各相對して、比するに前後の歩の如し、萬物自ら功あり、當に用と處とを言ふべし、事存すれば函蓋合し、理應ずれば箭鋒拄ふ、言を承けては須らく宗を會すべし、自ら規矩を立すること勿れ、觸目道を會せずんば足を運ぶも焉んぞ路を知らん、歩を進むれば近遠に非ず、迷へば山河の固を隔つ、謹んで參玄の人に白す光陰虚しく度ること莫れ。

參同契終

洞山悟本大師寶鏡三昧

如是の法、佛祖密に附す、汝今之を得たり、宜く能く保護すべし、銀盃に雪を盛り、明月に鷲を藏す、類して齊しからず混ずる則んば處を知る、意言に在ら

されば、來機亦赴く、動ずれば窠臼を成し、差へば願付に落つ、背觸共に非なり、大火聚の如し、但文彩に形はせば、即ち染汚に屬す、夜半正明天曉不露、物の爲に則となる、用ひて諸苦を抜く、有爲に非ずと雖、是れ語無きにあらず、寶鏡に臨んで形影相觀るが如し、汝是れ渠にあらず、渠正に是れ汝、世の嬰兒の五相完具するが如し、不去不來、不起不住、婆婆和和有句無句、終に物を得ず、語未だ正しからざるが故に、重離六爻偏正回互、疊んで三と成り、變盡きて五と爲る、莖草の味の如く、金剛の杵の如し、正中妙挾、敲唱雙び擧ぐ、宗に通じ途に通ず、挾帶挾路、錯然なる則んば吉なり、犯忤すべからず、天真にして妙なり迷悟に屬せず、因縁時節寂然として昭著す、細には無間に入り大には方所を絶す、毫忽の差律呂に應ぜず、今頓漸あり、宗趣を立するに縁つて、宗趣分る、即ち是れ規矩なり、宗通じ趣極るも眞常流注、外寂に内搖くは繫ける駒伏せる鼠、先聖之を悲んで法の檀度となる其の顛倒に隨つて縊を以て素と

爲す、顛倒想滅すれば、肯心自ら許す、古轍に合はんと要せば請ふ前古を觀ぜよ、佛道を成ずるに垂んとして十劫樹を觀ず、虎の缺たるが如く、馬の鼻の如し下劣あるを以て寶几珍御、驚異あるを以て狸奴白牯、羿は巧力を以て、射て百歩に中つ、箭鋒相値ふ巧力何ぞ預からん、木人方に歌ひ、石女起て舞ふ、情識の到るに非ず、寧ろ思慮を容れんや、臣は君に奉し子は父に順ず、順ぜざれば孝にあらず、奉せざれば輔に非ず、潜行密用は愚の如く魯の如し、只能く相續するを主中の主と名く。

寶鏡三昧終

洞山大師玄中銘

太陽門下日々三秋、明月堂前時々九夏、森羅萬象古佛の家風、碧落青霄道人の

活計、靈苗瑞草野父芸ざることを愁ひ、露地の白牛牧人放つに懶うし、龍枯骨に
 吟じて異響聞き難く、木馬嘶く時何人か聴くと道はん、夜明簾外古鏡、徒らに
 耀き、空王殿中千光那んぞ照さん、激源湛水尙孤舟に棹し、古佛道場猶車子に
 乗す、無影樹下永劫清涼、觸目荒林年を論じて放曠たり、擧足下足鳥道殊なる
 と莫し、坐臥經行立路に非ると莫し、向て道ふ去ると莫れと、歸り來れば父に背
 く、夜半正明天曉不露、先行到らず末後甚だ過ぐ、没底の船子無漏にして堅固
 碧潭、水月隱々沈め難し、青山白雲無根にして却て住す、峰巒秀異なれども鶴
 機を停めず、靈木迢然たれども鳳依倚すると無し、徒らに布鼓を敲く誰か是れ
 知音、空を撃て聲を成す何人か掌を撫せん、胡笳曲子は五音に墮ちず、韻青
 霄に出づ君か吹唱するに任す。

洞山大師玄中銘終

永嘉大師證道歌

君見ずや、絶學無爲の閑道人、妄想を除かず眞を求めず、無明の實性即佛性、
 幻化の空身即法身、法身覺了すれば無一物、本源自性天真佛、五陰の浮雲は空
 去來、三毒の水泡は虚出沒、實相を證すれば人法無し、刹那に滅却す阿鼻の業
 若し妄語を將つて衆生を誑さば、自ら拔舌を招くこと塵沙劫ならん、頓に如來
 禪を覺了すれば、六度萬行體中に圓なり、夢裡明々として六趣有り、覺めて後
 空々として大千も無し罪福もなく損益もなし、寂滅性中間覓すること莫れ、
 比來の塵鏡未だ曾つて磨さず、今日分明に須らく剖析すべし、誰か無念、誰れ
 か無生、若し實に無生ならば不生も無し、機關木人を喚取して問へ、佛を求め、
 功を施さば早晚成ぜん、四大を放つて把握すること莫れ、寂滅性中隨つて飲
 啄せよ、諸行は無常にして一切空なり、即ち是れ如來の大圓覺、決定の説は眞

僧を表す、人あり肯はずんば情に任せて徴せよ、直に根源を截るは佛の印する所、葉を摘み枝を尋ぬるは我能はず、摩尼珠人識らず、如來藏裡に親しく收得す、六般の神用空不空、一類の圓光色非色、五眼を淨うし五力を得、唯だ證して乃ち知る、測るべきこと難し、鏡裡に形を見る、見ること難からず、水中に月を捉ふ、争てか拈得せん、常に獨行き常に獨歩す、達者同じく遊ぶ涅槃の路調べ古り神清うして風自ら高し、貌頓け骨剛うして人顧みず、窮釋子口に貧と稱す、實に是れ身貧にして道貧ならず、貧なれば則ち身常に縷褐を被す、道あれば則ち心に無價の珍を藏ひ、無價の珍は用ふれども盡くること無し、物を利し縁に應じて終に怯まず、三身四智體中に圓かなり、八解六通心地に印す、上士は一決して一切了ず、中下は多聞なれども多く信ぜず、但だ自ら懷中に垢衣を解け、誰か能く外に向つて精進に誇らん、他の謗するに従す、他の非するに任す、火を把つて天を焼く、徒に自から疲る、我聞いて恰も甘露を飲むが如

し、銷融して頓に不思議に入る、惡言は是れ功德なりと觀すれば、是れ即ち吾が善知識と成る、訕謗に因つて怨親を起さざれば、何ぞ無生慈忍の力を表せん、宗も亦通じ説も亦通ず、定慧圓明にして空に滯らず、但だ吾今獨り達了するのみに非ず、恆沙の諸佛、體皆同じ、獅子吼無畏の説、百獸之を聞いて皆な腦裂す、香象奔破するも威を失却す、天龍寂に聽いて欣悦を生ず、江海に遊び山川を涉り、師を尋ね道を訪うて參禪を爲す、曹谿の路を認得してより、生死相關からざることを了知す、行も亦禪、坐も亦禪、語默動靜體安然、縦ひ鋒刀に遇ふとも常に坦々、假饒毒藥も亦問々、我師然燈佛に見ゆることを得て、多劫曾て忍辱仙と爲る、幾回か生じ幾回か死す、生死悠悠として定止無し、頓に無生を悟了してより、諸の榮辱に於て何ぞ憂喜せん、深山に入り蘭若に住す、岑峯幽邃たり、長松の下、優遊して靜坐す野僧が家、闌寂たる安居實に瀟洒、覺すれば即ち了じて功を施さず、一切有爲の法と同じからず、住相の布施は生天の福、

猶ほ箭を仰いで虚空を射るが如し、勢力盡さぬれば箭還つて墜つ、來生の不如意を招き得たり、争か似かん無爲實相の門、一超直入如來地なるに、但だ本を得て末を愁ふること莫れ、淨瑠璃に寶月を含むが如し、我れ今此の如意珠を解す、自利々他終に歇さず、江月照し松風吹く、永夜の清宵何の所爲ぞ、佛性の戒珠心地に印す、霧露雲霞體上の衣、降龍の鉢、解虎の錫、兩結の金環鳴つて歴々是れ形を標して虚しく事持するにあらず、如來の寶杖親しく蹤跡す、眞をも求めず妄をも斷ぜず、二法空にして無相なることを了知す、無相は空なく不空もなし、即ち是れ如來の眞實相、心鏡明かに鑑みて碍り無し、廓然として瑩徹して沙界に周し、萬象森羅影中に現ず、一顆の圓光内外に非ず、豁達の空は因果を撥ふ、莽々蕩々として殃禍を招く、有を棄て空に著く病亦然り、還つて溺を避けて火に投ずるが如し、妄心を捨て眞理を取る、取捨の心巧僞と成る、學人了せずして修行を用ふ、眞に賊を認めて將つて子とすることを成す、法財を

損し功德を滅することは、斯の心意識に由らずと云ふこと莫し、是を以て禪門は心を了却す、頓に無生に入るは知見の力なり。
 大丈夫慧劍を乗る、般若の鋒、金剛の燄、但だ能く外道の心を摧くのみに非ず、早く曾て天魔の膽を落却す、法雷を震ひ、法鼓を撃ち、慈雲を布き、甘露を洒ぐ、龍象の蹴蹋潤ひ無邊、三乘五性皆な醒悟す、雪山の肥膩更に雜り無し、純ら醍醐を出す、我常に納む、一性圓に一切の性に通じ、一法徧く一切の法を含む、一月普く一切の水に現じ、一切の水月一月に攝す、諸佛の法身我性に入り、我が性還つて如來と合す、一地具足す一切地、色にあらず心にあらず行業にあらず、彈指圓成す八萬の門、刹那に滅却す三祇劫、一切の數句は數句に非らず、吾が靈覺と何ぞ交渉せん、毀るべからず讚むべからず、體、虚空の如く涯岸なし、當處を離れず常に湛然、覺ひれば則ち知る君が見る可からざることを、取ることを得ず捨つることを得ず、不可得の中只麼に得たり、默の時説、説の時默、

大施門開いて壅塞爲し、人有り我に何の宗をか解すと問はゞ、報じて道はん摩訶般若の力と、或は是、或は非、人識らず、逆行順行天も測ること莫し、吾早く多劫を経て修す、是れ等閑に相誑惑するにあらず、法幢を建て宗旨を立す、明々たる佛敎曹谿是れなり、第一の迦葉首に燈を傳ふ、二十八代西天の記江海を歴て此土に入る、菩提達磨を初祖と爲す、六代の傳衣天下に聞ゆ、後人の得道何ぞ數を窮めん、眞をも立せず妄本空なり、有無俱に遣れば不空も空なり、二十の空門元著せず、一性の如來體自ら同じ、心はこれ根、法はこれ塵、兩種猶鏡上の痕の如し、痕垢盡き除いて光始めて現ず、心法雙べ亡じて性則ち空なり、嗟末法の惡時世、衆生薄福にして調制し難し、聖を去ること遠うして邪見深し、魔強く法弱うして怨害多し、如來頓敎の門を説くことを聞いて、滅除して瓦のごとくに碎かしめざるを恨む、作は心に在り、殃は身に在り、怨訴して更に人を尤むるとを須ひされ、無間業を招かざることを得んと欲せば、

如來の正法輪を謗すること莫れ、梅檀林に雜樹無し、鬱密深沆として獅子のみ住す、境靜かに林閒にして獨り自ら遊ぶ、走獸飛禽皆な遠く去る、獅子兒衆後に隨ふ、三歳にして便ち能く大に哮吼す、若し是れ野干法王を逐ふならば百千の妖怪も虚りに口を開かん、圓頓の敎は人情没し、疑あつて決せずんば直に須らく争ふべし、是れ山僧人我が逞うするにあらず、修行恐らくは斷常の坑に墮せんことを、非も非ならず、是も是ならず之と差ふこと毫釐もすれば失すること千里、是なるときは龍女も頓に成佛し、非なるときは善星も生れながら陷墜す、吾れ早年より來かた學問を積み、亦曾つて疏を討ね經論を尋ぬ、名相を分別して休することを知らず、海に入つて沙を算へて徒に自ら困す、却つて如來に苦ろに呵責せらる、他の珍寶を數へて何の益かあると、從來踏躑として虚りに行ずることを覺ゆ、多年枉げて風塵の客と作る、種性邪なれば錯つて知解す、如來圓頓の制に達せず、二乗は精進にして道心なく、外道は聰明にして知慧無

し、亦た愚癡亦た小駭、空拳指上に實解を生ず、指を執して月と爲す枉げて功を施す、根境法中虚りに捏怪す、一法を見ざれば即ち如來方に名けて、觀自在と爲すことを得たり、了ずれば即ち業障本來空、未だ了ぜざれば還つて須らく宿債を償ふべし、飢えて王膳に逢ふとも喰ふこと能はずんば、病んで醫王に遇ふとも争でか瘡ることを得ん、欲に在つて禪を行ずるは知見の力なり、火中に蓮を生ず、終に壞せず、勇施重を犯して無生を悟り、早時成佛して今に在り、獅子吼無畏の説深く嗟く、憐憫たる頑皮靴、但だ犯重の菩提を障ふることを知つて、如來の秘訣を開くことを見ず、二比丘有り姪殺を犯す、波離の螢光罪結を増す、維摩大士頓に疑ひを除く、猶ほ赫日の霜雪を銷するが如し不思議解脱の力、妙用恒沙また極り無し、四事の供養敢て勞を辭せんや、萬兩の黄金も亦た消得す、粉骨碎身も未だ酬ゆるに足らず、一句了然として百億を超ゆ、法中の王最も高勝、河沙の如來同じく共に證す、我れ今此の如意珠を解す、之れを

信受する者は皆な相應す、了々として見るに一物もなし、亦人も無く亦佛も無し、大千沙界海中の漚、一切の賢聖は電の拂ふが如し、たとひ鐵輪頂上に旋るも、定慧圓明にして終に失せず、日は冷かなる可く月は熱かる可くとも、衆魔も眞説を壞すること能はず、象駕崢嶸として謾に途に進む、誰か見る、螳螂の能く輒を拒むことを、大象、兔徑に遊ばず、大悟小節に拘らず、管見を將つて蒼々を誘ふこと莫れ、未だ了ぜずんば吾れ今君が爲めに決せん。

永嘉大師證道歌終

洞山悟本禪師五位顯訣

正位却て偏、偏に就て辨得すれば是れ兩意を圓にし、偏位偏なりと雖、亦兩意

を圓にす、緣中に辨得すれば是れ有語中の無語、或は正位中來なる者あり、是れ無語中の有語、或は偏位中來なる者あり、是れ有語中の無語、或兼帶來相はなる者あり、這裡有語無語を説かず、語裡直に須らく正面にして去るべし、這裡圓轉ならざることを得ざれば、事須らく圓轉すべし、然も途に在るの語は總に是れ病めり、夫れ當人先づ須らく語句を辨得して正面にして去るべし、有語是れ恁麼に來る、無語是れ恁麼に去る、作家中言語無きにあらず、有語無語に涉らず、這箇喚んで兼帶の語となす、全く的々なし。

五位顯訣終

備

- 一、五位の説は洞山の創見にて、寶鏡三昧、玄中銘等と與に洞上の宗風を明せる聖典なり、參學の者、其主旨を領解するを要す。
- 二、古來或は五位説は藥山より出づと解する者あり、然れども、洞山大師に至つて大に世に興りたるものにて、之を洞山の創見となすを當れりとす。
- 三、五位とは、正中偏、偏中正、正中來、偏中至、兼中到を云ふ、此の本文より摘出して斯く定めたるなり、次の逐位の頌を見よ。

考

洞山悟本大師五位逐位の頌

正中偏。三更初夜月明の前、恠しむこと莫れ相逢うて相識らざることを、隱々猶舊日の妍を懷ふ。

偏中正。失曉の老婆古鏡に逢ふ、分明靚面別に真無し、更に頭に迷うて還つて影を認むることを休めよ。

正中來。無中路あり塵埃を隔つ、但能く當今の諱に觸れずんば、也た前朝斷舌の才に勝れり。

偏中至。兩刃鋒を交へて相避けず、好手は猶火裡の蓮の如し、宛然として自ら衝天の氣あり。

兼中到。有無に落ちず誰か敢て和せん、人々盡く常流を出でんと欲す、折合して還つて炭裡に歸して坐す。

逐位の頌終

備考

此頌は曹山本寂禪師の作なりと云ふ説多し、但し、曹山禪師の揀文あるが故に洞山禪師の作を、曹山禪師が揀したるものとも云はる、洞山悟本大師の前の頌に資の曹山が、分別を加へ且つ揀文を付したりと云ふもの或は正からんか、更に攻究を待つこととす。

洞山悟本大師功勳五位頌

向。聖主由來帝堯に法る、人を御するに禮を以て龍腰を曲ぐ、有る時間市頭邊に過れば、到る處文明にして聖朝を賀す。

奉。淨洗濃莊阿誰が爲めぞ、子規聲裡人の歸ぐを勸む、百花落ち盡れども啼は盡ること無し、更に亂峰深き處に向つて啼く。

功。枯木花開く却外の春、倒さまに玉象に騎つて麒麟を趁ふ、而今高く隠る千峰の外、月皎く風清し好日辰。

共功。衆生諸佛相侵さず、山自ら高く兮水自ら深し、萬別千差底事をか明す、

鷓鴣啼く處百花新なり。

功功。頭角纒かに生ずれば已に堪へず、心に擬して佛を求む好し羞慚するに、迢々たる空劫人の識る無し、南に向つて五十三に詢ぬるを肯はんや。

功勳五位頌終

備考

功勳五位は正偏五位の一部に非ず、偏位の中より更に修行の階級を「譬へば初生の鳩兒の羽毛可憐生、久々にして能く高く飛揚するが如き」經路を以て示されたものとす、參學者之に由つて修行せば、必ず、其堂に達すべし、粗茶の見を爲すこと勿れ。

天童宏智禪師坐禪箴

佛々の要機、祖々の機要、事に觸れずして知り、縁に對せずして照す、事に觸

功勳五位頌 宏智禪師坐禪箴

れずして知る、其知自ら微なり、縁に對せずして照す、其照自ら妙なり、其知自ら微なり曾て分別の思無し、其照自ら妙なり、曾て毫忽の兆無し、曾て分別の思無し、其知無偶にして奇なり、曾て毫忽の兆無し、其照無取にして了ず、水清うして底に徹し今、魚行いて遅々たり、空濶うして涯莫し今、鳥飛んで杳々たり。

天童宏智禪師坐禪箴終

考 備

- 一、參同契は又は參同契文と云ひ、寶鏡三昧は又は寶鏡三昧歌と云ふ、信心銘と云ひ證道歌と云ふより考ふれば、此の稱呼も亦故ありと謂ふべし。
- 二、證道歌は晨旦聖者大乘決疑經と云ふ人あり、何れの時に始まるを知らず。
- 三、各編讀方には多少の相違あり、文意も稍異なれども、今は普通に行はるゝを取れり。

第八 日本祖錄部

日本祖錄部解題

斯部には主として兩大本山開祖の選述を擧ぐ、永平道元禪師の「普勸坐禪儀」は宋より歸朝の年即ち嘉祿三年、京都建仁寺寓居中の撰述にして、弘法傳道最初の垂訓、一代言教の標榜、普く參禪を勸め、その儀則を示せるものなり。「坐禪箴」は僅の文字に禪の消息を道破し玉ひしもの、「學道用心集」は天福二年の撰述、全篇十章より成り初心參學の徒のために學道修行の方法心得を示されたるものなり。總持瑩山禪師の「坐禪用心記」は永光禪の目的、方法、用心等を微細に示されれば、曹洞禪の儀則を知るに最も肝要なる書なり。「三根坐禪說」は短文の中に上中下三根の機類に對し、坐道を修する様子を述べたるものなり。面山和尚の「經行軌」は、坐禪の時坐屈及睡眠を防ぐべく行はる、彼の一息半歩の經行の儀則及心得を説けり以て坐禪の儀則を補ふに足るべし。「修證義」は道元禪師「正法眼藏」九十五卷中より曹洞宗の安心に關する要文を抄出編輯されたるもの、近來の編纂なりと雖も、文々句々皆佛祖の暖皮肉なり。

普勸坐禪儀

原るに夫れ道本圓通争てか修證を假らん、宗乘自在何ぞ功夫を費さん、況や全體週かに塵埃を出づ、孰か拂拭の手段を信ぜん、大都當處を離れず豈に修行の脚頭を用ふる者ならんや、然れども毫釐も差あれば天地懸かに隔たる、違順纒かに起れば紛然として心を失す、直饒會に誇り悟に豊にして警地の知通を獲、道を得心を明らかに明らめて衝天の志氣を擧し、入頭の邊量に逍遙すと雖、幾んど出身の活路を虧闕す、矧んや彼の祇園の生知たる、端坐六年の蹤跡見つべし、少林の心印を傳ふる面壁九歳の聲名尙聞ゆ、古聖既に然り今人盍ぞ辨ぜざる、所以に須らく言を尋ね語を逐ふの解行を休すべし、須らく回光返照の退歩を學すべし、身心自然に脱落して本來の面目現前せん、恁麼の事を得んと欲せば急に恁麼の事を務めよ。

夫れ參禪は靜室宜しく飲食節あり、諸縁を放捨し、萬事を休息して善惡を思はず是非を管すること莫れ、心意識の運轉を停め念想觀の測量を止めて作佛を圖ること莫れ、豈に坐臥に拘らんや。

尋常坐處には厚く坐物を敷き上に蒲團を用ふ、或は結跏趺坐或は半跏趺坐、謂く跏趺坐は先づ右の足を以て左の脛の上に安じ左の足を右の脛の上に安ず、半跏趺坐は但左の足を以て右の脛を壓すなり、寛く衣帶を繫けて齊整ならしむべし、次に右の手を左の足の上に安じ、左の掌を右の掌の上に安ず、兩の大拇指面へて相拄ふ、乃ち正身端坐して左に側ち右に傾き前に躬まり後へに仰ぐことを得され、耳と肩と對し鼻と臍と對せしめんことを要す、舌上の腭に掛け唇齒相著け目は須らく常に開くべし、鼻息微かに通じ身相既に調つて欠氣一息し左右に搖振し兀兀として坐定して、箇の不思議底を思量せよ、不思議底如何んが思量せん、非思量此れ乃ち坐禪の要術なり。

謂はゆる坐禪は習禪にはあらず、唯是れ安樂の法門なり、菩提を究盡するの修證なり、公案現成羅籠未だ到らず若し此の意を得ば、龍の水を得るが如く虎の山に靠るに似たり、當に知るべし正法自ら現前して昏散先づ撲落することを。若し坐より起たば徐徐として身を動かし安詳として起つべし、卒暴なるべからず、嘗て觀る超凡越聖、坐脱立亡も此の力に一任することを、況んや復た指竿針槌を拈ずるの轉機、拂拳棒喝を擧するの證契も未だ是れ思量分別の能く解する所にあらず、豈に神通修證の能く知る所と爲んや、聲色の外の威儀たるべし、那んど知見の前の規則に非ざる者ならんや、然れば則ち上智下愚を論ぜず利人鈍者を簡ぶこと莫れ、專一に功夫せば正に是れ辨道なり、修證自ら染汚せず趣向更に是れ平常なる者なり、凡そ夫れ自界他方西天東地等しく佛印を持し一ら宗風を擅にす、唯打坐を務めて兀地に礙へらる、萬別千差と謂ふと雖も祗管に參禪辨道す、何ぞ自家の坐牀を抛却して謾りに他國の塵境に去來せん、

若し一步を錯れば當面に蹉過す、既に人身の機要を得たり、虚く光陰を度るこ
 と莫れ、佛道の要機を保任す、誰か浪りに石火を樂まん、加以、形質は草露
 の如く運命は電光に似たり、倏忽として便ち空しく須臾に即ち失す、冀くは其
 れ參學の高流久しく模象に習つて眞龍を怪むこと勿れ、直指端的の道に精進し
 絶學無爲の人を尊貴し、佛佛の菩提に合沓し祖祖の三昧に嫡嗣せよ、久しく恚
 麼なることを爲さば須らく是れ恚麼なるべし、寶藏自ら開けて受用如意なら
 ん。

普勸坐禪儀終

備考

坐禪儀は、夜坐の後、開靜の前に、ゆるく讀むを常とす、其の緩急は口傳あり、概ね、「ン」の
 音と、「ウ」の音とを特に長く引くを要領とす、坐堂の自然の約束に従ふもの歟。
 「逐ふ」をオホフと云ひ、「作佛」をサブツトと訓み、「坐物を」をザモツトと訓む如き何となく
 發音の便宜に従へるものとす。

坐禪箴

佛佛の要機祖祖の機要、不思量にして現じ不互にして成ず、不思量にして現
 ず、其の現自ら親し、不互にして成ず、其の成自ら證す、其の現自ら
 親し、曾て染汚無し、其の成自ら證す、曾て正偏無し、曾て染汚無きの親、
 其の親委すること無うして脱落す、曾て正偏無きの證、其の證圖ること無うし
 て功夫す、水清うして地に徹し、魚行いて魚に似たり、空濶うして天に透る鳥
 飛んで鳥の如し。

坐禪箴終

備考

右は道元禪師の「坐禪箴」なるが、此外五雲和尚の「坐禪箴」其他支那諸師に坐禪箴あり。
 坐禪箴も坐禪儀を續けて讀誦するが故に音調は總て坐禪儀と同じからんを要す。

永平坐禪儀

永平初祖學道用心集

第一 菩提心を發す可き事

右菩提心とは多名一心なり、龍樹祖師の曰く世間の生滅無常を觀するの心も亦菩提心と名く、然れば乃ち此の心に依つて菩提心と爲す可き者歟、誠に夫れ無常を觀する時、吾我の心生ぜず名利の念起らず、時光の太だ速かなることを恐怖す、所以に行道は頭燃を救ふ、身命の牢からざることを顧眄す、所以に精進は翹足に慣ふ、縦ひ緊那迦陵讚歎の音聲を聞くも夕の風耳を拂ふ、縦ひ毛嬙西施美妙の容顔を見るも朝の露眼を遮ざる、已に聲色の繫縛を離るれば自ら道心の理致に合はん歟、往古來今、或は寡聞の士を聞き、或は少見の人を見るに、多くは名利の坑に墮して永く佛道の命を失す、哀む可く惜しむ可し、知らずんばある可からず、縦ひ權實の妙典を讀む有り、縦ひ顯密の教籍を傳ふる有るも

未だ名利を抛たざれば未だ發心と稱せず、有が云く、菩提心とは無上正等覺心なり名聞利養に拘る可からず、有が云く一念三千の觀解なり、有が云く一念不生の法門なり、有が云く入佛界の心なりと、是の如きの輩は未だ菩提心を知らず、猥に菩提心を謗す、佛道の中に於て遠うして遠し、試に吾我名利の當心を顧みよ、一念三千の性相を融するや否や、一念不生の法門を證するや否や、唯貪名愛利の妄念のみ有つて更に菩提道心の取る可き無きをや、古來得道得法の聖人、同塵の方便有りと雖、未だ名利の邪念有らず、法執すら尙ほ無し況んや世執をや謂ゆる菩提心とは前來云ふところの無常を觀する心便ち是れ其の一なり、全く狂者の指す所に非ず、彼の不生の念三千の想は發心以後の妙行なり、猥にすべからざるもの歟、唯暫く吾我を忘れて潜かに修す、乃ち菩提心の親しきなり、所以に六十二見は我を以つて本と爲す、若し我見起る時は靜坐觀察せよ、今我が身體内外の所有何を以つて本と爲んや、身體髮膚は父母に稟く、

赤白の二滴始終是れ空なり、所以に我に非ず、心意識智壽命を繋ぐ、出入の一息畢竟如何、所以に我に非ず、彼此執るべき無さをや、迷者は之れを執り、悟者は之れを離る、而るを無我の我を計し不生の生を執す、佛道の行すべきを行ぜず、世情の斷ずべきを斷ぜず、實法を厭ひ妄法を求む豈錯らざらんや。

第二 正法を見聞して必らず修習すべき事

右忠臣一言を獻すれば、數回天の力有り、佛祖一語を施せば、回心せざる人莫し、回心せざるが如きは、順流生死これ未だ斷ぜず、忠言を容れざるが如きは、治國徳政之れ未だ行はれず。

第三 佛道は必ず行に依つて證入すべき事

右俗に曰く、學べば祿其の中に在り、佛の言はく行ずれば證其の中に在りと、未だ嘗て學ばずして祿を得る者、行ぜずして證を得る者を聞くを得ず、縦ひ行に信法頓漸の異なるも必ず行を待つて超證す、縦ひ學に淺深利鈍の科あるも必

ず學を積んで祿に預る、是れ乃ち獨り王者の優と不優と天運の應と不應とに由る可さに非ざる歟、若し學に非ずして祿を受くる者ならば、誰か先王理亂の道を傳へん、若し行に非ずして證を得る者ならば誰か如來迷悟の法を了ぜん、識る可し行を迷の中に立て、證を覺の前に獲ることを、時に始めて船筏の昨夢を知つて、永く藤蛇の舊見を斷ず、是れ佛の強爲に非ず、機の周旋せしむる所なり、況んや行の招くところの者は證なり、自家の寶藏外より來らず、證の使ふところの者は行なり、心地の蹤跡豈回轉すべけんや、然而、若し證眼を回らして行地を願みば、一翳の眼に當る無く、將に見んとすれば白雲萬里、若し行足を擧して證階を擬すれば、一塵の足を受くる無く、將に踏んとすれば天地懸隔す、是に於て退歩せば佛地を躑跳す。

天福二甲午三月九日書す。

第四 有所得の心を以つて佛法を修す可からざる事

右佛法修行は必ず先達の心訣を稟けて私の用心を用ひざる歟、況んや佛法は有

心を以つても得可からず無心を以つても得可からず、但操行の心と道と符合せざれば、身心未だ嘗て安寧ならず、身心未だ安寧ならざれば身心安樂ならず、身心安樂ならざれば道を證するに荆棘生ず、謂ゆる操行と道と合して如何んが行履せん、心取捨せず心名利無きなり、佛法修行は是れ人の爲に修せず、今世の人の如きは佛法修行の人、其の心と道と遠うして之れ遠し、若し人賞翫すれば縦ひ非道と知るも乃ち之れを修行す、若し恭敬讚歎せずんば是れ正道と知ると雖、弃て、修せず、痛ましいかな、汝等試に心を静かにして觀察せよ、此の心行佛法とせんや、佛法に非すとせんや、恥づべし恥づべし聖眼の照すところなり、夫れ佛法修行は自身の爲にすらせず、況んや名聞利養の爲に之れを修せんや、但佛法の爲に之れを修すべきなり、諸佛の慈悲にして衆生を哀愍するは、自身の爲にせず他人の爲にせず、唯佛法の常なり、見ずや小虫畜類の其の子を養育し、身心艱難し、經營苦辛して、畢竟長養するに父母に於て終ひ

に益無きをや、然れども子を念ふの慈悲あり、小物すら尚ほ然り自ら諸佛の衆生を念ずるに似たり、諸佛の妙法は唯慈悲一條のみにあらず、普ねく諸門に現ず、其の本皆然かなり、既に佛子と爲り盍んぞ佛風に慣はざらんや、行者自身の爲に佛法を修すと念ふべからず、名利の爲に佛法を修すべからず、果報を得んが爲に佛法を修すべからず、靈驗を得んが爲に佛法を修すべからず、但佛法の爲に佛法を修する乃ち是れ道なり。

第五 參禪學道は正師を求むべき事

右古人云く、發心正しからざれば萬行空しく施すと、誠なるかな此の言、行道は導師の正と邪とに依るべき歟、機は良材の如く師は工匠に似たり、縦ひ良材たりと雖も、良工を得ざれば綺麗未だ彰れず、縦ひ曲木なりと雖も、若し好手に遇はゞ妙功忽ち現はる、師の正邪に随つて悟の眞偽有り之れを以つて曉るべし、但し我が國は昔より正師未だ在らず、何を以つてか之が然るを知る、言を見て

察するなり、流を酌んで源を討ぬるが如し、我が朝古來の諸師篇集の書籍、弟子に訓へ人天に施す、其の言是れ青く其の語未だ熟せず、未だ學地の頂に到らず何んぞ證階の邊りに及ばん、只文言を傳へ名字を誦せしむ、日夜他の寶を數へて自ら半錢の分なし、古の責之に在り、或は、人をして心外の正覺を求めしめ、或は人をして他士の往生を願はしむ、惑亂此れより起り邪念此れを職とす、縦ひ良藥を與ふと雖も、銷する方を教へずんば病と作ることを毒を服するよりも甚し、我が朝古より良藥を與ふる人無きが如し、藥毒を銷する師、未だ在らず、是を以つて生病除き難く老死何んぞ免れん、皆是れ師の咎なり全く機の咎に非ず、所以は何ん、人の師たる者人をして本を捨て、末を逐はしむるの然らしむるなり、自解未だ立せざる以前偏に己我の心を專にして濫りに他人をして邪境に墜つることを招かしむ、哀れむべし、師たるものすら未だ是の邪惑を知らず、弟子何すれぞ是非を覺了せんや、悲むべし邊鄙の小邦佛法未だ弘通せ

ず、正師未だ出世せず、若し無上の佛道を學ばんと欲せば遙に宋土の知識を訪ふべし遙かに心外の活路を顧るべし、正師を得ざれば學ばざるに如かず、夫れ正師は年老者宿を問はず唯だ正法を明めて正師の印證を得るなり、文字を先とせず解會を先とせず、格外の力量あり過節の志氣有りて、我見に拘らず情識に滯らず、行解相應す、是れ乃ち正師なり。

第六 參禪知るべき事

右參禪學道は一生の大事なり、忽にすべからず豈卒爾ならんや、古人臂を斷ち指を斬る、神丹の勝躡なり、昔は佛家を捨て國を捐つ行道の遺蹤なり、今の人云く行じ易きの行を行はずべしと、此の言尤も非なり、佛道に合はず、若し事を専らにして以つて行を擬せば、偃臥猶ほ懶し、一事に懶ければ萬事に懶らし、易きを好むの人は自ら道器に非ることを知る、況んや今世流布の法は、此れ乃ち釋迦大師無量劫來難行苦行して然して後に乃ち此の法を得たり、本源既に爾

なり流波豈易かるべけんや、道を好むの士は易行に志すこと莫れ、若し易行を求めば定んで實地に達せず、必らず寶所に到らざる者歟、古人大力量を具するすら尚ほ言ふ行じ難しと、識るべし佛道の深大なることを、若し佛道本より行じ易き者ならば古來大力量の士難行難解と言ふべからず、今人を以つて古人に比するに九牛の一毛にだも及ばず、而るに此の小根薄識を以つて縦ひ力を勵まして以つて難行能行に擬するに猶ほ古人の易行易解にだも及ぶべからず、今人の好む所の易解易行の法は其れ是れ何ぞや、已に世法に非ず、又佛法に非ず、未だ天魔波旬の行にも及ばず、未だ外道二乗の行にも及ばず、凡夫迷妄の甚しきと云ふ可き歟、縦ひ出離に擬すと雖も、還つて是れ無窮の輪廻なり、其の骨を折り髓を碎くを觀るも亦難からずや、心操を調ふるの事最も難し、長齋梵行も亦難からずや、身行を調ふるの事尤も難し、若し粉骨貴むべくんば之れを忍ぶ者昔より多しと雖も、得法の者惟れ少なし、齋行の者貴むべくんば古より多しと雖も悟道の者惟れ少なし、是れ乃ち心を調ふること甚だ難きが故なり、聰明を先と爲す、學解を先と爲す、心意識を先と爲す、念想觀を先と爲す、向來都て之を用ひずして、而して身心を調へて以て佛道に入るなり、釋迦老子曰く觀音流を入へして所知を亡すと即ち之の意なり、動靜の二相了然として生ぜず即ち之れ調なり、若し聰明博解を以て佛道に入るべくんば、神秀上座其の人なり、若し庸體卑賤を以つて佛道を嫌ふべくんば曹溪高祖豈敢てせんや、佛道を傳へ得るの法は聰明博解の外に在り、事是に於て明けし、探つて尋ぬべし、願みて參ずべし、又年老耆及をも嫌はず、幼稚壯齡をも嫌はず趙州は六旬餘にして始めて參ず然りと雖も、祖席の英雄なり、鄭娘は十三歳にして久學す、能く又叢林の拔萃なり、佛法の威は加と不加とに見え、參と不參とに分つ、或は教家の久習、或は世典の舊才も皆禪門を訪ふべし、其の例是れ多し、南岳の慧思は多材の人なり尚ほ達磨に參ず、永嘉の玄覺は秀逸の士なり已に大鑑に參ず、

なり流波豈易かるべけんや、道を好むの士は易行に志すこと莫れ、若し易行を求めば定んで實地に達せず、必らず寶所に到らざる者歟、古人大力量を具するすら尚ほ言ふ行じ難しと、識るべし佛道の深大なることを、若し佛道本より行じ易き者ならば古來大力量の士難行難解と言ふべからず、今人を以つて古人に比するに九牛の一毛にだも及ばず、而るに此の小根薄識を以つて縦ひ力を勵まして以つて難行能行に擬するに猶ほ古人の易行易解にだも及ぶべからず、今人の好む所の易解易行の法は其れ是れ何ぞや、已に世法に非ず、又佛法に非ず、未だ天魔波旬の行にも及ばず、未だ外道二乗の行にも及ばず、凡夫迷妄の甚しきと云ふ可き歟、縦ひ出離に擬すと雖も、還つて是れ無窮の輪廻なり、其の骨を折り髓を碎くを觀るも亦難からずや、心操を調ふるの事最も難し、長齋梵行も亦難からずや、身行を調ふるの事尤も難し、若し粉骨貴むべくんば之れを忍ぶ者昔より多しと雖も、得法の者惟れ少なし、齋行の者貴むべくんば古より多しと雖も悟道の者惟れ少なし、是れ乃ち心を調ふること甚だ難きが故なり、聰明を先と爲す、學解を先と爲す、心意識を先と爲す、念想觀を先と爲す、向來都て之を用ひずして、而して身心を調へて以て佛道に入るなり、釋迦老子曰く觀音流を入へして所知を亡すと即ち之の意なり、動靜の二相了然として生ぜず即ち之れ調なり、若し聰明博解を以て佛道に入るべくんば、神秀上座其の人なり、若し庸體卑賤を以つて佛道を嫌ふべくんば曹溪高祖豈敢てせんや、佛道を傳へ得るの法は聰明博解の外に在り、事是に於て明けし、探つて尋ぬべし、願みて參ずべし、又年老耆及をも嫌はず、幼稚壯齡をも嫌はず趙州は六旬餘にして始めて參ず然りと雖も、祖席の英雄なり、鄭娘は十三歳にして久學す、能く又叢林の拔萃なり、佛法の威は加と不加とに見え、參と不參とに分つ、或は教家の久習、或は世典の舊才も皆禪門を訪ふべし、其の例是れ多し、南岳の慧思は多材の人なり尚ほ達磨に參ず、永嘉の玄覺は秀逸の士なり已に大鑑に參ず、

法を明らめ道を得るは參師の力たるべし、但し宗師に參問するの時、師の説を聞いて己見に同うすると勿れ、若し己見に同うすれば師の法を得ざるなり、參師問法の時、身心を淨うし耳目を靜かにし師の法を聽受して、更に餘念を交へざれ、身心一如にして水を器に瀉ぐが如くせよ、若し能く是の如くならば方に師の法を得ん、今愚魯の輩、或は文籍を記し、或は先問を藎み、以つて師の説に同うす、此の時唯己見古語のみ有つて師の言未だ契はず、或は一類あり、己見を先にして經卷を披き一兩語を記持して以つて佛法と爲す、後に明師宗匠に參じて法を聞くの時、若し己見に同じければ是となし若し舊意に合はずんば非と爲す、縦ひ塵沙劫も尙ほ迷者たらん尤も哀れむべし、參學識るべし、佛道は思量と分別と下度と觀想と知覺と慧解との外に在ることを、若し此れ等の際に在らば生來常に此れ等の中に在り、何が故ぞ今に佛道を覺せざる、學道は思量分別等の事を用ふべからず、常に思量等を帯びて吾が身を以つて檢點せば是に

於て明鑑なる者なり、其の所入の門は得法の宗匠有つて之れを悉くす、文字法師の及ぶところに非るのみ。天福甲午清明の日書す。

第七 佛法を修行して出離を欣求する人は須らく參禪すべき事

右佛法は諸道に勝れたり故に人之を求む、如來の在世には全く二教無く、全く二師無し、大師釋尊唯無上菩提を以て衆生を誘引するのみ、迦葉正法眼藏を傳へてより以來、西天二十八代東土十六代、乃至五家の諸祖嫡々相承して更に斷絶無し、然れば則ち梁の普通中より以後、始めて僧徒より及び王臣に至るまで、拔群の者は歸せずといふこと無し、誠に夫れ勝を愛すべき所以のものは勝を愛すべきなり、葉公の龍を愛するが如くなるべからざるもの歟、神丹以東の諸國、文字の教網海に布き山に徧ねし、山に徧ねしと雖も雲の心無く、海に布くと雖も波の心を枯らす、愚者は之れ嗜む、譬へば魚目を撮つて以つて珠と執するが如し、迷者は之れを翫ぶ、譬へば燕石を藏して以つて玉と崇するが如し、多く

魔境に墮して屢自身を損ふ、哀ひべし邊鄙の境、邪風扇ぎ易く正法通じ難し、然りと雖も、神丹一國は已に佛の正法に歸す、我が朝高麗等は佛の正法未だ弘通せず何んが爲ぞ、高麗國は猶ほ正法の名を聞く、我が朝未だ嘗て聞くことを得ず、前來入唐の諸師皆教網に滯りしが故なり、佛書を傳ふと雖も佛法を忘るるが如し、其の益是れ何ぞ、其の功終に空し、是れ乃ち學道の故實を知らざる所以なり、哀ひべし徒に勞して一生の人身を過すことを、夫れ學佛道は初め門に入る時、智識の教を聞いて教の如く修行す、此の時知るべき事有り、謂ゆる法我を轉じ我法を轉ずるなり、我能く法を轉ずるの時、我は強く法は弱し、法還つて我を轉ずるの時、法は強く我は弱し、佛法從來此の兩節あり、正嫡に非ざれば未だ嘗て之れを知らず、衲僧に非ざれば名すら尙ほ聞くこと罕なり、若し此の故實を知らざる者は、學道未だ辨せず正邪奚んすれそ分別せんや、今の參禪學道の人、自ら此の故實を傳授す、所以に課らざるなり餘門には無し、

佛道を欣求するの人は參禪に非ずんば眞の道を了知すべからざるなり。

第八 禪僧行履の事

右佛祖より以來直指單傳、西乾の四七東地の六世、絲毫を添へず一塵を破る莫し、衣は曹溪に及び法は沙界に周ねし、時に如來の正法眼藏巨唐に盛なり、其の法の爲體、摸索することを得ず求覓することを得ず、見處知を忘じ得時心を超ゆ、面目を黃梅に失し臂腕を少室に斷ず、髓を得、心を翻して風流を買ひ、拜を設け歩を退いて便宜に墮つ、然り而して心に於ても身に於ても、住すること無く著すること無く、留まらず滯らず、趙州に僧問ふ、狗子還つて佛性有りや亦た無しや、州云く無、無の字の上に於て擬量し得てんや擁滯し得てんや、全く巴鼻無し、請ふ試に手を撒せよ、且く手を撒して看よ、身心如何、行李如何、生死如何、佛法如何、世法如何、山河大地人畜家屋畢竟如何、看來り看去つて、自然に動靜の二相了然として生ぜず、此の不生の時是れ頑然なるにあら

ず、人の之れを證する無く、之れに迷ふことは惟れ多し、參禪の人且らく半途にして始めて得たり、至途にして辭すること莫れ、祈禱々々。

第九 道に向つて修行すべき事

右學道の丈夫は、先づ須らく向道の正と不正を知るべし、夫れ釋尊調御菩提樹下に坐して、明星を見るを得忽然として頓に無上乘の道を悟る、其の悟る所の道は聲聞緣覺等の能く及ぶところに非ず、佛能く自から悟り、佛、佛に傳へて今に斷絶せず、其の悟を得る者豈佛に非らんや、謂ゆる道に向ふ者は佛道の際涯を了するなり、佛道の様子を明らむるなり、佛道は人々の脚跟下なり、道に礙へられて當處に明了し、悟に礙へられて當人圓成す、是れに因つて縱ひ十分の會を擧すと雖も猶ほ一半の悟に落つるが如き歟、是れ則ち向道の風流なり、而今學道の人未だ道の通塞を辨せず、強ひて見驗の有らんことを好む、錯まらざるは阿誰ぞ、父を捨て、逃逝し、寶を棄て、跽跚す、長者の一子たりと

雖も久しく客作の賤人と作る、良に以あるなり、夫れ學道は道に礙へらるゝことを求む、道に礙へらるとは悟迹を忘するなり、佛道を修行する者は先づ須らく佛道を信ずべし、佛道を信ずる者は須らく自己本道の中に在つて迷惑せず顛倒せず増減無く悞謬無しといふことを信ずべし是の如きの信を生じ是の如きの道を明らめ、依つて之れを行ず、乃ち學道の本基なり、其の風規たる、意根を坐斷して知解の路に向はざらしむ、是れ乃ち初心を誘引するの方便なり、其の後身心を脱落し迷悟を放下す、第二の様子なり、太凡自己佛道に在りと信ずるの人最も得難きなり、若し正しく道に在りと信ぜば、自然に大道の通塞を了じ迷悟の職由を知る、人試みに意根を坐斷せよ、忽然として見道を得ん也。

第十 直下承當の事

右身心を決擇するに自ら兩段あり、參師聞法と工夫坐禪となり、聞法は心識を遊化し、坐禪は行證を左右にす、是を以つて佛道に入るは尙ほ一を捨て、は承

當すべからず、夫れ人は皆な身心有り、作は必らず強弱有り勇猛と味劣となり、也は動也は容此の身心を以つて、直に佛を證して是れ承當するなり、謂ゆる從來の身心を回轉せず、但他の證に隨つて去る直下と名くるなり、承當と名くるなり唯他に隨つて去る、所以に舊見に非ず、唯承當し去る所以に新集に非ざるなり。

永平初祖學道用心集畢

備

高祖の撰述の中に讀方に二三の異説あり、「坐禪儀」の「道本圓通」は道モト圓通と云ふ説もあり、今ハ道ホン圓通を採る、「大都不離當處」の大都をオホヨソと讀むあり、又タイトと讀むあり、今はタイトと云ふを採る、坐禪儀は散文なれども、一種の諷誦文の如く、自ら送假名に簡潔を賞ぶ相傳あり、「論ぜざれ」と云ふべきを「論ぜず」と云ひ、「參禪辨道せよ」と云ふべきを「參禪辨道す」と云ふが如し、文に執して意を壞らざんば可なり。「用心集」にも「佛道本自」とあるをモトヨリと訓むは一考を要すれども、意に於て妨げなきに似たり、其他文語としては一層讀方を改むべきも、祖訓としては、却つて尊貴を感ずる所あり、可成相傳に従ひて改めず、識者須く之に實參すべき也。

坐禪用心記

夫れ坐禪は直に人をして心地を開明し本分に安住せしむ、是を本來の面目を露はすと名け、亦本地の風光を現はすと名く、身心俱に脱落し坐臥同じく遠離す、故に不思議不思議、能く凡聖を超越し迷悟の論量を透過し、生佛の邊際を離却す、故に萬事を休息し及び諸縁を放下し、一切爲さず六根爲すこと無し、這箇是れ阿誰を、曾て名を知らず、身と爲すべきに非ず心と爲すべきに非ず、慮らんと欲すれば慮絶し言はんと欲すれば言窮まる、癡の如く兀の如く、山高く海深く頂を露さず底を見ず、縁に對せずして照す眼、雲外に明らかなり、思量せずして通ず宗默説に朗らかなり、乾坤を坐斷して全身獨露す、没量の大人火死人の如く一翳の眼を遮るなく、一塵の足を受くる無し、何の處にか塵埃有らん、何者か遮障を作さん、清本表裏無く虚空終に内外無し、玲瓏明白にして自照靈

然たり、色空未だ分れず境智何ぞ立せん、從來共に住して歷劫名無し、三祖大師且く名けて心となし龍樹尊者假に名けて身と爲す、佛性の相を現じ諸佛の體を表す、此圓月の相は欠くること無く餘ること無し、即ち此心は便ち是れ佛なり、自己の光明古に騰り今に輝き龍樹の變相を得諸佛の三昧を成ず、心本二相無く身更に相像に異なり、唯身と唯心と異と同とを説かず、心變じて身と成り身露れて相分る、一波纒かに動いて萬波隨ひ來り心識才かに起つて萬法競ひ來る、謂はゆる四大五蘊遂に和合し四支五根忽ち現成す、以て三十六物十二因縁造作遷流し展轉相續するに至る、但衆法を以て合成して有り、所以に心は海水の如く身は波浪の如し、海水の外一點の波無きが如し、波浪の外一滴の水無きが如し、水波別無く動靜異ならず、故に云く生死去來眞實の人、四大五蘊不壞の身と。

今、坐禪は、正に佛性海に入つて即ち諸佛の體を標す、本有妙淨明の心頓に現前し、本來一段の光明終に圓照し海水都て増減無く波浪も亦退轉無し、是を以て諸佛一大事因縁の爲に世に出現し直に衆生をして佛の知見に開示悟入せしむ、寂靜無漏の妙術あり是を坐禪と謂ふ、即ち是れ諸佛の自受用三昧なり、又三昧王三昧と謂ふ、若し一時も此三昧に安住すれば則ち直に心地を開明す、寔に知る佛道の正門なることを、其心地を開明せんと欲する者は、雜知雜解を放棄し世法佛法を抛下し、一切の妄情を斷絶し一實の眞心を現成せば迷雲收り晴れて心月新たに明らかならん、佛言く聞思は猶門外に處するが如く、坐禪は正に家に還つて穩坐すと、誠なる哉夫の聞思の若きは諸見未だ休せず、心地尙滯る、故に門外に處するが如し、只箇の坐禪は一切休歇して處として通ぜざること無し、故に家に還つて穩坐するに似たり、而して五蓋の煩惱皆無明に従つて起る、無明は己を明らめざるなり、坐禪は是れ己を明らむる也、縦ひ五蓋を斷ずと雖も未だ無明を斷ぜざる是れ佛祖に非ず、若し無明を斷ぜんと欲せば坐

禪辨道最も是れ秘訣なり、古人云く妄息めば寂生じ、寂生ずれば智現ず、智現ずれば真見ると、若し妄心を盡さんと欲せば須らく善惡の思を休すべし、又須らく、一切の縁務都來放捨して心思ふこと無く身事とする無かるべし、是れ第一の用心なり、妄縁盡くる時妄心随つて滅す、妄心若し滅せば不變の體現じ了々として常に知る寂滅の法に非ず、動作の法に非ず、然して有らゆる技藝術道醫方占相皆當に遠離すべし、況んや歌舞妓樂、喧譁戲論、名相利養、悉く之に近づくべからず、頌詩歌詠の類自ら淨心の因縁たりと雖も而も好み營むこと莫れ、文章筆硯を擲下して用ひざるは是れ道者の勝躡なり、是れ調心の至要なり、美服と垢衣とは俱に着用すべからず、美服は貪を生じ又盜賊の畏あり、故に道者の障難と爲す、若しくは因縁あり、若しくは人の施與する有るも而も受けざるは古來の嘉蹤なり、縦ひ本より之あるも又照管せざれば、盜賊劫奪すとも追尋し恡惜すべからず、垢衣と舊衣とは浣洗補治して垢膩を去り淨潔ならしめ

て、而して之を着用すべし、垢膩を去らざれば身冷にして病發す、又障道の因縁たればなり、然も身命を管せずと雖も衣足らず食足らず睡眠足らざる之を三不足と名く、皆退惰の因縁なり、一切の生物堅物乃至損物不淨食皆之を食すべからず、腹中鳴動し身心熱惱して打坐に煩あり、一切の美食耽著すべからず、但身心煩有るのみに非ず、貪念未だ免かれざる所なり、食は祗氣を支ふるに取つて味を嗜むべからず、或は飽食して打坐すれば發病の因縁なり、大小の食後輒すく坐することを得ず、暫く少時を経て乃ち坐すべきに堪へたり、凡そ比丘僧は必ず食を節量すべし、節量食とは謂く分を涯るなり、三分の中に二分を食して一分を餘すべし、一切の風藥胡麻薯蕷等は常に之を服すべし、是れ調身の要術なり、凡そ坐禪の時牆壁禪椅及び屏障等に靠倚すべからず、又風の烈しき處に當つて打坐すると莫れ、高顯の所に登つて而して打坐すること莫れ、皆發病の因縁なればなり、若し坐禪の時身或は熱するが如く、或は寒するが如く或

は滑なるが如く或は堅きが如く或は柔なるが如く或は重きが如く或は軽きが如く或は驚覺するが如きは、皆息の調はざるなり、必ず之を調ふべし、調息の法は暫く口を開張して長息なれば則ち長に任せ、短息なれば則ち短に任せ、漸々に之を調へ、稍々に之に随つて覺觸し來る時自然に調適す、而して鼻息は通ずるに任せて通ずべし、心若し或は沈むが如く或は浮ぶが如く或は朦なるが如く或は利なるが如く或は室外通見し或は身中通見し、或は佛心を見、或は菩薩を見、或は知見を起し或は經論に通利する、是くの如き等の種々の奇特種々の異相は悉く念息不調の病なり、若し病ある時は心を兩趺の上に安じて而して坐す、心若し昏沈する時は心を髮際り上三寸眉間間に安じ、心若し散亂する時は心を鼻端丹田丹田とは脐下一寸五分を謂ふ也に安ず、居常に坐する時心を左掌の中に安ず、若し坐久しき時は必しも安心せずと雖も心自ら散亂せざるなり、復古教の如きんば照心の家訓なりと雖も、多く之を見之を書し之を聞くべからず、多き時は皆亂心

の因縁なり、凡そ身心を疲勞するは悉く發病の因縁なり、火難水難風難賊難、及與、酒肆娼房寡女處女妓樂の邊並びに打坐すること莫れ、國王大臣權勢の家、多欲名聞戲論の人にも亦之に近づき住することを得ざれ、大佛事大造營は最も善事と爲すと雖も、坐禪を専らにする人は之を修すべからず、説法教化を好むことを得ざれ、散心亂念是れより起る、多衆を好樂し弟子を貪求するを得ざれ、多行多學するを得ざれ、極明極暗極寒極熱乃至游人戲女の所並びに打坐すること莫れ、叢林の中善知識の處、深山幽谷之に依止すべし、綠水青山是れ經行の處、谿邊樹下是れ澄心の處なり、無常を觀じて忘るべからず、是れ探道の心を勵むなり。

坐褥は須らく厚く敷くべし、打坐安樂なり、道場は須らく清潔なるべし、而して常に香を燒き華を獻ずれば護法善神及び佛菩薩影向して守護するなり、若し佛菩薩及び羅漢の像を安置すれば一切の惡魔鬼魅その便を得ざるなり、常に大

慈大悲に住して坐禪無量の功德、一切衆生に回向して憍慢我慢法慢を生ずること莫れ、此れは是れ外道凡夫の法なり、誓つて煩惱を斷じ誓つて菩提を證せんと念はゞ只管打坐して一切不爲なる是れ參禪の要術なり、常に目を濯ひ足を洗ひ身心間靜威儀齊整なるべし、應に世情を捨つべし道情を執すること莫れ、法は慳む可らずと雖も然れども請せずんば説くこと莫れ、三請を守つて四實に従ひ、十たび言はんと欲して九たび休し去り、口邊醜生じて臘月の扇の如く、風鈴虚空に懸けて四方の風を問はざるが如くなるは是れ道人の風標なり、只法を以て人に貪らず、道を以て己を貢ぶらざれば便ち是れ第一の用心なり。夫れ坐禪は教行證に干かるに非ず而も此三徳を兼ね、謂く證は悟を待つて則とするを以てする是れ坐禪の心にあらず、行は眞履實踐を以てする是れ坐禪の心にあらず、教は斷惡修善を以てする是れ坐禪の心にあらず、禪中縦ひ教を立つれども而も居常の教に非ず、謂く直指單傳の道、舉體全く説話、語本章句没

し、意盡き理窮まる處一言十方を盡す、絲毫も未だ擧揚せず、是れ豈佛祖眞正の教にあらずらんや、或は行を談ずと雖も又無爲の行なり、謂く身に所作無く口に密誦無く心に尋思無く六根自ら清淨にして一切染汚せず、聲聞の十六行に非ず、緣覺の十二行に非ず菩薩の六度萬行に非ず、一切爲さず故に名けて佛と爲す、只諸佛の自受用三昧に安住して菩薩の四安樂行に遊戲す、是れ豈佛祖深妙の行にあらずらんや、或は證を説くと雖も無證にして證す、是れ三昧王三昧、無生智發現三昧、一切智發現三昧、自然智發現三昧、如來智慧開發明門大安樂行法門の所發なり、聖凡の格式を越え迷悟の情量を出づ、是れ豈本有大覺の證にあらずらんや。又坐禪は戒定慧に干るに非ず、而も此三學を兼ねたり、謂く戒は是れ防非止惡なり、坐禪は舉體無二を觀じ萬事を抛下し諸縁を休息し佛法世法管せず、道情世情雙べ忘じて是非も無く善惡も無し、何の防止か之れ有らん、此れは是れ心

地無相の戒なり、定は是れ觀想無餘なり、坐禪は身心を脱落し迷悟を捨離して
 不變不動、不爲不昧、癡の如く兀の如く山の如く海の如くにして動靜の二相了
 然として生ぜず、定にして定相無し、定相無きが故に大定と名く、慧は是れ簡
 擇覺了なり、坐禪は所知自ら滅し心識永く忘ず、通身慧眼簡覺あること無し、
 明らかに佛性を見て、本迷惑せず意根を坐斷し廓然として瑩徹す、是れ慧にし
 て慧相無く慧相無きが故に大慧と名く、諸佛の教門、一代の所説、戒定慧の中
 に總收せざるること無し、今坐禪は戒として持たざるること無く定として信ぜざる
 こと無く慧として通ぜざるること無く降魔成道轉輪涅槃皆此力に依る、神通妙用
 放光說法盡く打坐に在り、且つ參禪も亦坐禪なり。
 坐禪せんと欲せば先づ靜處宜し、茵褥須らく厚く敷くべし、風煙をして入らし
 ひること莫れ、雨露をして侵さしむること勿れ、膝を容るの地を護持し打坐の
 處を清潔にせよ、昔人金剛座に坐し盤石の上に坐するの蹤跡有りと雖も亦坐物

あらざるること無し、坐處は當應に晝明ならず夜暗ならず、冬暖かに夏冷なる
 べし、是れ其術なり、心意識を放捨し念想觀を休息して作佛を圖ること勿れ是
 非を管すること勿れ、光陰を護惜して頭燃を救ふが如くせよ、如來の端坐、少
 林の而壁、打成一片にして都て他事無し、石霜枯木に擬し太白坐睡を責む、燒
 香禮拜念佛修懺看經持課を用ひず祇管打坐して、始めて得んと、大抵坐禪の時
 は袈裟開定前後夜とを搭くべし、略すること莫れ、蒲團徑互一尺二寸は全く跏趺坐を
 支ふるに非ず、跏趺の半ばよりして後へ脊骨の下に至る、是れ佛祖の坐法なり、
 或は結跏趺坐し、或は半跏趺坐す、結跏の法は先づ右の足を以て左の脛の上に
 置き左の足を以て右の脛の上に置く、寛く衣物內衣は紐を繫けて齊整ならしむべ
 し、次に右の手を以て左の足の上に安じ、左の手を以て右の手の上に安じ、兩
 手の大指相拄へて身に近づけ、拄指の對頭當に臍に對して安ずべし、身を正ら
 して端坐して左に側ち右に傾き前に躬まり後へに仰ぐことを得ざれ、耳と肩と

鼻と臍と必ず俱に相對し、舌、上の腭を柱へ息は鼻より通じ唇齒相著けて眼は須らく正しく開くべし、張らず微めず是くの如く調身し已に欠氣して安息す、謂はゆる口を開いて氣を吐くこと一兩息なり、次に須らく坐定して身を搖かすこと七八度し麤より細に至つて兀々として端坐すべし、此に於て箇の不思議量を思量す、如何んが思量せん、謂く非思量此れ乃ち坐禪の要法なり、直に須らく煩惱を破斷して菩提を親證すべし。

若し定より起たんと欲せば先づ兩手兩膝の上に仰安しながら七八度して細より麤に至り、口を開き氣を吐き兩手を伸べて地を捺へ輕々に坐を起つて徐々として行歩す、須らく順轉し順行すべし、坐中若し昏睡來らば常に應に身を搖かし或は目を張り又心を頂上と髮際と眉間とに安ずべし、猶未だ醒めざる時は手を引いて應に目を拭ふべし、或は身を摩す、猶未だ醒めざる時は座を起つて經行す、正に要す順行す、順行して若し一百許歩に及ばば昏睡必ず醒めん、

而して經行の法は一息恒に半歩なり、行けども亦行かざるが如く寂靜にして動ぜず、是くの如く經行するも猶未だ醒めざる時は或は目を濯ひ頂を冷し或は菩薩戒序を誦し種々方便して睡眠せしむること勿れ、當に生死事大無常迅速なるに、道眼未だ明ならず、昏睡して何か爲んと觀ずべし、昏睡頻に來らば應に發願して業習已に厚し、故に今睡眠蓋を被むる昏蒙何の時か醒めん願くは佛祖大悲を垂れて我が昏重の苦を抜かんことをと云ふべし、心若し散亂する時は心を鼻端丹田に安じて出入の息を數へ、猶未だ休まざる時は須らく一則の公案提撕して舉覺すべし、謂く是れ何物か恁麼に來る、狗子無佛性、雲門須彌山、趙州柏樹子等の沒滋味の談是れ其所應なり、猶未だ休まざる時は一息截斷兩眼永閉の端的に向つて打坐工夫し、或は胞胎未生不起一念已前に向つて行履工夫、二空忽ち生じて散心必ず歇まん、定を起つの後思量せずして威儀を現する時は見成即ち公案、回互せずして修證を成する時は公案即ち見成なり、朕兆已前の

消息、空劫那畔の因縁、佛々祖々の靈機樞要唯此一事なり、直に須らく休し去り、歇し去り冷湫々地にし去り一念萬年にし去り、寒灰枯木にし去り古廟香爐にし去り一條白練にし去るべし、至禱至禱。

坐禪用心記終

考備

一「坐禪用心記」には各種の訓み方あり、「稍々として」を「稍々に」と云ひ、「阿誰ぞ」を「たぞ」、「あたそ」と云ふの類なり、今は主に諸嶽山藏版の『坐禪用心記不能語』により、多少の私見を挿めり。
二「坐禪用心記不能語」寶曆七年指月慧印和尚の撰にして其十一年刊行せられ、明治十六年一月廿は八日諸嶽山翻刻する所とす。

三根坐禪說

上根の坐禪は諸佛出世の事を覺するにあらず、佛祖不傳の妙を悟るにあらず、飢え來れば喫飯し、困じ來れば打眠す、萬象森羅を指して以て自己と爲るに非

ず、覺不覺俱に存せず、任運堂々として只麼に正坐す、然も是の如くなりと雖も諸法に於て分異せず、萬法味さず。

中根の坐禪は萬事を放捨し諸縁を休息して、十二時中暫くも怠隙無し、出息入息に就いて斷々として工夫す、或は一則の公案を提撕して雙眼を鼻端に注ぐ、自家本來の面目生死去來に涉らず、眞如佛性の妙理慮知分別に墮せず、不覺不知にして覺せずと云ふこと無し、明々了々として古に亘り今に通じ、當頭十方世界に明かに全身萬象の中に獨露するなり。

下根の坐禪は且らく結縁を貴んで、善惡の業道を離れ直に即心を以て諸佛の性源を顯はす、足佛地に結んで惡道に入らず、手に定印を結んで經卷を取らず、口を開いて縫ふが如く緘るが如くにして、一法を説かず眼を開いて大ならず小ならず、諸色を分つこと無し、耳、善惡の聲を聽かず、鼻、好惡の香を嗅がず、身、物に倚らず、動作頓に止み、意攀縁せず、憂喜共に盡く、形相如々にして

木佛の如し、縦ひ心種々の妄想顛倒を起すと雖も其の咎を作らず、譬へば明鏡の上に更に浮影を留めざるが如し、五戒八戒、菩薩の大戒比丘の具足、三千の威儀八萬の細行、諸佛菩薩の轉妙法輪皆此の坐禪の中より現前して盡くること無し、萬行の中、最勝の實行は唯坐禪の一門のみなり、僅かに坐して一步の功德を進むるときは、則ち百千無量の堂塔を造るに勝れり、何に況んや常に修して退くこと無からんをや、永く生死を解脱して自己の心佛を見ん、行住坐臥無作の妙用に非すと云ふこと無く、見聞覺知悉く是れ本有の靈光なり、初心後心を選ばず、有智無智を論ずること無し。

此の如く坐禪專精に修行して忘失す可からざるなり。

三根坐禪說終

備考

世間往々にして禪は上根の者のみに適する教なりと思ふは大なる誤解なり、『三根坐禪說』を拜讀すれば思ひ半に過ぎん。

面山和尚經行軌

佛言く我始め道場に坐して觀樹し亦經行すと、乃ち是れ坐禪は必らず經行を用ふるの由來なり、其の經行の法、藝祖之れを天童に面授してより其來千年、家訓陵夷して雲仍昧せり、故を以つて異途に走る者多し、豈傷まざらんや、今や事已を獲ず専ら祖意に本づき、旁ら古蹟を搜つて聊か此の軌を述べ以つて徒に示す、冀はくは家風の卒暴に流れざらんことを。

夫れ經行の法は應に揖手を兩袖の合裏に歛むべし、兩袖を左右の脚邊に垂ると莫れ、直に面前一尋許りの地を觀る、正運歩の時息を以つて限と爲し、一息半歩にして歩量趺に齊し、足を先にし身を後にすることを得され、應に身足同じく運ぶべし、左右に顧眄す可らず、上下に俯仰す可からず肩胸振はず鞋履響かすこと莫れ、猶ほ住立するが如く運歩せざるに相似たり、緩々として歩す、

閑靜なるを妙と爲す、名けて緩歩と曰ふ、其の意茲に在り、若し夫れ高足大步急走馳騁は則ち非法なり誠む可し、昔二十億童子經行して倦まず、脚血地に濺ぐ、佛言く童子設使精進經行して碎けて粉塵の如くなるも道を得ること能はず、況んや復皮を傷けんをや、實に慎み懼る可し。

又宜しく其の處を擇ぶことを知るべし、又宜しく處に量有ることを知るべし、又宜しく其の時有ることを知るべし、又宜しく其の旋遠と別有ることを知るべし、直去直來唯一路に遵ふ、布の經の如し、故に經行と名く、行いて界畔に至つて、日を逐うて身を廻らし還つて來處に向つて住立すること少時す、出曜に五徳を説き三千に五事を明す、知らずんばあるべからず、若し之に慣熟すれば則ち大に身を資け道を長ずるに利あり。

古に謂く、鷲山覺樹の下、鹿苑王城の内、及び餘の聖跡皆世尊經行の基有りと、又謂く菩提達磨嵩山の下に經行すと、佛祖の嘉轍慕はざるべけんや、華嚴

に説く、善財善見に見ゆ、見、林中に在つて經行往返す、智慧廣博にして猶ほ大海の如く、諸の境界に於て心所動無し、若しは沈、若しは擧、若しは智、非智動轉戲論一切皆息じ、佛所行の平等の境界を得、大悲一切衆生を教化して、心暫くも捨つること無く、一切衆生を利樂せんが爲に、如來の正眼を開示せんが爲に、如來所行の道を踐まんが爲に、遅からず速からず、審諦に經行す、善財に告げて言はく、我經行の時一念の中に一切十方皆悉く現前す、智慧清淨の故に一念の中に一切世界皆悉く現前す、不可説不可説の世界を經過するが故にと云、又言はく、善男子我唯此の菩薩の隨順燈解脫門を知ると、此に由つて之れを觀れば、藝祖の面授する所、其の儀聖説に膺合して毫も差はず此れ固に佛祖の正傳なり。

嗚呼澆季の人身、宿因に感ぜられて此の門に入ることを得たり、實に慶幸なる可し、但能く出息入息を保護し、前歩後歩を照顧して、有縁を逐はず空忍に住

すること無く、虚明自照にして、心力を勞せざるときんば、其の無邊安詳緩歩如來と稱するも亦豈遠からんや、若し之れに反せば未だ歩を擧せざる已前に、早く既に蹉過す、我が會の參學切に宜しく體悉すべし。

面山和尚經行軌終

備考

- 一、坐禪と經行とは相俟つて修すべきものなり、經行の事を説く本篇に過ぎたる無し、如來經行の遺跡予親く拜し來つて慕古の念切なるものあり。
- 二、經行は經文にては「キヤウギヤウ」と云ふ安樂行品の如し、坐禪の時には「キンヒン」と云ふ、吳音と宋音との相違なるべし、常に心掛くるを要す。

曹洞教會修證義

永平寺第六十三世眞晃斷際禪師撰
總持寺獨住第二世法雲普蓋禪師撰

第一章 總序

【第一節】生を明らめ死を明らむるは佛家一大事の因縁なり、生死の中に佛あれば生死なし、但生死即ち涅槃と心得て、生死として厭ふべきもなく、涅槃として欣ぶべきもなし、是時初めて生死を離るゝ分あり、唯一大事因縁と究盡すべし。

【第二節】人身得ること難し、佛法値ふこと希れなり、今我等宿善の助くるに依りて已に受け難き人身を受けたるのみに非ず遇ひ難き佛法に値ひ奉れり、生死の中なかの善生ぜんしやう、最勝さいしやうの生しやうなるべし、最勝さいしやうの善身ぜんしんを徒らにして露命ろめいを無常むじやうの風かぜに任すること勿れ。

【第三節】無常むじやう憑たのみ難し、知らず露命ろめいいかなる道の草くさにか落ちん、身已みすでに私わたくしに非ず、命いのちは光陰くわういんに移うつされて暫しばらくも停とどめ難し、紅顏こうがんいづくへか去さりにし、尋ねんとするに蹤跡しやうせきなし、熟觀じやくくわんする所に往事わうじの再び逢あふべからざる多し、無常むじやう忽たちまちに到いたるときは國王こくわう大臣だいじん親しん臨りん從じゆう僕ぼく妻子し珍寶ちんぼうたすくる無し、唯獨たひとり黃泉くわうせんに赴おもひのみなり、

己れに随ひ行くは只是善惡業等のみなり。

【第四節】今の世に因果を知らず業報を明らめず、三世を知らず、善惡を辨まへざる邪見の黨侶には群すべからず、大凡因果の道理歴然として私なし、造惡の者は墮ち、修善の者は陞る、毫釐も忒はざるなり、若し因果亡じて虚しからんが如きは、諸佛の出世あるべからず、祖師の西來あるべからず。

【第五節】善惡の報に三時あり一者順現報受、二者順次生受、三者順後次受、これを三時といふ、佛祖の道を修習するには、其最初より斯三時の業報の理を效ひ驗らむるなり、爾あらざれば多く錯りて邪見に墮つるなり、但邪見に墮つるのみに非ず、惡道に墮ちて長時の苦を受く。

【第六節】當に知るべし今生の我身二つ無し三つ無し徒らに邪見に墮ちて虚く惡業を感得せん惜からざらめや惡を造りながら惡に非ずと思ひ惡の報あるべからずと邪思惟するに依りて惡の報を感得せざるには非ず。

第二章 懺悔滅罪

【第一節】佛祖憐みの餘り廣大の慈門を開き置けり、是れ一切衆生を證入せしめんが爲めなり、人天誰か入らざらん、彼の三時の惡業報必ず感ずべしと雖も、懺悔するが如きは重きを轉じて輕受せしむ、又滅罪清淨ならしむるなり。

【第八節】然れば誠心を専らにして前佛に懺悔すべし、慙懣するるとき前佛懺悔の功德力を極ひて清淨ならしむ、此功德能く無礙の淨信精進を生長せしむるなり、淨信一現するるとき、自他同く轉ぜらるゝなり、其利益普ねく情非情に蒙ぶらしむ。

【第九節】其大旨は願くは我れ設ひ過去の惡業多く重なりて障道の因縁ありとも、佛道に因りて得道せりし諸佛諸祖我を愍みて業累を解脱せしめ、學道障り無からしめ、其功德法門普ねく無盡法界に充滿彌淪せらん哀みを我に分布すべし、佛祖の往昔は吾等なり、吾等が當來は佛祖ならん。

【第十節】我昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋癡、從身口意之所生、一切我今皆懺悔、是の如く懺悔すれば必ず佛祖の冥助あるなり、心念身儀發露白佛すべし、發露の力罪根をして銷殞せしむるなり。

第三章 受戒入位

【第十一節】次には深く佛法僧の三寶を敬ひ奉るべし、生を易へ身を易へても三寶を供養し敬ひ奉らんことを願ふべし、西天東土佛祖正傳する所は恭敬佛法僧なり。

【第十二節】若し薄福少徳の衆生は三寶の名字猶ほ聞き奉らざるなり、何に況や歸依し奉ることを得んや、徒らに所逼を怖れて山神鬼神等に歸依し或は外道の制多に歸依すること勿れ、彼は其歸依に因りて衆苦を解脱すること無し、早く佛法僧の三寶に歸依し奉りて衆苦を解脱するのみに非ず菩提を成就すべし。

【第十三節】其歸依三寶とは正に淨信を専らにして或は如來現在世にもあれ、或は

如來滅後にもあれ、合掌し低頭して口に唱へて云く南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧、佛は是れ大師なるが故に歸依す、法は良藥なるが故に歸依す、僧は勝友なるが故に歸依す、佛弟子となること必ず三歸に依る、何れの戒を受くるも必ず三歸を受けて其後諸戒を受くるなり、然れば即ち三歸に依りて得戒あるなり。

【第十四節】此歸依佛法僧の功德必ず感應道交するるとき成就するなり、設ひ天上人間地獄鬼畜なりと雖も感應道交すれば必ず歸依し奉るなり、已に歸依し奉るが如きは、生生世世在在處處に增長し必ず積功累徳し阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり、知るべし三歸の功德其れ最尊最上甚深不可思議なりといふこと世尊已に證明しましたす、衆生當に信受すべし。

【第十五節】次には應に三聚淨戒を受け奉るべし、第一攝律儀戒、第二攝善法戒、第三攝衆生戒なり、次には應に十重禁戒を受け奉るべし、第一不殺生戒、第二

不偷盜戒、第三不邪淫戒、第四不妄語戒、第五不酤酒戒、第六不說過戒、第七不自讚毀他戒、第八不慳法財戒、第九不瞋恚戒、第十不謗三寶戒なり、上來三歸、三聚淨戒、十重禁戒、是れ諸佛の受持したまふ所なり。

【第十六節】受戒するが如きは三世の諸佛の所證なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の佛果を證するなり、誰の智人か欣求せざらん、世尊明らかに一切衆生の爲に示しますます、衆生佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入る、位大覺に同うし已る、眞に是れ諸佛の子なりと。

【第十七節】諸佛の常に此中に住持たる、各々の方面に知覺を遺さず、群生の長へに此中に使用する、各々の知覺に方面露れず、是時十方法界の土地草木牆壁瓦礫皆佛事を作すを以て其起す所の風水の利益に預る輩、皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて親き悟を顯はす是を無爲の功德とす、是を無作の功德とす、是れ發菩提心なり。

第四章 發願利生

【第十八節】菩提心を發すといふは己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し營むなり、設ひ在家にもあれ、設ひ出家にもあれ、或は天上にもあれ、或は人間にもあれ、苦にありといふとも樂にありといふとも、早く自未得度先度他の心を發すべし。

【第十九節】其形陋しといふとも此心を發せば已に一切衆生の導師なり、設ひ七歳の女流なりとも即ち四衆の導師なり、衆生の慈父なり、男女を論ずること勿れ此れ佛道極妙の法則なり。

【第二十節】若し菩提心を發して後六趣四生に輪轉すと雖も其輪轉の因縁皆菩提の行願となるなり、然あれば從來の光陰は設ひ空く過すといふとも、今生の未だ過ぎざる際に急ぎて發願すべし、設ひ佛に成るべき功德熟して圓滿すべしといふとも、尙ほ廻らして衆生の成佛得道に回向するなり、或は無量劫行ひて

衆生を先に度して自からは終に佛に成らず、但し衆生を度し衆生を利益するもあり。

【第廿一節】衆生を利益すといふは四枚の般若あり、一者布施、二者愛語、三者利行、四者同事、是れ即ち薩埵の行願なり、其布施といふは貪らざるなり我物に非ざれども布施を障へざる道理あり、其物の輕きを嫌はず、其功の實なるべきなり、然れば即ち一句一偈の法をも布施すべし、此生佗生の善種となる、一錢一草の財をも布施すべし、此世佗世の善根を兆す、法も財なるべし、財も法なるべし、但彼が報謝を貪らず、自からが力を頌つなり、舟を置き橋を渡すも布施の檀度なり、治生産業固より布施に非ざること無し。

【第廿二節】愛語といふは衆生を見るに先づ慈愛の心を發し願愛の言語を施すなり、慈念衆生猶如赤子の懷ひを貯へて言語するは愛語なり、徳あるは讚むべし、徳なきは憐むべし、怨敵を降伏し君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり。

り、面ひて愛語を聞くは面を喜ばしめ心を樂しくす、面はずして愛語を聞くは肝に銘し魂に銘ず、愛語能く廻天の力あることを學すべきなり。

【第廿三節】利行といふは貴賤の衆生に於きて利益の善巧を廻らすなり、窮龜を見病雀を見しとき、彼が報謝を求めず、唯單へに利行に催ほさるゝなり、愚人謂はくは利佗を先とせば自からが利省れぬべしと、爾には非ざるなり、利行は一法なり、普ねく自佗を利するなり。

【第廿四節】同事といふは不違なり、自にも不違なり、佗にも不違なり、譬へば人間の如來は人間に同ぜるが如し、佗をして自に同ぜしめて後に自をして佗に同ぜしむる道理あるべし、自佗は時に隨うて無窮なり海の水を辭せざるは同事なり、是故に能く水聚りて海となるなり。

【第廿五節】大凡菩提心の行願には是の如くの道理靜かに思惟すべし卒爾にするこ
と勿れ、濟度攝受に一切衆生皆化を被ぶらん功德を禮拜恭敬すべし。

第五章 行持報恩

【第廿六節】此發菩提心多くは南閻浮の人身に發心すべきなり、今是の如くの因縁あり、願生此娑婆國土し來れり、見釋迦牟尼佛を喜ばざらんや、

【第廿七節】靜かに憶ふべし正法世に流布せざらん時は身命を正法の爲に抛捨せんことを願ふとも値ふべからず、正法に逢ふ今日の吾等を願ふべし、見ずや佛の言はく無上菩提を演説する師に値はんには、種姓を觀すること莫れ、容顏を見ること莫れ、非を嫌ふこと莫れ、行を考ふること莫れ、但般若を尊重するが故に、日日三時に禮拜し、恭敬して更に患惱の心を生ぜしむること莫れと。

【第廿八節】今の見佛聞法は佛祖面々の行持より來れる慈恩なり、佛祖若し單傳せずば奈何にしてか今日に至らん、一句の恩尙ほ報謝すべし、一法の恩尙ほ報謝すべし、況や正法眼藏無上大法の大恩これを報謝せざらんや、病雀尙ほ恩を忘れず三府の環能く報謝あり、窮龜尙ほ恩を忘れず餘不の印能く報謝あり、畜

類尙ほ恩を報ず、人類爭か恩を知らざらん。

【第廿九節】其報謝は餘外の法は中るべからず、唯當に日日の行持其報謝の正道なるべし、謂ゆるの道理は日日の生命を等閑にせず、私に費さざらんと行持するなり。

【第三十節】光陰は矢よりも迅かなり、身命は露よりも脆し、何れの善巧方便ありてか過ぎにし一日を復び還し得たる、徒らに百歳生けらんは恨むべき日月なり悲むべき形骸なり、設ひ百歳の日月は聲色の奴婢と馳走すとも、其中一日の行持を行取せば一生の百歳を行取するのみに非ず、百歳の佗生をも度取すべきなり、此一日の身命は尊ぶべき身命なり、貴ぶべき形骸なり、此行持あらん身命自からも愛すべし、自からも敬ふべし、我等が行持に依りて諸佛の行持見成し、諸佛の大道通達するなり、然あれば則ち一日の行持是れ諸佛の種子なり、諸佛の行持なり。

【第卅一節】謂ゆる諸佛とは釋迦牟尼佛なり、釋迦牟尼佛是れ即心是佛なり、過去
 現在未來の諸佛共に佛と成る時は必ず釋迦牟尼佛と成るなり、是れ即心是佛な
 り、即心是佛といふは誰といふぞと審細に參究すべし、正に佛恩を報ずるにて
 あらん。

曹洞教會修證義終

考 備

- 一、曹洞教會修證義は普通略して修證義と云ふ。
- 二、讀誦の際には全文を通讀するとあり、前三章と後二章と折半して讀むとあり、又一回に一章宛讀むとあり。
- 三、身命をシンメイと訓むことあり、シンミヤウと訓む者あり、形體をギヤウガイと云ひケイガイと云ふ、其他異説あり、必ずしも一定せず、

第九 日本諷詠部

日本諷詠部解題

吉祥山永平寺は以前傘松峰大佛寺と稱せり、之れに因みて道元禪師隨時感吟の和歌を集めたるを『傘松道詠集』一卷となす、兒孫たるもの此の祖風國風併せ拜戴せざるべからず。

「大智偈頌」は光嚴等編、大智祖繼禪師の偈頌を蒐めたるもの、二百二十九首中五絶一首あるのみにして、餘は悉く七絶なり。師は正應三年（紀元一九五〇）肥後に産れ、七歳にして同國大慈寺寒巖義尹禪師に就て出家、寒巖禪師寂後參師問法の途に上り、遂に加賀大乘寺に太祖瑩山禪師の下に辨道すること七年、正和三年二十五歳にして支那に渡られ、知識を歴參し靈場、堂塔のある地を徧歴せられ、英宗皇帝の歸仰を受け、在支十一年修行の後、正中二年歸朝、太祖の命に依つて明峰素哲禪師に嗣法、太祖より三代目、高祖より六代目の祖燈を繼承す、其後加賀吉野村の峰巒幽寂の地を愛し、師子山祇陀寺を開創、次で飄然故郷肥後に歸錫、聖護寺を構へ山居悠悠自適、後島原に水月庵を卓て、以て終焉の地と爲し、正平二十一年示寂、壽七十七、法臘六十九。師は文學に於て獨歩の技量あり、絶海の詩は五山第一と稱するも、宗乘拈出に至つては、禪師に及ばず。

傘松道詠

寛元三年九月二十五日初雪の一尺ばかり降ける時
長月の紅葉の上に雪ふりぬ見る人たれか言の葉のなき

寶治元年相州鎌倉にいまして最明寺道崇禪門の請によりて詠み給ひける歌十首
教外別傳

あら磯の波もえよせぬ高岩にかきもつくべきのりならばこそ
不立文字

いひ捨しその言の葉の外なれば筆にも跡をとらめざりけり
正法眼藏

波もひき風もつながぬ捨をぶね月こそ夜半のさかりなりけれ

傘松道詠

涅槃妙心

いつもたゞ我ふる里の花なれば色もかはらず過し春かな

本來面目

春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえて冷しかりけり

即心即佛

かもめともをしてもいまだみえわかず立る波間にうき沈むかな

應無所住而生其心

水鳥のゆくもかへるも跡たえてされども道はわすれざりけり

父母所生身即證大覺位

尋ね入るみやまの奥のさとどもと我住馴し都なりける

盡十方界眞實人體

世の中にまことの人やなかるらむかぎりも見えぬ大空の色

靈雲見桃花

春風にほころびにけり桃の花枝葉にのころうたがひもなし

鏡清雨滴聲

聞まゝにまた心なき身にしあればおのれなりけり軒の玉水
聲づから耳にきこゆる時しれば我が友ならんかたらひぞなき

牛過窓櫺

世の中はまどより出る牛の尾の引かぬにとまる心ばかりそ

夢中説夢

本末もみな偽のつくも髪おもひ亂るゝ夢をこそとけ

十二時中不虛過

過來つる四十あまりは大空のうさぎからすの道にぞありける
誰とても日影の駒は嫌はぬを法の道うる人ぞすくなき

傘松道跡

人しれずめでし心は世の中のたゞ山かつのあきのゆふぐれ

坐禪

守るとも思はずながら小山田のいたづらならぬかゞしなりけり

頂に鵲の巢やつくるらん眉にかゝれるさゝがにの絲

濁りなき心の水にすむ月は波もくだけて光とぞなる

この心天津空にも花そなふ三世の佛に奉らばや

禮拜

冬草も見えぬ雪野のしらさぎはあのが姿に身をかくしけり

佛敎

あなたふと七の佛の古言を學ぶに六の道を越えけり

嬉しくも釋迦の御法にあふひ草かけても外の道を踏まめや

詠法華經

夜もすがら終日になす法の道みなこの經の聲とこゝろと

溪の響嶺に鳴く猿たえくゝにたゞこの經をとくとこそきけ

此經の心を得れば世の中のうりかふ聲も法を説くなり

峰の色溪の響もみなながら我釋迦牟尼の聲と姿と

四つの馬三つの車にのらぬ人まことの道をいかでしらまし

草菴雜詠

とゞまらぬ日影の駒の行すゑにのりの道うる人ぞすくなき

さなへとる夏のはじめの祈には廣瀬龍田の祭をぞする

草の庵に立ちても居ても祈ること我より先に人をわたさむ

おろかなる心ひとつの行末を六の道とや人のふむらん

草の庵にねてもさめてもまをすこと南無釋迦牟尼佛憐みたまへ

山深み峰にも尾にも聲たてしけふもくれぬと日ぐらしのなく

傘松道詠

我庵は越のしらやま冬ごもり凍も雪も雲かゝりけり
 都にも紅葉しぬらんおく山は夕も今朝もあられ降りけり
 夏冬のさかひもわかぬ越の山降るしら雪もなる雷も
 梓弓春の嵐に咲ぬらん峰にも尾にも花匂ひけり
 あし引の山鳥の尾の長さ夜のやみちへだてゝくらしけるかな
 頼みこし昔あるじやゆふだすきあはれをかけよ麻の袖にも
 梓弓はるくれはつるけふの日を引とゞめつゝをしみもやらむ
 徒に過す月日はおほけれど道をもとむる時ぞすくなき
 草の庵夏のはじめのころもがへすゝきすだれのかゝるばかりぞ
 心とて人に見すべき色をなきたゞ露霜のむすぶのみにて
 いかなるか佛といひて人とはゞかひ屋がもとにつらゝいにけり
 こゝろなき草木も秋は凋むなり目に見たる人愁ひざらめや

をやみなく雪はふりけり谷の戸に春來にけりと鶯のなく
 六の道遠近まよふともがらは我父ぞかし我母ぞかし
 賤の男の垣ねに春の立しより古野に生ふる若菜をぞつむ
 大空に心の月をながむるもやみにまよひて色にめでけり
 春風に我ことの葉のちりけるを花の歌とや人のみるらん
 愚なる我は佛にならずとも衆生を渡す僧の身ならん
 山のはのほのめくよひの月影に光もうすくとふほたるかな
 花紅葉冬の白雪見しこともおもへば悔し色にめでけり
 越前路より都にもむさし時木芽山といふ所にて
 草の葉に首途せる身の木の目山雲に路ある心地こそすれ

無常

朝日待つ草葉の露のほどなきにいそぎなたちそ野邊の秋風

傘松道詠

世の中は何にたとへん水鳥のはしふる露にやどる月影

建長五年中秋

また見んとおもひし時の秋だにも今宵の月にねられやはする

傘松道詠終

考 備

- 一、傘松道詠は義雲禪師所持の行巻（アンケンと訓む由）より法孫の傳寫せるものを面山和尚が考證して延享三年に刊行したるものなりと云ふ。
- 二、古來之が解釋には相當に苦心したるものと見え、面山和尚の「字考」、「聞解」覺巖和尚の「畧解」等ある由なれども、廣く世に行はれず、笠間龍跳和尚の「傘松道詠集」二卷は相當の研究を重ねたるものにて稍知られたり。
- 三、面山和尚の附記に「濟洞道歌」なる一冊世に出て中に「道元和尙伊呂波歌」なるものあり、蓋し贋詠なり云々と記しあり、其頃、斯様の書物も出てたるならん、編者も亦、此に似たる一卷を藏せり、但し今日にては本集を以て正しとなす。
- 四、「略解」に左の數首附録しあり今も掲ぐることにす。
山居二首 立よりてかけもうつさし溪川の流れて世にし出でんと思へば○山すみの友とはならし峯の月彼も浮世をめぐる身なれば
雜詠 草菴にねてもさめてもおもふこと 南無釋迦牟尼佛かへりみたまへ○草菴にねてもさめても申すこと南無釋迦牟尼佛かへりみたまへ。

大智禪師偈頌

一 佛誕生

閻浮八萬四千城 不動干戈致太平
活捉瞿曇白拈賊 雲門一棒不虛行

二 佛成道

歷劫操持成法身 體如明鏡淨無塵
老僧用箇翳睛術 教爾面南看北辰

三 同

果滿三祇道始成 放光動地度群生
一聲鷄唱五更月 枕上誰人夢未醒

四 同

大智禪師偈頌

(一) 閻浮八萬四千城 干戈を動ぜず太平を致す
瞿曇の白拈賊を活捉して、雲門の一棒虚りに行ぜず。

(二) 歷劫操持して法身を成ず、體は明鏡の如くにして淨うして塵無し、老僧箇の翳睛の術を用ゐて爾をして南に面つて北辰を看せしむ。

(三) 果三祇に満ちて道始めて成ず、放光動地群生を度す、一聲鷄唱ふ五更の月、枕上誰人か夢未だ醒めざらん。

(四) 蘆葦年々膝下に青し、死中未だ活せず可憐

蘆葦年々膝下青 死中未活可憐生
星移斗轉處開眼 不做空山鬼叫聲

五 佛涅槃

柳暗花明二月春 雙林示寂趣泥洹
兜羅綿布不能蓋 露出紫磨金色身

六 出山相

耿耿青天夜々星 瞿曇一見長無明
下山路是上山路 欲度衆生無衆生

七 達磨

南天太子氣如王 傳佛心宗教此方
凜々真儀猶可觀 爐燒柏子起烟香

八 魚籃

翠黛畫眉纖月淡 春風滿面小桃紅
見人放下籃兒去 三十六鱗皆化龍

九 雁山諾曠羅尊者

擲筆峰高對展旗 分明薦取目前機
不知打濕袈裟角 終日貪觀瀑布飛

一〇 布袋和尚

閻浮樹下日當午 兜史宮中天未明
十字街頭休瞎睡 元來大地沒衆生

一一 栽松道者

寸苗拈向鑿邊栽 祖意親參活句來
雲鎖雙峰千仞勢 莫云借宿女兒胎

一二 不落不昧話

大智禪師偈頌

生、星移斗轉するところ眼を開けば、空山鬼叫の聲を做さず。

(五) 柳暗く花明かなり二月の春、雙林に寂を示して泥洹に趣く、兜羅綿布蓋ふこと能はず、露出す紫磨金色の身。

(六) 耿耿たる青天夜々の星、瞿曇一見して無明を長ず、下山の路は是れ上山の路、衆生を度せんと欲するに衆生無し。

(七) 南天の太子氣王の如し、佛心宗を傳へて此方を救ふ、凜々たる真儀猶ほ観つべし、爐に柏子を焼いて起烟香し。

(八) 翠黛畫眉纖月淡し、春風滿面少桃紅なり、

人を見て籃兒を放下し去らば、三十六鱗皆な龍と化す。

(九) 擲筆峰高うして展旗に對す、分明に薦取す目前の機、知らず袈裟角を打濕することを、終日瀑布の飛ぶを貪り觀る。

(一〇) 閻浮樹下日午に當る、兜史宮中天未だ明けず、十字街頭に瞎睡することを休めよ、元來大地に衆生沒し。

(一一) 寸苗拈じて鑿邊に向つて栽ゆ、祖意親しく活句に參じ來る、雲は鎖す雙峯千仞の勢、云ふこと莫れ、宿を女兒の胎に借ると。

(一二) 迦葉佛の時先百丈、分明なり今日野狐精

迦葉佛時先百丈 分明今日野狐精
諸方若是覆盆下 此話更參五百生

諸方若し是れ覆盆下ならば、此話更に參ぜよ五百生。

一三 百丈野狐話

錯時直須徹底錯 親時更要徹底親
不落不昧論來久 何曾夢見野狐身

(一三) 錯の時は直に須く徹底錯なるべし、親き時は更に徹底親しからんことを要す、不落不昧論じ來ること久し、何ぞ曾て夢にだも野狐身を見ん。

一四 應真不借

念々交加見變通 相隨來也各西東
六根竟日對前境 錦上鋪花知幾重

(一四) 念々交加して變通を見る、相隨來也各西東、六根竟日前境に對す、錦上に花を鋪く知んぬ幾重ぞ。

一五 卽心卽佛

一棒一痕知痛痒 卽心卽佛沒商量
塵埋三尺吹毛劍 夜々神光射斗傍

(一五) 一棒一痕痛痒を知る、卽心卽佛沒商量、塵は埋む三尺吹毛の劍、夜々の神光斗傍を射る。

一六 非心非佛

(一六) 非心非佛話頭翻す、四海の禪流眼を著く

非心非佛話頭翻 四海禪流著眼難
跳得簸箕唇外出 何妨赤脚走刀山

ること難し、簸箕唇外に跳得し出せば、何んぞ妨げん赤脚にして刀山を走ること。

一七 拈華話

世尊拈出一枝花 迦葉無端眼着沙
四七二三傳寐語 青天白日悞人多

(一七) 世尊拈出す一枝花、迦葉無端なく眼に沙を著く、四七二三寐語を傳ふ、青天白日人を悞ること多し。

一八 聖諦不爲

聖諦不爲階級無 龍離潭水鳳蒼梧
見聞一々隨他去 日用都如井觀驢

(一八) 聖諦不爲階級無し、龍は潭水を離れ鳳は蒼梧、見聞一々他に隨ひ去る、日用は都て井の驢を観るが如し。

一九 無情說法話

無情說法有情聽 風攪寒林葉滿庭
墻壁無人却有耳 燈籠露柱且低聲

(一九) 無情の說法有情聽く、風寒林を攪いて葉庭に落つ、墻壁人無きも却つて耳あり、燈籠露柱且く低聲。

二〇 同

(二〇) 人は欄干に倚り月は天に在り、月山に轉

人倚欄干月在天 月轉山來上牀眠

夜深枕子撲落地 無端打破常住博

二一 趙洲狗子話

趙州狗子佛性無 也勝猫兒十萬倍

不信試去園裏看 冬瓜何似葡萄大

二二 雲岩弄師子話

弄出金毛師子兒 從空放下露全威

置時師子在何處 匝地清風只自知

二三 玄路

空王那畔絕知音 消息分明無處尋

黃閣簾垂人不侍 紫羅帳外月沈々

二四 鳥道

翻身要到劫空前 步々須行鳥道玄

眼見耳聞無滲漏 不妨聲色裏安眠

二五 展手

驗人眼正在機前 教外須知有別傳

不涉廉纖進一步 長安大道直如弦

二六 不依倚一物

全身獨立劫空前 朕迹猶存一色邊

萬丈寒潭光射透 月明驚起毒龍眠

二七 即心即佛

現成公案沒商量 藥苦冰寒不覆藏

保護即心心即佛 眉間日夜放毫光

二八 奪人不奪境

大智禪師偈頌

五二二
じ來らば牀に上つて眠る、夜深けて枕子地に撲落す、端無く打破す常住の博。

(二二) 趙州狗子の佛性、也た猫兒十萬倍に勝れり、信ぜずんば、試に園裏に去つて看よ、冬瓜は葡萄の大なるに何似ぞ。

(二三) 金毛の師子兒を弄出して、空より放下して全威を露す、置く時師子何れの處にか在る、匝地の清風只自知す。

(二四) 空王那畔知音を絶す、消息分明にして尋ぬるに處無し、黃閣簾垂れて人侍らず、紫羅帳外月沈々。

(二五) 翻身して劫空に到らんと要せば、步々須く鳥道玄に行くべし、眼見耳聞滲漏無し、妨げず聲色裏に安眠することを。

(二六) 人を驗するの眼正うして機前に在り、教外須く知るべし別傳有ることを、廉纖に涉らず一步を進めよ、長安の大道直きこと弦の如し。

(二七) 全身獨立す劫空前、朕迹猶存す一色邊萬丈の寒潭光り射透す、月明に驚起す毒龍の眠。

(二八) 現成公案沒商量。藥苦冰寒不覆藏せず、保護即心即佛を保護して、眉間日夜毫光を放つ。

(二九) 玉簫聲斷ゆ月明の中、古殿深沈として侍

玉簫聲斷月明中 古殿深沈侍立空
門外春光閑不得 青旗吹動柳絲風

二九 透法身句

如何是透法身句 北斗藏身還見麼
六々不成三十六 可憐種粟却成麻

三〇 隨所自在

忘却瀉山某甲名 驢胎一出馬胎生
誰知異類中行路 鷺下寒汀立月明

三一 金書華嚴

九々元來八十一 南詢不涉路岩嶢
一毫頭上知端的 萬兩黃金也合消

三二 讀法華

立空し、門外の春光閑なることを得ず、青旗吹き
動す柳絲の風。

(二九) 如何なるかは透法身の句、北斗藏身還
つて見るや、六々三十六と成らず、憐むべし粟を
種ゑて却つて麻と成すことを。

(三〇) 瀉山某甲の名を忘却して、驢胎一たび出
でて馬胎に生ず、誰れか知る異類中行の路、鷺寒
汀に下つて月明に立つ。

(三一) 九々元來八十一、南詢路岩嶢たるに涉
らず、一毫頭上に端的を知らば、萬兩の黄金も也
消すべし。

(三二) 微塵を破つて大經卷を出す、七軸の琅函

破微塵出大經卷 七軸琅函豈足收

真箇靈山無說說 鴉鳴鵲噪幾時休

三三 覽永平和尙之坐禪箴

坐佛何如殺佛機 乃翁毒手許誰知
真鎮不博真金貴 磨瓦竟無成鏡時

三四 看真歇和尚語

玉兔推輪半夜天 金鷄報曉五更前
千年古曲無人調 誰把鸞膠續斷絃

三五 跋真歇和尚拈古

真空歇盡透玄微 獨弄單提向上機
三祖膏肓必死疾 從頭一々下針錐

三六 覽投子語

大智禪師偈頌

豈收むるに足らんや、真箇靈山無說の語、鴉鳴鵲
噪幾時か休せん。

(三三) 坐佛は何ぞ殺佛の機に如かん、乃翁の毒
手誰か知ることを許さん、真鎮は眞金の貴に博
へず、瓦を磨して竟に鏡と成す時無し。

(三四) 玉兔輪を推す半夜の天、金鷄曉を報ず
五更の前、千年の古曲人の調ぶる無し、誰か鸞膠
を把つて断絃を續がん。

(三五) 真空歇盡して玄微を透る、獨弄單提す向
上の機、三祖膏肓必死の疾、頭より一々針錐を下
す。

(三六) 寂住峰頭祖宗を唱ふ、威音劫外に家風を

寂住峯頭唱祖宗 威音劫外展家風
當年父子不相見 血脈從何得貫通

展ぶ、當年父子相見せずんば、血脈何れよりか貫通することを得ん。

三七 賀永平正法眼藏到來

(三七) 正法眼藏涅槃心、二三四七密に單傳す、

正法眼藏涅槃心 二三四七密單傳
吉峰路入鳳山塢 又見異苗長淡烟

吉峯の路は鳳山の塢に入る、又見る異苗の淡烟を長することを得。

三八 宿龍翔真歇堂

(三八) 鳳龍巢に宿す二百年、空江冷かに浸す

鳳宿龍巢二百年 空江冷浸月明天
白頭子就黑頭父 一曲新豐續斷絃

月明の天、白頭の子黒頭の父に就く、一曲の新豊斷絃を續ぐ。

三九 謝太元天子詔許還本國

(三九) 萬里の北朝玉詔を宣ぶ、三山東海に歸船

萬里北朝宣玉詔 三山東海送歸船
皇恩至厚將何報 一炷心香祝萬年

を送る、皇恩至厚何を將つてか報いん、一炷の心香萬年を祝す。

四〇 游天冠山華嚴境

(四〇) 天冠山聳ゆ青螺髻、朶々の千峯翠嵐を疊

天冠山聳青螺髻 朶々千峯疊翠嵐
若見毘盧真境界 善財不走百城南

む、若し毘盧眞の境界を見れば、善財百城の南に走らず。

四一 破船時呈高麗王

(四一) 曠劫飄流生死海、今朝更に業風に吹か

曠劫飄流生死海 今朝更被業風吹
無端失却歸家路 空望扶桑日出時

る、端なく失却す歸家の路、空しく扶桑を望む日出る時。

四二 呈雙谿大師

(四二) 咫尺却つて千里の隔となる、再來相見期

咫尺却成千里隔 再來相見恐無期
可憐一隻籠中鶴 不放天涯自在飛

無きを恐る、憐むべし一隻籠中の鶴、天涯に放つて自在に飛ばしめざることを得。

四三 高麗游白蓮社

(四三) 千峰頂上の白蓮社、十里の松門入つて

千峯頂上白蓮社 十里松門入更深
僧舍不留塵世客 一輪明月照禪心

更に深し、僧舎には留めず塵世の客、一輪の明月禪心を照す。

四四 松吟菴

(四四) 蒼龍吼え破る屋頭の山、透關と未透關と

蒼龍吼破屋頭山 不問透關未透關
側耳清風開眼月 幾人來倚曲欄干

四五 爆泉

滔々流出亂雲堆 一脈分成兩派來
擬問根源何處起 怒雷吼破萬尋崖

四六 大徹堂

重々金鎖是疑情 截斷何妨掉臂行
纔入門時先見額 是誰眼裏著無明

四七 眺望院

西風吹雨弄新晴 雲拭青銅宇宙清
回首九重天外立 眼高常與月爭明

四八 等接軒

大坐當軒正令行 接人手段出常情
不論伶俐不伶俐 來者等看山色青

四九 臺島

蘆雪混邊水合空 蓬瀛何必玉壺中
一條古路人間外 不斷風回岸下松

五〇 鷺尾看花

靈鷲山頭花一枝 丰標彈壓衆芳奇
瞿曇任手輕拈出 無限香風狼藉吹

五一 笠津遠望

蓬窓冷對一江秋 智境融時見處周
岸上青山雖不動 波心明月去隨流

五二 同

大智禪師偈頌

を問はず、耳を側れば清風眼を開けば月、幾人か來つて曲欄干に倚る。

(四五) 滔々として流出す亂雲堆、一脈分れて兩派となり來る、根源何れの處より起ると問はんと擬すれば、怒雷吼え破る萬尋崖。

(四六) 重々の金鎖これ疑情、截斷すれば何んぞ妨げん臂を掉つて行くことを、纔に門に入るとき先づ額を見よ、是れ誰が眼裏無明を著く。

(四七) 西風雨を吹いて新晴を弄す、雲青銅を拭うて宇宙清し、首を九重天外に回して立たば、眼高うして常に月と明を争ふ。

(四八) 大坐當軒正令行す、人を接する手段常情

を出づ、伶俐不伶俐を論ぜず、來る者は等しく山色の青きを見ん。

(四九) 蘆雪混する邊水空に合す、蓬瀛何ぞ必ずしも玉壺の中のみならん、一條の古路人間の外、不斷の風は岸下の松を回る。

(五〇) 靈鷲山頭の花一枝、丰標衆芳を蟬壓して奇なり、瞿曇手に任せて輕々しく拈出す、無限の香風狼藉に吹く。

(五一) 蓬窓冷かに對す一江の秋、智境融する時見處周ねし、岸上の青山動ぜずと雖も、波心の明月去つて流れに隨ふ。

(五二) 性海風無うして寶鑑明かなり、猿啼いて

性海無風寶鑑明 猿啼未足第三聲
寒濤打碎蒼崖月 萬仞峯頭無路行

五三 雪後上比良山

萬頃煙波萬頃寒 回頭四遠望湖山
銀盃盛雪三千丈 突出瑠璃盆上看

五四 水月菴 二首

聞思修入三摩地 五五圓通一念觀
永夜清風翻白月 松聲長似雨聲寒

五五 同

毘盧海上起波瀾 江月松風永夜寒
箇々面前觀自在 人々一座補陀山

五六 蘆月菴 二首

未だ第三聲に足らず、寒濤打碎す蒼崖の月、萬仞峯頭路行無し。
(五三) 萬頃の煙波萬頃寒し、頭を四邊に回して湖山を望めば、銀盃に雪を盛る三千丈、瑠璃盆上に突出して看せしむ。
(五四) 聞思修より三摩地に入る、五々の圓通一念に觀ず、永夜の清風白月を翻へす、松聲長へに雨聲の寒きに似たり。
(五五) 毘盧海上に波瀾を起す、江月松風永夜寒し、箇々面前觀自在、人々一座の補陀山。
(五六) 長年獨坐す寒岩の草、一色巧中歩を轉ず

長年獨坐寒岩草 一色功中轉步難
昨夜長鯨吸海盡 珊瑚枝上月團々

五七 同

洞上宗風最尊貴 何勞默々守功勳
麒麟掣斷黃金鎖 獨步丹霄五色雲

五八 富士山

巍然獨露白雲間 雪氣誰人不覺寒
八面都無向背處 從空突出與人看

五九 賀覺菴和尚淨土寺

建方丈
荷負如來大法材 宗門有力整傾頹
空中怪聽鳴金錫 莫是胡僧請法來

ること難し、昨夜長鯨海を吸ひ盡す、珊瑚枝上月團々。
(五七) 洞上の宗風最も尊貴、何ぞ勞せん默々として功勳を守ること、麒麟掣斷す黄金の鎖、獨歩す、丹霄五色の雲。
(五八) 巍然として獨露す白雲の間、雪氣誰人か寒を覺えざらん、八面都て向背の處無し、空より突出して人に與へて看せしむ。
(五九) 如來の大法材を荷負して、宗門の傾頹を整ふるに力あり、空中怪み聽く金錫を鳴すことを是れ胡僧の法を請し來ること莫しや。

六〇 笠津和韻

雨笠烟簑客情幽 江湖幾度去還留
竿頭截盡重栽竹 欲釣鯨龍下一鉤

六一 無漏接待

聖凡一等待 飽飯鼻胸々
一片月生海 幾家人上樓

六二 宿南谷菴有感

薄霧輕霞罩御樓 宸闈秘殿冷如秋
珊瑚池上照明月 八十翁々輓綉毬

六三 同

靈山付屬正法眼 祖々相承奮正傳
衆角雖多一麟足 青原門下得希遷

(六〇) 雨笠烟簑客情幽なり、江湖幾度か去つて還留まる、竿頭截り盡し重ねて竹を栽う、鯨龍を釣らんと欲して一鉤を下す。

(六一) 聖凡一等に接す、飯に飽いて鼻胸々、一片の月海に生ずれば、幾家の人が樓に上る。

(六二) 薄霧輕霞御樓を罩む、宸闈秘殿冷かにして秋の如し、珊瑚池上明月照す、八十の翁々綉毬を輓ず。

(六三) 靈山付屬す正法眼、祖々相承して正傳を奮ふ、衆角多しと雖も一麟足れり、青原門下希遷を得たり。

六四 同

洞上家風續正傳 金針暗把線芒穿
從此陽廣山前草 滿地靈苗暖如烟

六五 辭源長老

月冷蒼梧鳳不栖 夜深金殿侍臣歸
可憐陽廣山前草 不見異苗繁茂時

六六 上瑩山和尚

蓮華臺上舍那身 天上人間稱獨尊
七佛以前通血脈 釋迦彌勒是兒孫

六七 同

六代傳衣到野僧 千年繼踵嶺南能
確春日久工夫熟 祖室堪挑無盡燈

(六四) 洞上の家風正傳を續ぐ、金針暗に線芒を把つて穿つ、此より陽廣山前の草、滿地靈苗暖なること烟の如し。

(六五) 月冷かにして蒼梧鳳栖まず、夜深うして金殿侍臣歸る、憐むべし陽廣山前の草、異苗繁茂の時を見ざることを。

(六六) 蓮華臺上舍那の身、天上人間獨尊と稱す七佛以前に血脈を通ず、釋迦彌勒是れ兒孫。

(六七) 六代の傳衣野僧に到る、千年踵を繼ぐ嶺南の能、確春日久うして工夫熟す、祖室挑ぐるに堪へたり無盡燈。

六八 同

建化門中表嗣承 天南地北覓冤憎
誰知父子相逢處 古鏡臺前不借燈

六九 寄廣首座

烟霞影裏去藏身 不踏人間紫陌塵
把一莖茅蓋頭住 爲誰分與半間雲

七〇 喜僧自大元至

中原探盡西來意 萬里橫航一葦回
喜見七郎峰下寺 寒巖枯木又花開

七一 寄等持古先和尚

百衲禪僧二十餘 三條椽下作工夫
滿城花柳春風外 淡墨愛看山水圖

(六八) 建化門中嗣承を表す、天南地北冤憎を覓む、誰か知る父子相逢ふ處、古鏡臺前に燈を借らざることを。

(六九) 烟霞影裏去つて身を藏す、人間紫陌の塵を踏まず、一莖茅を把つて頭を蓋うて住す、誰が爲にか分與せん半間の雲。

(七〇) 中原探り盡す西來意、萬里横に航りして一葦回る、喜び見る七郎峰下の寺、寒巖の枯木又花の開くことを。

(七一) 百衲の禪僧二十餘、三條椽下工夫を作す滿城の花柳春風の外、淡墨愛し看る山水の圖。

七二 同

昔日未了舊公案 今日全提一笑中
八月暑雲飛不散 木犀樹下立秋風

七三 同

參得中峰本分禪 驗人眼正別無傳
等渠死却偷心了 絕後甦來揮一拳

七四 上源元帥

驀拶相逢喚便應 靈山付屬未嘗輕
孫枝々上生枝葉 億萬斯年蔭祖庭

七五 寄道人

志慕竺乾林下坐 人間百事已忘懷
山中有箇安禪石 來折松枝拂綠苔

(七二) 昔日未了の舊公案、今日全提す一笑の中八月暑雲飛んで散ぜず、木犀樹下秋風を立す。

(七三) 中峰本分の禪に參得して、人を驗するの眼正うして別に傳ふること無し、渠が偷心を死却し了らんを等つて、絶後に甦り來らば一拳を揮はん。

(七四) 驀拶相逢ふ喚べば便ち應ず、靈山の附屬未だ嘗て輕からず、孫枝々上枝葉を生ず、億萬斯年祖庭を蔭ふ。

(七五) 竺乾林下の坐を志慕して、人間の百事已に懷に忘す、山中箇の安禪の石あり、來らば松枝を折つて綠苔を拂はん。

七六 會道友

一室惜烟燒濕薪 相逢無主亦無賓
大慈橋畔分携後 莫謂已經三祀春

七七 寄弘宗菴主

雪頂厖眉年已邁 宗門無力整衰頽
山々松柏都栽遍 借宿周家急再來

七八 上東明和尚

洞家春色興將闌 一經苔封到者難
只有杜鵑枝上語 夜深獨自哭空山

七九 寄人 二首

口似醉人心似月 回途垂手入鄺時
無明山上大法炬 煩惱海中船筏師

八〇 同

孤峰頂上不曾住 古渡頭邊拽水泥
一極悲心徹三世 甘堪苦海作船師

八一 祖庭

西來的々意如何 少室山高積雪多
斷臂師僧歸去後 一方明月落誰家

八二 月堂

玉輪碾破九重天 萬里秋光在目前
誰坐廣寒宮殿裏 夜深捲上水晶簾

八三 太虛

曠大劫來空索々 了無相貌與人窺
四維上下不容髮 日炙風吹十二時

(七六) 一室煙を惜んで濕薪を燒く、相逢うて主
無く又賓も無し、大慈橋畔分携の後、謂ふこと莫
れ已に三祀の春を経ると。

(七七) 雪頂厖眉年已に邁ぐ、宗門、衰頽を整ふ
るに力無し、山々松柏都て栽ゑて遍ねし、宿を周
家に借つて急に再來せよ。

(七八) 洞家の春色興將に闌ならんとす、一經
苔封じて到る者難し、只杜鵑枝上の語のみ有つて
夜深けて獨り自ら空山に哭す。

(七九) 口は醉人に似心は月に似たり、回途手を
垂れて鄺に入るの時、無明山上の大法炬、煩惱
海中の船筏師。

(八〇) 孤峰頂上曾て住せず、古渡頭邊水泥を拽
く、一極の悲心三世に徹す、甘つて苦海に船師と
作るに堪へたり。

(八一) 西來的々意如何、少室高うして積雪多し
斷臂の師僧歸り去つて後、一方の明月誰が家にか
落つ。

(八二) 玉輪碾り破る九重の天、萬里の秋光目前
に在り、誰か廣寒宮殿裏に坐し、夜深けて捲き上
す水晶簾。

(八三) 曠大劫來空索々、了に相貌の人に與へて
窺はしむるなし、四維上下髮を容れず、日炙風
吹く十二時。

八四 玉 磧

一脈琅々混底清 要知冷煖便瓊生
及乎如水洗頑石 方見崑山天外青

八五 月 江

靈光燦破塵沙海 無欠無餘只一輪
萬里無雲天似洗 汨羅難著獨醒人

八六 曲 江

水天秋合月彎々 兩岸青山一帶烟
招手不來便趨去 神珠暗把蟻絲穿

八七 月 堂

十二欄干秋一樣 光非照境境非存
及乎光境俱忘處 玉兔挨開碧落門

(八四) 一脈浪々として底に混じて清し、冷煖を知らんと要せば、便瓊生ず、水の頑石を洗ふが如くなるに及んで、方に見る崑山天外に青きことを

(八五) 靈光燦破す塵沙海、無欠無餘只一輪、萬里雲無くして天洗ふに似たり、汨羅著け難し獨醒の人。

(八六) 水天秋合して月彎々、兩岸の西山一帶の烟、手を招けども來らず、便ち趨り去る、神珠暗に蟻絲を把つて穿つ。

(八七) 十二欄干秋一樣、光境を照すに非ず境存するに非ず、光境俱に忘する處に及んで、玉兔挨開す碧落の門。

八八 心 月

三星圍遶一輪秋 萬里天開爽氣浮
禿髮寒山題不上 石屏駐筆攢眉頭

八九 雲 山

一抹橫遮萬仞峯 潛奇掩勝幾重重
直饒行到無心地 未出青青暗暗中

九〇 果 山

不落不昧平處嶮 不昧不落嶮中平
大雄峯下一條路 誰輓野狐群隊行

九一 竹 庵

琅玕遶屋響無時 六戶垂陰翠打圍
莖曲莖斜依位住 各教風雨說家私

(八八) 三星圍遶す一輪の秋、萬里天開けて爽氣浮ぶ、禿髮の寒山も題し上せず、石屏に筆を駐めて眉頭を攢む。

(八九) 一抹横に遮る萬仞峯、奇を潜め勝を掩ふ幾重々ぞ、直饒行いて無心の地に到るも、未だ青々暗々の中を出でず。

(九〇) 不落不昧平處嶮なり、不昧不落嶮中平かなり、大雄峯下一條の路、誰か野狐群隊に輓じて行かん。

(九一) 琅玕屋を遶つて響時無し、六戸陰を垂れて翠打圍、莖曲莖斜位に依つて住す、各風雨を説かして家私を説かしむ。

九二 桂 岩

二株垂蔭斷崖前 無限香風滿九天
山谷不攀巖嶮路 娘生鼻孔被他穿

九三 心 田

叉手當胸只這箇 祖翁片地未荒蕪
二三四七傳來久 不許別人舉契書

九四 桂 堂

金粟如來向上關 秋風影裏絕遮欄
從來吾莫隱于汝 夜々清光入牖寒

九五 坦 翁

家風不肖立孤危 平地深藏陷虎機
八十五年身是我 懶將黃葉止兒啼

九六 南 叟

奪得黃梅夜半衣 傳來佛法沒些兒
是他慶快平生處 只有東村王老知

九七 同 庵

蓋覆虛空架起成 從來共住不知名
伊予全沒些巴鼻 春至階前見草青

九八 石 室

門庭苔滑沒蹤由 入得還他第二籌
鐫做佛時先著眼 六窓有箇睡彌猴

九九 古 燈

昔日靈山正法眼 聯芳續焰至今傳
龍潭吹滅不曾滅 無限靈光輝大千

(九二) 二株蔭を垂る斷崖の前、無限の香風九天に満つ、山谷は攀ぢず巖嶮の路、娘生の鼻孔他に穿たる。

(九三) 叉手當胸只這箇、祖翁の片地未だ荒蕪せず、二三四七傳へ來ること久し、許さず別人の契書を擧ぐることを。

(九四) 金粟の如來向上の關、秋風影裏遮欄を絶す、從來吾れ汝に隱すこと莫し、夜々の清光牖に入つて寒し。

(九五) 家風肖て孤危を立せず、平地深く藏す陷虎の機、八十五年身は是れ我、黃葉を以つて兒啼を止むるに懶うし。

(九六) 黃梅夜半の衣を奪ひ得て、傳來の佛法些兒沒し、是れ他平生を慶快するところ、只東村の王老のみ有つて知る。

(九七) 虛空を蓋覆して架起して成る、從來共に住して名を知らず、伊れ予れ全く些の巴鼻沒し、春階前に至つて艸の青きを見る。

(九八) 門庭苔滑かにして蹤由を沒す、入得は他の第二籌に還す、鐫つて佛と做す時先づ眼を著けよ、六窓に箇の睡彌猴有り。

(九九) 昔日靈山の正法眼、芳を聯ね焰を繼ぎ今に至つて傳ふ、龍潭吹滅すれども曾て滅せず、無限の靈光大千に輝く。

一〇〇 枯木

放下全身倚斷崖 風磨雨洗幾千回
皮膚脫落有眞實 刀斧從教斫不開

(一〇〇) 全身を放下して斷崖に倚る、風磨し雨洗ふ幾千回ぞ、皮膚脫落して眞實のみあり、刀斧さもあらばあれ斫れども開かず、

一〇一 太虛

高而無上廣無涯 天地如何覆載伊
徧界不藏空索々 從他日炙與風吹

(一〇一) 高うして上無く廣うして涯りなし、天地如何ぞ伊を覆載せん、徧界藏さず空索々、さもあらばあれ日炙ると風吹くと。

一〇二 無覓

道也須臾不可離 可離非道莫尋思
且看百丈下堂句 喚便回頭是阿誰

(一〇二) 道は須臾も離るべからず、離るべきは道にあらす尋思すること莫れ、且く看よ百丈下堂の句、喚べば便ち頭を回らす是れ阿誰ぞ。

一〇三 玉泉

秋沈古澗湛無波 瞪目遭人檢點多
掬水漏卮猶易滿 白珪之玷竟難磨

(一〇三) 秋、古澗に沈んで湛として波無し、瞠目人の檢點に遭ふこと多し、水を掬すれば漏卮猶ほ満ち易く、白珪の玷けたるは竟に磨し難し。

一〇四 覺天

始本元來只一心 冰寒槩苦莫推尋
無明雲翳難遮處 一亘虛空不掛針

(一〇四) 始本元來只一心、冰寒槩苦推尋すること莫れ、無明の雲翳遮り難き處、一亘の虚空針を掛けず。

一〇五 無禪

達磨不曾來東土 神光不亦往西天
可憐汝等噎酒漢 千里尋師結怨冤

(一〇五) 達磨曾て東土に來らず。神光亦西天に往かず、憐むべし汝等噎酒の漢、千里師を尋ねて怨冤を結ぶことを。

一〇六 默山

從來妙唱不干舌 石裂崖崩未足耐
摩竭當時行此令 崔嵬突出一尖頭

(一〇六) 從來の妙唱は舌に干らず、石裂け崖崩るゝも未だ耐ゆるに足らず、摩竭當時此令を行す、崔嵬突出す一尖頭。

一〇七 松岩

尊者將身墮黑山 空花翳眼被他瞞
鶴飛千尺冲天去 月滿舊巢風露寒

(一〇七) 尊者身を將つて黑山に墮す、空花眼に翳じて他に瞞ぜらる、鶴飛んで千尺天に沖り去る月は舊巢に満ちて風露寒し。

一〇八 松 岩

亭々千尺拂雲青 雪後始知持節貞
更不懸崖重撒手 風聲認作雨聲聽

一〇九 悟 庵

一聲寒角發烟村 調入梅花不忍聞
寂々官街無醉客 有誰來扣五更門

一一〇 默 翁

西來直指本無言 開口分明是禍門
莫怪老僧三寸密 晴天迸出怒雷奔

一一一 照 庵

靈光不昧鬪體前 錯認單明一色邊
半夜閉門推月出 和衣放倒一牀眠

(一〇八) 亭々として千尺雲を拂うて青し、雪後始めて知る節を持して貞なることを、更に懸崖に重ねて手を撒せずんば、風聲認めて雨聲の聽を作さん。

(一〇九) 一聲の寒角烟村に發す、調へ梅花に入つて聞くに忍びず、寂々たる官街醉客無し、誰有つて來つて五更の門を扣かん。

(一一〇) 西來の直指本言はなし、口を開けば分明に是れ禍門、怪しむ莫れ老僧三寸の密なることを、晴天迸出して怒雷奔る。

(一一一) 靈光不昧鬪體の前、錯つて單明一色邊を認む、半夜門を閉ぢて月を推し出す、衣に和して放倒す一牀の眠り。

一一二 同

晝見日兮夜見星 當軒大坐眼雙明
東西四七二三祖 入此門來滅一燈

一一三 寶 山

法界圓融藏海寬 須彌百億現毛端
七金五嶽皆朝揖 八萬由旬削玉寒

一一四 鐵 關

八金剛杵擊難開 一鍬何曾破的來
若具入門辨主眼 銀山容爾轉身回

一一五 默 山

理盡詞窮離語言 眸凝幕々幾烟雲
虛空迸裂須彌碎 靠倒維摩不二門

(一一二) 晝は日を見夜は星を見る、當軒大坐眼雙明、東西四七二三の祖、此門に入り來つて一燈を滅す。

(一一三) 法界圓融して藏海寬し、須彌百億毛端に現す、七金五嶽皆な朝揖す、八萬由旬玉を削つて寒し。

(一一四) 八金剛の杵撃てども開きがたし、一鍬何んぞ曾つて的を破り來らん、若し門に入つて主を辨する眼を具せば、銀山爾に容す轉身して回ることを。

(一一五) 理盡き詞窮つて語言を離る、眸は凝る幕々たる幾烟雲ぞ、虚空迸裂して須彌碎く、靠倒す維摩不二の門。

一一六 玉 峯

秘在形山那一寶 騰今耀古發光輝
懸空一擊々碎了 八面玲瓏露嶮巖

一一七 隱 山

泥牛鬪入海中時 消息渾無地卓錫
救得這般擔板漢 藕絲孔裏上須彌

一一八 虛 菴

重三疊々變成五 一位何曾屬正偏
半夜月圓當戶照 屋簷頭上別無天

一一九 絕 同

走過枯木岩前路 轉却單明一色功
類不齊兮混不得 蘆花明月一江風

(一一六) 形山に秘在す那一寶、今に騰り古に輝いて光輝を發す、空に懸けて一擊に擊碎し了らば、八面玲瓏嶮巖を露す。

(一一七) 泥牛鬪つて海中に入る時、消息渾て錫を卓するに地無し、這般の擔板漢を救ひ得て、藕絲孔裏より須彌に上せん。

(一一八) 重三疊々變じて五となる、一位何んぞ曾つて正偏に屬せん、半夜月圓にして戸に當つて照す、屋簷頭上別に天なし。

(一一九) 枯木巖前の路走過して、單明一色の功を轉却す、類して齊しからず、混じて得ず、蘆花明月一江の風。

一二〇 鐵 山

仰彌高處鑽彌固 打硬工夫百煉時
萬仞懸崖進一步 針鋒突出五須彌

一二一 畫 橋

兩岸蒼烟山有色 一川明月水無聲
毫端點出機前路 人在虹蜺背上行

一二二 無 方

單々參得趙州禪 只守一隅欠轉路
回首浮幢王刹表 直下面南看北斗

一二三 同

法界圓融歸一念 重々華藏眼中花
善財若是真男子 百十城南不問他

(一二〇) 仰げば、彌よ高き處鑽れば彌よ固し、打硬の工夫百煉の時、萬仞懸崖に一步を進む、針鋒突出す五須彌。

(一二一) 兩岸の蒼烟山に色あり、一川の明月水に聲なし、毫端點出す機前路、人は虹蜺背上に在つて行く。

(一二二) 單々に參得す趙州の禪、只一隅を守つて轉路を欠く、首を浮幢王刹の表に回らさば、直下面南に面つて北斗を看ん。

(一二三) 法界圓融して一念に歸す、重々華藏眼中の花、善財若是れ眞の男子ならば、百十城南他に問はず。

一二四 圓 觀

大虛不蔽片雲遮 幻翳猶生眼裏花
打破鏡來重鑄像 看來一點不瞞他

一二五 照 庵

透脫法身二種光 豎拳消息百商量
當陽至鑑難逃處 未入門來勘賊贓

一二六 雪中懷古

滿庭積雪白漫々 已覺風威徹骨寒
良久無言重佇立 此心擬向那邊安

一二七 雪中示寂山

一夜庭前三尺雪 寒威徹骨立人稀
少林斷臂得髓旨 只許拚身來者知

一二八 同

虛空粉碎化微塵 大地平沈不見人
枯木乍開花一點 喚回空劫已前春

一二九 同

珠簾捲起水晶宮 冷坐洞然明白中
半夜日輪當午照 從前一色却成空

一三〇 同

大地削成白象牙 普賢毛孔出山河
重々示現神通力 粉碎虛空雨雜花

一三一 同

白銀世界玻璃地 一色明邊絕點埃
更把虛空粉碎看 不萌枝上放花開

(一二四) 大虛片雲蔽うて遮らず、幻翳猶生ず眼裏の花、鏡を打破し來つて重ねて像を鑄る、看來れば一點も他を瞞せず。

(一二五) 法身二種の光を透脱して、拳を豎つるの消息百商量、當陽の至鑑逃れ難きところ、未だ門に入り來らざるに賊贓を勘す。

(一二六) 滿庭の積雪白漫々、已に風威の骨に徹して寒きを覺ゆ、良久言無く重ねて佇立す、この心那邊に向つてか安ぜんとな擬す。

(一二七) 一夜庭前三尺の雪、寒威骨に徹して立つ人稀なり、少林斷臂得髓の旨、只許す身を拚て來る者の知らんことを。

(一二八) 虛空粉碎して微塵を化す、大地平沈して人を見ず、枯木乍ち開く花一點、喚び回す空劫已前の春。

(一二九) 珠簾捲起す水晶宮、冷坐す洞然明白の中、半夜日輪午に當つて照す、從前の一色却つて空と成る。

(一三〇) 大地削り成す百象牙、普賢の毛孔山河を出す、重々に示現す神通力、虛空を粉碎して雜花を雨ふらす。

(一三一) 白銀世界玻璃の地、一色明邊點埃を絶す、更に虛空を把つて粉碎して看よ、不萌枝上花を放つて開く。

一三二 示講主歸禪

入海算沙徒自勞 纔投祖室便知非
寒溫動靜知慚愧 十二時中善護持

一三三 因月憶馬祖

八月秋風開木犀 中庭將遇月明時
翁々八十出場屋 兩々三々誑小兒

一三四 坐中有感 四首

心空境寂體如々 日下孤燈獨照時
一色那邊機轉位 玉樓飛出鳳凰兒

一三五 同

枯木岩前坐白雲 冷湫々地著渾身
鐵牛不喫三春艸 吼破寒潭月一輪

(一三二) 海に入つて沙を算て徒に自ら勞す、
纔に祖室に投じて便ち非を知る、寒溫動靜に慚愧
を知つて、十二時中善く護持せよ。

(一三三) 八月秋風木犀開く、中庭將に月の明
なるに遇はんとする時、翁々八十場屋を出で、兩
々三々小兒を誑かす。

(一三四) 心空境寂にして體如々、日下の孤燈獨
照の時、一色那邊機位を轉ず、玉樓飛び出す鳳凰
兒。

(一三五) 枯木岩前白雲に坐す、冷湫々地渾身を
著く、鐵牛は喫せず三春の艸、吼え破る寒潭の月
一輪。

一三六 同

衲被蒙頭休萬機 心如牆壁眼如眉
一條古路長荒艸 家破人亡何處歸

一三七 同

念々無常代謝新 浮生安得長久身
百年三萬六千日 蝴蝶夢中空度春

一三八 示 人

懸崖撒手下工夫 舉覺商量一點無
要見本來真面目 長連牀上背廬都

一三九 同

五蘊山中認主人 一呼一諾自惺々
無明雜毒入心了 倒瀉黃河洗不清

(一三六) 衲被蒙頭萬機を休す、心牆壁の如く眼
は眉の如し、一條の古路荒艸長ず、家破れ人亡じ
て何處にか歸せん。

(一三七) 念々無常にして代謝新なり、浮生安ん
ぞ長久の身を得ん、百年三萬六千日、蝴蝶夢中空
しく春を渡る。

(一三八) 懸崖に手を撒して工夫を下す、舉覺商
量一點も無し、本來眞の面目を見んと要せば、長
連牀上の背廬都。

(一三九) 五蘊山中に主人を認む、一呼一諾自
ら惺々、無明の雜毒心に入り了らば、倒まに黃河
を瀉いで洗へども清からず。

一四〇 鳳山山居

一抹輕烟遠近山 展成淡墨畫圖看
目前分外清幽意 不是道人俱話難

一四一 同

截斷人間是與非 白雲深處掩柴扉
當軒栽竹別無意 祇待鳳凰來宿時

一四二 同

名韁利鎖留不住 晦跡烟霞水石中
折脚鐺兒煎野菜 住山自效古人風

一四三 同

艸屋單丁二十年 未持一鉢望人烟
千林果熟攜籃拾 食罷谿邊枕石眠

(一四〇) 一抹の輕烟遠近の山、展べて淡墨の畫圖と成して看る、目前分外清幽の意、是れ道人にあらば俱に話すること難し。

(一四一) 人間の是と非とを截斷して、白雲深き處柴扉を掩ふ、軒に當つて竹を栽う別に意なし、祇鳳凰來宿の時を待つのみ。

(一四二) 名韁利鎖留むれども住まらず、跡を烟霞水石の中に晦ます、折脚の鐺兒野菜を煎る、住山自ら古人の風に効ふ。

(一四三) 艸屋單丁たること二十年、未だ一鉢を持して人烟を望まず、千林果熟して籃を携へて拾ふ、食し罷んで谿邊石に枕して眠る。

一四四 同

萬像之中獨露身 更於何處著根塵
回首獨倚枯藤立 人見山兮山見人

一四五 同

焚香獨坐長松下 風吹寒露濕禪衣
有時定起下雙澗 瓶汲五更殘月歸

一四六 同

空林卓錫卜幽栖 冷淡寒風實可悲
荷葉滿池無線補 白雲爲我坐禪衣

一四七 同

終日搬柴運水中 分明顯露主人公
三千日月觀成敗 坐斷須彌第一峰

(一四四) 萬像之中獨露身、更に何れの處に於いてか根塵を著けん、首を回らして獨枯藤に倚つて立たば人は山を見、山は人を見る。

(一四五) 香を焚いて獨座す長松の下、風寒露を吹いて禪衣を濕す、有る時は定より起つて雙澗に下り、瓶には五更の殘月を汲んで歸る。

(一四六) 空林に錫を卓して幽栖を卜す、冷淡の家風實に悲しむべし、荷葉池に滿つるも線の補ふ無し、白雲我が坐禪の衣となる。

(一四七) 終日柴を搬び水を運ぶ中、分明に顯露す主人公三千の日月成敗を觀る、坐禪す須彌の第一峯。

一四八 因 事

會慣南能避世難 暫辭雲水下人間
一瓊一鉢隨緣住 到處無心便是山

一四九 同

幸作福田衣下身 乾坤贏得一閑人
有緣卽住無緣去 一任清風送白雲

一五〇 同

一鉢隨緣度歲華 禦寒亦有一袈裟
無心常伴白雲坐 到處青山便是家

一五一 答洞上宗要

新豐一曲唱家風 白雲陽春調不同
彩鳳舞風銀漢曉 祥雲半掩紫微宮

(一四八) 會て南能の世難を避くるに慣ひ、暫らく雲水を辭して人間に下る、一瓊一鉢縁に隨うて住す、到るところ無心なれば便ち是れ山。

(一四九) 幸に福田衣下の身と作る、乾坤贏ち得たり一閑人、縁あれば即ち住す縁なければ去る一任す清風の白雲を送るに。

(一五〇) 一鉢縁に隨つて歲華を送る、寒を禦ぐにも亦一袈裟あり、無心常に白雲に伴つて坐す、到る處の青山 便是れ家。

(一五一) 新豐一曲家風を唱ふ、白雪陽春調べ同じからず、彩鳳風に舞ふ銀漢の曉、祥雲半ば掩ふ紫微宮。

一五二 鎮西道中有感

祖道嘆見日日衰 西風幾度淚沾衣
蚌腸含月深々意 水遠山遙說向誰

一五三 偶 作

倒騎佛殿入燈籠 逆順門中有路通
頂上鐵枷重脫下 可聞秋雨送梧桐

一五四 同

翻身踢倒鐵圍山 日月輪邊仰面看
此土西天無佛祖 黑花猫子面門斑

一五五 山中偶作

庵内主人庵外參 靜中消息閑中看
道人未必居雲外 到處無心便是山

(一五二) 祖道嘆き見る日に日に衰ふことを、西風幾度か涙衣を沾す、蚌腸月を含む深々たる意水遠く山遙かにして誰にか説向せん。

(一五三) 倒まに佛殿に騎つて燈籠に入る、逆順門中路の通する有り、頂上の鐵枷重ねて脱下せば聞くべし秋雨の梧桐を送ることを。

(一五四) 身を翻し踢倒す鐵圍山、日月輪邊仰面して看る、此土西天佛祖無し、黒花の猫子面門斑なり。

(一五五) 庵内の主人庵外に參す、靜中の消息閑中に看る、道人未必しも雲外に居せず、到處無心なれば便ち是れ山。

一五六 示 僧

瞬目揚眉第二機 拈槌豎拂涉多岐
衲僧相見迴然別 纔上門來隔鐵圍

(一五六) 瞬目揚眉第二機、拈槌豎拂多岐に渉る衲僧の相見迴然として別なり、纔かに門に上り來らば鐵圍を隔つ。

一五七 同

揮斧破柴四五束 提刀擇菜兩三莖
道人受用只如此 有甚菩提道可成

(一五七) 斧を揮うて柴を破る四五束、刀を提げて菜を擇ぶ兩三莖、道人の受用只此の如し、甚の菩提道の成すべきかあらん。

一五八 山 居

方袍圓頂做僧形 何用波々競利名
山上有柴谿有水 林間最好養殘生

(一五八) 方袍圓頂僧形を做す、何んぞ用ひん波々として利名を競ふことを、山に柴あり谿に水あり、林間最も好し殘生を養ふに。

一五九 偶 作

脫殼烏龜倒上天 須彌山頂翻筋斗
恰值老僧坐地爐 自燒糞火食紫芋

(一五九) 脫殼の烏龜倒まに天に上る、須彌山頂に筋斗を翻す、恰も老僧が地爐に坐して、自ら糞火を燒いて紫芋を食ふに値ふ。

一六〇 示 人

晝入荒村行乞食 夜歸林下坐安禪
出家親踐古人道 糞掃許他迦葉傳

(一六〇) 晝は荒村に入つて行いて食を乞ひ、夜は林下に歸つて坐して安禪す、出家親しく古人の道を踐む、糞掃は他の迦葉の傳を許す。

一六一 城中偶作

三界悠悠不定蹤 或居林下或城中
花街柳巷東西走 古路揚塵勃々風

(一六一) 三界悠悠々として蹤を定めず、或は林下に居し或は城中、花街柳巷東西に走る、古路塵を揚ぐ勃々たる風。

一六二 偶 作

萬兩黃金散面前 千條翠柳鎖輕烟
娑婆世界無寒暑 七佛遺蹤在竺乾

(一六二) 萬兩の黄金面前に散す、千條の翠柳輕烟を鎖す、娑婆世界寒暑なし、七佛の遺蹤竺乾に在り。

一六三 同

寂光明土娑婆界 色裏膠青水上波
浩々村歌兼社舞 負恩者少報恩多

(一六三) 寂光明土娑婆界、色裏膠青水上波、浩々たる村歌と社舞と、恩に負く者は少く恩を報ずるものは多し。

一六四 示 僧

五蘊山中認識神 堪悲喚作本來人
根塵四大共消落 萬象之中獨露身

一六五 同

掀翻地軸與天關 未免瞞人卻自瞞
敲落遼天鼻孔了 拈來換却竹筒看

一六六 示明照大師

大千沙界一蒲團 萬別千差裏許看
堪笑少林胡達磨 九年面壁太無端

一六七 聽 竹

一擊聲中忘所知 分明更不假修持
夜來風撼庭前竹 莫是香嚴落節時

一六八 送僧禮石橋

遠訪天台五百僧 六環搖月去飛騰
冤憎會苦難迴避 莫看千峰疊碧層

一六九 送僧之大元

大唐國裏訪禪師 正值天寒雪片飛
看爾蒸沙做飯喫 幾時一飽百年飢

一七〇 送僧之京

烏雞生出玉鸚鵡 飛上丹青化鳳雛
猶有一段公案在 白雲西北是京都

一七一 同

線痕不帶鉢囊花 踏破湖山幾片霞
有意氣時添意氣 平安九萬八千家

大智禪師偈頌

(一六四) 五蘊山中に識神を認む、悲むに堪へたり喚んで本來人と作すことを、根塵四大共に消落す、萬象之中獨露身。

(一六五) 地軸と天關とを掀翻して、未だ免れず人を瞞じ却つて自らを瞞することを。遼天の鼻孔を敲落し了つて、拈じ來つて竹筒に換却して看よ

(一六六) 大千沙界一蒲團。萬別千差裏許に看る笑ふに堪へたり少林の胡達磨、九年面壁太だ端無し。

(一六七) 一擊聲中所知を忘す。分明に更に修持を假らず、夜來の風は庭前の竹を撼す是れ香嚴落節の時なること莫らんや。

(一六八) 遠く天台五百の僧を訪ふ、六環月に揺し去つて飛騰す、冤憎會苦迴避し難し、千峰の疊碧層を看ること莫れ。

(一六九) 大唐國裏に禪師を訪ふ、正に天寒うして雪片の飛ぶに値ふ、看よ爾が沙を蒸して飯と做して喫することを、幾時か一飽せん百年の飢。

(一七〇) 烏雞生出す玉鸚鵡、飛んで丹青に上つて鳳雛と化す、猶ほ一段の公案の在る有り、白雲の西北是れ京都。

(一七一) 線痕鉢囊を帯びて花ならず、踏破す湖山幾片の霞、意氣ある時、意氣を添ふ、平安九萬八千家。

一七二 送體長老赴天皇請

借伴經過異類中 耕雲種月起家風
靈機豈墮今時路 蘆雪交光似不同

一七三 送同參

手脚未安本位中 舉心動念逞英雄
是何富士山頭雪 六月皎然玉倚空

一七四 送僧之大元

冷煖分明只自知 男兒豈可被人欺
莫將日本真金貴 博易大唐鑰子歸

一七五 同

一見青龍港外山 大唐佛法遍咨參
烏藤拗折成兩段 勘破南方五十三

一七六 同

蓬萊元是在東海 白日無風浪拍天
不肖上人心即佛 遠浮大舶望中原

一七七 送源上人

火種刀耕三十歲 勸勞須效古人風
胸中若蘊英靈氣 他日應興洞上宗

一七八 送僧

濟北兒孫膽氣龜 胡爲不善慎當初
爾今中路歸黃檗 莫近禪床捋虎鬚

一七九 同

孟冬初五來辭我 東出洛陽城外門
若到諸方恁麼舉 不須問訊謝寒溫

(一七二) 伴を借つて結過す異類の中、耕雲種月
家風を起す。靈機豈今時の路に墮せんや、蘆雪光
を交へ似て同じからず。

(一七三) 手脚未だ安からず本位の中、舉心動念
英雄を逞うす、是れ何ぞ富士山頭の雪、六月皎
然玉空に倚る。

(一七四) 冷煖分明に只自知す、男兒豈人に欺か
るべけんや、日本真金の貴きを將つて、大唐の鑰
子に博易して歸ること莫れ。

(一七五) 一たび青龍港外の山を見て、大唐の佛
法遍く咨參す、烏藤拗折して兩段と成し、勘破す
南方の五十三。

(一七六) 蓬萊元是れ東海に在り、白日風無うし
て浪天に拍す、上人の心即佛を肖はす、遠く大舶
を浮べて中原を望む。

(一七七) 火種の刀耕三十歳、勸勞須く古人の
風を効ふべし、胸中若し英靈の氣を蘊まば、他日
應に洞上の宗を興すべし。

(一七八) 濟北の兒孫膽氣龜なり、胡んすれぞ善
く當初を慎まざる、爾今中路に黃檗に歸り、禪床
に近いて虎鬚を捋ること莫れ。

(一七九) 孟冬初五來つて我れを辭す、東のかた
洛陽城外の門を出づ、若し諸方に到つて恁麼に舉
せば、問訊して寒溫を謝することを須ひされ。

一八〇 送僧見洞峰

栽松當路礙人枝 未入門先省阿師
三展炊巾禮老朽 知恩豈有報恩時

一八一 送行

浙々秋風葉々聲 煩君千里問歸程
老僧頻把藕絲繫 奈爾離情鐵鑄成

一八二 送僧遊大元

太白曾經下鄧峰 萬松堪聽起清風
雖然未敢通華語 知識堂前不患聾

一八三 同

未跨船舷三十棒 現成公案脫規模
大唐國裏無人斷 急急歸來捋虎鬚

(一八〇) 松を栽ゑて路に當る人を礙ふる枝、未だ門に入らざるに先づ阿師を省よ、三たび炊巾を展べて老朽を禮せば、恩を知つて豈恩を報ずる時有らんや。

(一八一) 浙々たる秋風葉々の聲、君を煩はして千里歸程を問ふ、老僧頻に藕絲を把つて繫ぐも、爾が離情の鐵鑄し成すを奈せん。

(一八二) 太白曾つて經て鄧峰に下る、萬松聽くに堪へたり清風を起すことを、然かも未だ敢て華語に通ぜずと雖も、知識堂前患聾ならず。

(一八三) 未だ船舷を跨らざるに三十棒、現成公案規模を脱す、大唐國裏人の斷する無くんば、急急に歸り來つて虎鬚を捋でよ。

一八四 送僧之關東

秋老山々黃葉多 路頭一錯去離家
陽關雖遠不曾遠 摩捋烏藤看若何

一八五 同

洞家一段別無求 飢飡困眠萬事休
一樣蘆花明月夜 細看白鳥下汀洲

一八六 僧見洞谷和尚

清淨法身活卓々 分明遍界不遮藏
等他老漢搖三寸 掀倒禪牀可下堂

一八七 送僧之萬壽

萬壽鉗錘辣更辛 大開爐鞴接來賓
門前一徑多松柏 切忌當頭觸主人

(一八四) 秋老いて山々黃葉多し、路頭一び錯り去つて家を離る、陽關遠しといへども曾つて遠からず、烏藤を摩捋して若何と看よ。

(一八五) 洞家一段別に求むるなし、飢えて喰ひ困じて眠る萬事休す、一樣の蘆花明月の夜、細みに看よ白鳥汀洲に下ることを。

(一八六) 清淨法身活卓々、分明に遍界遮藏せず、他の老漢の三寸を搖さんを等つて、禪牀を掀倒して堂を下るべし。

(一八七) 萬壽の鉗錘辣更辛、大いに爐鞴を開いて來賓を接す、門前の一徑松柏多し、切忌當頭に主人に觸るゝことを。

一八八 送瞿維那省本師

克賓再去見興化 要索當年饋飯錢
法戰場中得勝了 莫饒臨濟打爺拳

(一八八) 克賓再び去つて興化に見ゆ、當年の饋飯錢を索めんと要す、法戰場中に勝を得了らば、臨濟打爺の拳を饒すこと莫れ。

一八九 悼洞谷和尚

隻履翩翩携手歸 碧雲深處日沈西
新豐換調無生曲 瑟瑟悲風滿地吹

(一八九) 隻履翩翩手に携へて歸る、碧雲深きところ日西に沈む、新豐調は換ふ無生の曲、瑟瑟たる悲風滿地に吹く。

一九〇 同

金剛正體赤條々 端的髑髏消未消
若是洞山真種草 拈來火後一莖茅

(一九〇) 金剛の正體赤條々、端的髑髏消して未だ消せず、若是れ洞山眞の種草ならば、拈じ來れ火後の一莖茅。

一九一 同

兩處住山三十年 曾無一法與人傳
虛空吐出廣長舌 罵雨呵風不說禪

(一九一) 兩處の住山三十年、曾て一法の人に與へて傳ふる無し、虛空吐出す廣長舌、雨を罵り風を呵して禪を説かず。

一九二 同

紫羅帳外月沈時 尊貴位高猶可窺
頭上花冠拈却了 脫珍御服復名誰

(一九二) 紫羅帳外月の沈む時、尊貴位高うして猶ほ窺ふべし、頭上の花冠拈却し了る、珍御の服を脱して又誰とか名けん。

一九三 同

大用現前無軌則 出生入死有來由
藕絲竅裏藏身去 五老峰前笑點頭

(一九三) 大用現前軌則無し、出生入死來由あり、藕絲竅裏身を藏し去る、五老峯前笑つて點頭す。

一九四 同

萬里風高玉宇清 婆婆蟾桂吐香新
年々此夜中秋月 特地一場愁殺人

(一九四) 萬里風高うして玉宇清し、婆婆たる蟾桂香を吐いて新なり、年々此の夜中秋の月、特地一場人を愁殺す。

一九五 同

鳥飛兔走百千年 暑往寒來曠劫前
若謂老師曾滅度 槌胸特地哭蒼天

(一九五) 鳥飛び兔走る百千年、暑往き寒來る曠劫の前、若し老師曾て滅度すと謂はゞ、胸を槌つて、特地に蒼天と哭せむ。

一九六 同

大法猶懸一縷絲 殘膏續焰復憑誰
靈臺一點無私照 記取異苗繁茂時

(一九六) 大法猶ほ懸る一縷絲、殘膏續焰を續ぐ復誰れにか憑らん、靈臺一點私照無し、記取せよ異苗繁茂の時。

一九七 爲洞谷和尚起塔

湘南潭北撒黃金 一句團圓塔樣新
大地撮來無寸土 不知何處葬全身

(一九七) 湘南潭北黃金を撒す、一句團圓として塔樣新なり、大地撮し來るに寸土無し、知らず何れの處にか全身を葬らむ。

一九八 禮育王塔

八萬四千七寶塔 空山惟有古基留
黃金骨冷無人葬 日炙風吹百艸頭

(一九八) 八萬四千の七寶塔。空山惟古基の留まるとのみあり、黃金骨冷かにして人の葬る無し、日炙り風吹く百艸頭。

一九九 禮足庵和尚塔

宗風唱起乳峰前 雙鎖金針事理全
一夜丙丁吹火滅 三千海嶽黑如烟

(一九九) 宗風唱へ起す乳峯の前、金針を雙鎖して事理全し、一夜丙丁火を吹き滅す、三千の海嶽黒うして烟の如し。

二〇〇 悼戴家女兒

佳人一段好風流 花滿春城月滿樓
露出娘生眞面目 綺羅小扇不遮頭

(二〇〇) 佳人一段の好風流、花は春城に満ち月は樓に満つ、露出す娘生の眞面目、綺羅小扇頭を遮らず。

二〇一 禮永平塔

寶殿無人侍立空 紫羅帳合月明中
夜深誰把金針眼 繡出鴛鴦線路通

(二〇一) 寶殿人無く侍立空し、紫羅帳は合す月明の中、夜深けて誰か金針眼を把つて、鴛鴦を繡出して線路通ぜん。

二〇二 同

兜樓燒罷又三拜 是冑他兮不冑他
一段恩怨古今斷 青山重疊白雲遮

(二〇二) 兜樓燒き罷んで又三拜す、是れ他を冑するか他を冑ぜざるか、一段の恩怨今古斷す青山重疊白雲遮ざる。

二〇三 禮天衣塔

撐破爺々沒底船 葛藤椿子倒多年
只留牙齒一具骨 雨竹風松皆說禪

(二〇三) 爺々の沒底船を撐破し、葛藤椿子倒るゝこと多年、只牙齒一具の骨のみを留めて、雨竹風松皆禪を説く。

二〇四 禮永興開山塔

空堂只見綠苔封 法席無人補祖宗
滿樹落花春過後 杜鵑啼血夕陽紅

二〇五 悼雪艇和尚

白浪堆中釣錦鱗 烟波江上捲絲綸
扁舟載月歸何處 十里松行不見人

二〇六 歲晚

歲晚天寒事々窮 窮而變處變而通
今朝臘月二十五 誰和雲門一曲同

二〇七 中秋有感

萬里碧天雲沒時 二株嫩桂轉光暉
月宮不怕通身冷 要折東南第一枝

(二〇四) 空堂只見綠苔の封ずるを、法席人の祖宗を補ふなし、滿樹の落花春過ぎて後、杜鵑血に啼いて夕陽紅なり。

(二〇五) 白浪堆中錦鱗を釣り、烟波江上絲綸を捲く、扁舟月を載せて何れの處にか歸る、十里の松行人を見ず。

(二〇六) 歲晚天寒うして事々窮す、窮して變ずるところ變じて通ず、今朝臘月二十五、誰か雲門の一曲に和して同じからむ。

(二〇七) 萬里碧天雲の沒する時、二株の嫩桂光暉を轉ず、月宮には怕れず通身の冷かなること、東南第一の枝を折らんと要す。

二〇八 半夏示僧

三月安居半已過 二千年遠事如何
若云佛法無靈驗 中夏爭知毒熱多

二〇九 立春

暖日紅霞襯碧雲 無邊光景一時新
大功不宰東皇化 分付梅花管領春

二一〇 元旦

新年佛法問如何 開口不須說似他
露出東君真面目 春風吹綻臘梅花

二一一 同

新年頭有祖師禪 興國正當辛巳年
四海浪平韻眠穩 九州不見起狼烟

(二〇八) 三月安居半已に過ぐ、二千年の遠事如何、若し佛法に靈驗無しと云はゞ、中夏争で毒熱の多きことを知らんや。

(二〇九) 暖日紅霞碧雲に襯ねす、無邊の光景一時に新なり、大功不宰東皇の化、梅花に分付して春を管領せしむ。

(二一〇) 新年の佛法如何と問はゞ、口を開いて他に説似するを須ひず、露出す東君眞の面目、春風吹き綻ばす臘梅花。

(二一一) 新年頭に祖師禪あり、興國正當辛巳の年、四海浪平にして龍の眠り穩なり、九州には見ず狼烟の起ることを。

二二二 開 爐

十月正當初一日 霜風吹葉滿空階
今朝喚作開爐節 道火何曾燒口來

二二三 同

風頭稍硬大家知 且聽商量暖處歸
般若如同大火聚 近前燒却兩莖眉

二二四 同

世界火爐濶一丈 不知古鏡濶多少
落葉不禁霜後風 獼猴怕寒永夜叫

二二五 雪

一夜北風起林巒 虛空碎作爛銀盤
以紛飛究紛飛處 大地從來渾不痕

(二二二) 十月正當初一日、霜風葉を吹いて空階に滿つ、今朝喚んで開爐の節と作す、火と道ふも何んぞ曾て口を燒き來らん。

(二二三) 風頭稍硬し大家知る、且らく聽す商量暖處に歸ることを、般若は大火聚に如同す、近前すれば燒却す兩莖の眉。

(二二四) 世界火爐濶きこと一丈、知らず古鏡濶さ多少ぞ、落葉は禁へず霜後の風、獼猴寒を怕れて永夜に叫ぶ。

(二二五) 一夜北風林巒より起る、虚空碎けて爛銀盤と作る、紛飛を以て紛飛のところを究めんとすれば、大地從來渾て痕せず。

二二六 藕 花

不乾不濕淤泥裏 不濕不乾離水時
菡萏花開紅一朵 香風萬里襲人衣

二二七 同

帝網重重華藏界 一華一國一如來
何如赤肉團頭上 無位真人面門開

二二八 筍

萬物生成自有時 叢林不管著鞭遲
春風一夜生頭角 玉立莫非龍鳳兒

二二九 栽 松

大家普請去栽松 向鑊頭邊自策功
他日寸苗成大樹 蔭涼天下立吾宗

(二二六) 乾かず濕さず淤泥の裏、濕さず乾かず水を離るゝ時、菡萏花開く紅一朵、香風萬里人衣を襲ふ。

(二二七) 帝網重重華藏界、一華一國一如來、何ぞ如ん赤肉團頭の上、無位の真人面門に開かんに。

(二二八) 萬物生成自ら時あり、叢林管せず鞭を著くること遅きことを、春風一夜頭角を生ず、玉立して龍鳳兒に非ずと云ふことなし。

(二二九) 大家普請し去つて松を栽う、鑊頭邊に向つて自ら功を策す、他日寸苗大樹と成つて、天下を蔭涼して吾宗を立せん。

二二〇 竹 篋

背觸機前行正令 纔容擬議涉迂回
作家各具腕頭力 奪却拗成兩段來

二二一 同

橫拈三尺吹毛劍 背觸機前驗作家
可惜當年省驢漢 親曾拶向死邊過

二二二 蒲 團

百草頭邊祖師意 拈來受用得完全
可憐長慶稜禪客 翫弄泥團十五年

二二三 袈 裟

靈山付屬重如山 四七二三擔一肩
直道本來無一物 未應容易與他傳

二二四 同

秋風吹起秋雲碧 散作人間大福田
七百高僧爭不得 黃梅獨許老盧傳

二二五 鉢 盂

黑漫々地深無涯 不墮黃梅七百群
展盡神通機用活 翻身吞却五臺雲

二二六 香 合

圓陀々地無稜角 函蓋相應心裏空
試向爐中通一氣 檀香煙淡散清風

二二七 牛

放出瀉山水牯牛 無人緊把鼻繩頭
綠楊芳艸春風岸 倒臥橫眠得自由

大智禪師偈頌

(二二〇) 背觸機前に正令を行す、纔に擬議を容るれば迂回に渉る、作家各腕頭の力を具じ、奪却して拗して兩段と成し來れ。

(二二一) 横に三尺の吹毛劍を拈じて、背觸機前に作家を驗む、惜むべし當年の省驢漢、親しく曾て死邊に拶向して過ることを。

(二二二) 百草頭邊祖師意、拈じ來つて受用完全なることを得たり、憐むべし長慶の稜禪客、泥團を翫弄すること十五年。

(二二三) 靈山の付屬重きこと山の如し、四七二三一肩に擔ふ、直に本來無一物と道ふも、未だ容易に他に與へて傳ふべからず。

(二二四) 秋風吹き起つて秋雲碧なり、散じて人間の大福田と作る、七百の高僧争うて得ず、黃梅獨り老盧の傳ふることを許す。

(二二五) 黑漫々地深くして涯り無し、黃梅七百の群に墮せず、神通を展盡して機用活す、翻身して吞却す五臺の雲。

(二二六) 圓陀々地稜角無し、函蓋相應して心裏空す、試に爐邊に向つて一氣を通すれば、檀香煙淡うして清風に散す。

(二二七) 瀉山の水牯牛を放出して、人の緊く鼻繩頭を把ることなし、綠楊芳艸春風の岸、倒臥横眠自由を得たり。

二二八 化 燈

人々分上不曾虧 一點靈光腦後輝
教爾早知燈是火 無明暗室出多時

二二九 同

昔日靈山正法眼 燈々續焰二千年
大家各出一隻手 祖室光明萬古傳

大智偈頌終

備 考

- 一、「大智禪師偈頌」は以上にて終り、外に「逸偈錄」ありて五言絶句十三首、七言律一首、慈雲禪定門下火、發願文を集む、今は本集のみに止めたり。
- 二、注解は印抄、蓋頭、雲梯抄を始め、開解、參註、補註等あり、開解、補註最も行はる、編者嚮に各末疏を參照し、且つ自身經歷せる支那各地の實情を參酌して「大智偈頌講話」一卷を刊行し、付するに逸偈畧解を以てせり、宗内に散するもの多し、又、天桂和尚の「辯解」も近く刊行されたり。
- 三、本偈頌の一句々々は數々法問等に用ひらるゝが故に此の偈句を誦誦することは、古來參禪上須要の事なりき、今も亦之を參學者に勸む。

(二二八) 人々分上曾つて虧かず、一點の靈光腦後に輝く、偈をして早く燈は是れ火なることを知らしめば、無明の暗室出ること多時ならん。

(二二九) 昔日靈山の正法眼、燈々焰を續ぐ二千年、大家各一隻手を出さば、祖室の光明萬古に傳ふ。

第十 日用諷誦偈文部

日用諷誦偈文部解題

斯部このぶに集録しふろくするところは主しゆとして口稱くしやうの咒文じゆもん、諷誦ふうじゆの偈文げもんにして、佛敎ぶつげう徒實踐とじつせん道德だうとくの標準へうじゆん殊ことに本宗ほんしゆ僧俗そうぞく日常にちじやう行持ぎやうぢの規範きはんなり。行住坐臥ぎやうぢざう、一舉手ぎよしゆ一投足とうそく苟いしく佛敎ぶつげうを離はなれず、實行じつかうの上に佛法ぶつぽふの大真理だいしんりを顯現けんげんし、人々にん個々この脚跟きやうこん下に大安心だいはんしんを確立かくりつせんす。是れ我が綿密めんみつの宗風しゆふう、威儀ゐぎ即佛法そくぶつぽふの骨髓こつざいなり。されば洞上とうじやうの僧俗そうぞくは時處位じしよか其宜そのよろしきに應おうじて此の偈咒げじゆを諷誦ふうじゆすべきなり、亦また是等これらの偈文げもんを文學ぶんがく上じやうより見るに何れも廣大くわうだいなる佛敎ぶつげうの結晶けつしやうにして僅少きんせうの文字もんじの中實うちじつに深遠しんえんなる義ぎを含ふくみ、其理想そのりさうてきなるものに至いたりては佛敎ぶつげうの哲學てうがく、倫理りんり一切さいを網羅まうらして餘蘊よえんなし。諸偈しよげ諸咒しよじゆは其題名そのだいめいに隨したがつて應用おうようの時處じしよを推知すいちすべく、就中大慧じゆちゆうだいゑ、永平えいへい、祇陀三禪師ぎたさんぜんじの發願文はつがんもんは其の代表だいだいなるものにして、直たぢちに取とつて以もつて、吾曹われらの發願文はつがんもんとすべし。

舍利禮文

一心頂禮いつしんちやうらい萬德圓滿まんとくまんまん。釋迦如來しやくかにょらい眞身舍利しんしんしやり。本地法身ほんぢほつしん。法界塔婆ほふかいたうば。我等禮敬われららいけう爲我現身ががげんしん。入我入佛にふがにふぶつ。加持故我證菩提かぢこがしやうだいてい。以佛神力ぶつじき利益衆生りやくしゆじやう。發菩提心はつだいてしん。修菩薩行しゆぼつさうぎやう。同入圓寂平等どうにふえんじやくべうどう。大智今將頂禮だいぢこんしやうちやうらい。

舍利禮文和譯

一心しんに頂禮ちやうらいしたてまつる、萬德まんとく圓滿まんまんの釋迦しやくか如來にょらいの眞身しんしん舍利しやり、本地ほんぢの法身ほつしん、法界ほふかいの塔婆たうば、我等われら禮敬らいけうしたてまつれば、我が爲ために身みを現げんじて我われに入り我わをして入いらしめたまふ、佛はつの加持かぢの故ゆゑに我われ菩提だいていを證しょうし、佛はつの神力じんりきを以もつて衆生しゆじやうを利益りやくす、菩提だいてい心を發はつし、菩薩ぼつさつ行ぎやうを修しゆして、同じく圓寂えんじやく平等べうどうの大智だいぢに入る、今將いままに頂禮ちやうらいした

てまつらんとす。

備考

舍利禮文の訓み方には種々の異見あり、「本地の法身は法界の塔婆なり」と云ひ、「我が現身の爲に」と云ひ、「入我我入したまふ」と云ふ如し、今は通都の解を取る、亮汰師の註解書あり。

甘露門

●奉請三寶

南無十方佛、南無十方法、南無十方僧、南無本師釋迦牟尼佛、南

無大慈大悲救苦觀世音菩薩、南無啓教阿難尊者。

●招請發願

是諸衆等 發心して一器の淨食を奉持して、普ねく十方窮盡虛

空、周遍法界、微塵刹中、所有國土の一切の餓鬼に施す、先亡久遠、山川地主

乃至曠野の諸鬼神等、請ふ來つて此に集まれ、我今ま悲愍して、普ねく汝に食

を施す、願くは汝各々、我が此の食を受けて、轉じ將つて、盡虛空界の諸佛及聖、

一切の有情に供養して、汝と有情と、普ねく皆な飽滿せんことを、亦願くは汝

が身、此の咒食に乗じて、苦を離れて解脱し、天に生じて樂を受け、十方の淨

土も意に隨つて遊往し、菩提心を發し、菩提道を行じ、當來に作佛して、永く

退轉なく、前に道を得る者は、誓つて相度脱せんことを、又願くは、汝等晝夜

恒常に我れを擁護して、我が所願を滿ぜんことを、願くは此の食を施す、所生

の功德普ねく將つて法界の有情に廻施して、諸の有情と平等共有ならん、諸

の有情と共に、同じく此の福を將つて盡く將つて、眞如法界、無上菩提、一切

智智に廻向して、願くは速かに成佛して餘果を招くこと勿らん、法界の含識、

願くは此の法に乗じて、疾く成佛することを得ん。

●雲集鬼神招請陀羅尼 曩謨步布哩。迦哩多哩怛他藥多也。

●破地獄門開咽喉陀羅尼 唵步布帝哩。迦多哩。怛他藥多也。

●無量威德自在光明加持飲食陀羅尼 曩莫。薩嚩。怛佉藥多。嚩嚩吉帝唵。三

婆羅、三婆羅吽。

●蒙甘露法味陀羅尼 曩莫。蘇嚕頗也。怛佉葉多也。怛佉也佉。唵。蘇嚕蘇嚕鉢羅蘇嚕鉢羅蘇嚕娑縛賀。

●毘盧舍那一字心水輪觀陀羅尼 曩莫。三滿多。沒駄南鏝。

●五如來寶號招請陀羅尼 南無多寶如來。曩謨薄伽後帝。鉢囉步多。囉怛曩也。怛他葉多也。除慳貪業福智圓滿。南無妙色身如來。曩謨薄伽後帝。蘇嚕波耶。

●怛他葉多也。破醜陋形圓滿相好。南無甘露王如來。曩謨。婆伽後帝。阿蜜哩帝。囉惹耶怛他葉多耶。灌法身心令受快樂。南無廣博身如來。曩謨婆伽後帝。尾布

邏葉。怛羅耶。怛他葉多也。咽喉廣大飲食充飽。南無離怖畏如來。曩謨。婆伽後帝。阿婆演。迦維耶。怛他葉多耶。恐怖悉除離餓鬼趣。

●發菩提心陀羅尼 唵。冒地即多。母怛。波那野迷。

●授菩薩三摩耶戒陀羅尼 唵。三昧耶。薩怛鏝。

●大寶樓閣善住祕密陀羅尼 曩謨薩嚕怛他葉多南唵。尾補攞孽陸。麼拏鉢囉陸。

●怛佉多爾捺捨寧。摩拏摩拏。蘇鉢囉陸。尾麼黎娑葉囉。儼鼻嚕吽吽入嚕囉入嚕囉沒馱。尾盧枳帝覽呬夜。地瑟恥多。孽陸娑縛訶。唵麼拏。嚕日哩。吽唵麼拏馱哩。吽泮吒。

●諸佛光明眞言灌頂陀羅尼 唵阿暮伽。癡嚕者娜。摩訶祇唵囉。摩拏鉢頭麼入縛囉。跋囉鞞利。鞞野吽。

○撥遣解脫陀羅尼 唵嚕曰羅。目乞灑穆。

●回向偈 以此修行衆善根 報答父母劬勞德 存者福樂壽無窮 亡者離苦生安養

●四恩三有諸含識 三途八難苦衆生 俱蒙悔過洗瑕疵 盡出輪迴生淨土。

●右和譯 此に衆の善根を修行して、父母劬勞の徳に報答したてまつる、存者は福樂にして壽窮り無く、亡者は苦を離れて安養に生ぜん、四恩三有諸の含

識、三途八難苦の衆生、俱に悔過を蒙つて瑕疵を洗ひ、盡く輪廻を出で、淨

土に生ぜんことを。

備考

甘露門の撰述無き前に、大施食文と云ふあり、俗に「若人欲了知(シヤジンニレウシー)と云ふ、嘗て曹洞宗にても用ひたれども、今は甘露門のみを用ふ、故に今は掲げず。

大慧普覺禪師發願文

唯だ願はくは道心堅固にして長遠に退かず、四體輕安にして身心勇猛に衆病悉く除いて、昏散速に消し、難無く災無く、魔無く障無く、邪路に向はず、直に正道に入り、煩惱消滅して智慧増長し、頓に大事を悟つて、佛の慧命を續ぎ、諸の衆生を度し、佛祖の恩に報ぜん、次に冀くは某甲命終の時に臨んで少病少惱、七日以前預め死の至るを知り、安住正念にして末後自在に、此身を捨て速に佛土に生じ、面たり諸佛に見え、正覺の記を受け、法界に分身して遍く衆生を度せんを十方三世一切諸佛、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜。

永平道元禪師發願文

願はくは我と一切衆生と、今生より乃至生々を盡して正法を聞くことあらん、聞くことあらん時、正法を疑著せじ不信なるべからず、正に正法に値はん時世法を棄てて佛法を受持せん、遂に大地有情と共に成道することを得ん、願はくは我たとひ、過去の惡業多く重なりて障道の因縁ありとも、佛道によりて得道せりし諸佛諸祖我を愍みて業累を解脱せしめ。學道障りなからしめ、其功德法門、普く無盡法界に充滿彌淪せらん愍みを我に分布すべし、佛祖の往昔は我等なり、我等が當來は佛祖ならん、佛祖を仰觀すれば一佛祖なり、發心を觀想するにも一發心なるべし、あはれみを七通八達せんに得便宜なり、落便宜なり、是故に龍牙の曰はく、昔生未だ了ぜずんば、今須く了すべし、此の生に累生身を度取せよ、古佛未だ悟らずんば今者に同じ、悟了すれば今人も即ち古人須く靜かに此の因縁を參究すべし、是れ證佛の承當なり、是の如く懺悔すれば則ち必ず佛祖の冥助あるなり、心念身儀發露白佛すべし、發露の力罪根をし

て消殞せしむるなり、

是れ一色の正修行なり、

正信心なり、

正信心なり、

備考

「落便宜なり」にて打切りたる説もあり、又、西有穆山和尚は龍牙の語を「昔生未了今須了、此生度取累生身、古佛未悟同今者、悟了今人即古人」と音讀せしめたり、孰れにても意に害無し。

祇陀大智禪師發願文

願はくは、我れこの父母所生の身を以て三寶の願海に回向す、一動一靜、法式にたがはず、今身より佛身に至るまで、その中間に於て、生生世世出生入死、佛法を離れず、在所所に廣く衆生を度して疲厭を生ぜず、或は劍樹刀山の上、或は鑊湯爆炭のうち、唯この正法眼藏を以て重擔と爲して、隨所に主宰と成らん、伏して願はくは、三寶證明し、佛祖護念し玉はんことを。

七佛通誠の偈

諸惡莫作 衆善奉行 自淨其意 是諸佛教

雪山の偈

諸行無常 是生滅法 生滅々已 寂滅爲樂

梵唄文

如來妙色身 世間無與等 無比不思議 是故今敬禮 如來色無盡 智慧亦復然 一切法常住 是故我歸依

見佛の偈

若見佛時 當願衆生 得無礙眼 見十方佛

燒香の偈

戒香定香解脫香 光明雲臺遍法界 供養十方無量佛僧 見聞普薰證 寂滅

禮拜の偈

偈 咒

能禮所禮性空寂 自身他身體無二 願共衆生得解脫 發無上意歸真際

讚佛の偈
容顏甚奇妙 光明照十方 我適曾供養 今復還親近
懺悔の文

我昔所造諸惡業 皆由無始貪瞋癡 從身口意之所生 一切我今皆懺悔

三歸戒

南無歸依佛 南無歸依法 南無歸依僧 歸依佛無上尊 歸依法離塵尊 歸依僧
和合尊 歸依佛竟 歸依法竟 歸依僧竟

三歸の偈

自歸依佛 當願衆生 體解大道 發無上心 自歸依法 當願衆生 深入經藏 智慧如海 自歸依僧 當願衆生 統理大衆 一切無礙

四弘誓願文

衆生無邊誓願度 煩惱無盡誓願斷 法門無量誓願學 佛道無上誓願成

散華の偈

散華莊嚴徧十方 散衆寶華以爲帳 散衆寶華徧十方 供養一切諸如來

誕生會浴佛の偈

我今灌沐諸如來 淨智莊嚴功德聚 五濁衆生令離垢 同證如來淨法身

佛像開眼の偈

偈 咒